ISSN 0918-3035

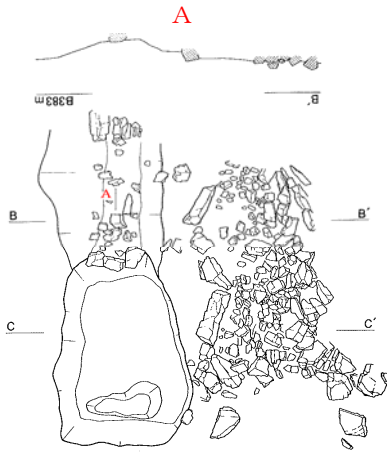
総社市埋蔵文化財調査年報 9

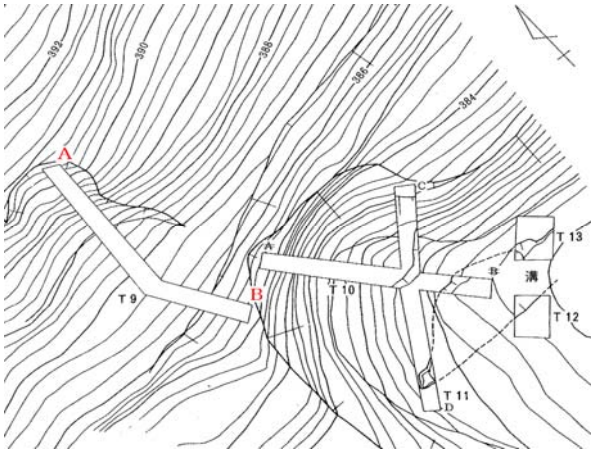
（平成10年度）

1999年12月

総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財調査年報９（平成10年度）

ページ	位　　置	訂正前	訂正後
1	８行目	(H11.7.1～)	(H10.7.1～)
	９行目	(H11.7.1～)	(H10.7.1～)
2	表１の98003	P29・31	P29～31
	表１の98004	P32・38	P32～38
	表１の98005	P115・127	P115～127
4	表２の21	(粘質度)	(粘質土)
6	第３図	(S=1/40,000)	(S=1/80,000)
9	第６図	(S=1/80)	(S=1/60)
11	第８図	(S=1/80)	(S=1/60)
21	第18図	(S=1/600)	(S=1/800)
		15m	20m
33	第30図	(S=1/100)	(S=1/300)
54	第43図	A′ 386m	A′ 385m
56	第44図	T15	T17
		T16	T18
59	第45図	(S=1/100)	(S=1/120)
75	第54図	A′ 382m	A′ 381m
		D′ 383m	D′ 384m
78	第57図	「スケールの数字欠落」	
79	第58図	２m	1.5m
81	第60図	第60図　Ｔ２・５・８断面図	第60図　Ｔ１・５・８断面図
		Ｔ２	Ｔ１
82	４行目	Ｔ２	Ｔ１
84	第61図	「記号の欠落」	

84	第61図	9	8
86	第62図	「トレンチの断面記号の位置」	A　B 
	第63図	D 383m	B 386m
		386m	389m

序

総社市は，古代において吉備そして備中国の中心として大いに栄えていたところとして広く知られています。そのため市内には数多くの埋蔵文化財が所在し，開発，あるいは史跡整備等にともない発掘調査が行われています。

ここに刊行する『総社市埋蔵文化財調査年報』はその発掘調査成果を少しでも早く多くの方々に公開することを主目的として平成３年度に平成元・二年度の調査成果をまとめて発刊し，今回で９集目，内容的には10年目と一つの区切りをむかえます。刊行を重ねるごとに報告の数も量も増しており，これは発掘調査数の増加と量の大規模化傾向にあることを裏付けています。

先人の残した足跡の上にわたしたち総社の歴史的風土ははぐくまれ，それを来る21世紀にも伝え残すため，埋蔵文化財の保存と活用は重要な課題となります。そのためにも関係各位におかれましてはより一層の御理解と御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成11年12月

総社市教育委員会

教育長　秋　田　皓　二

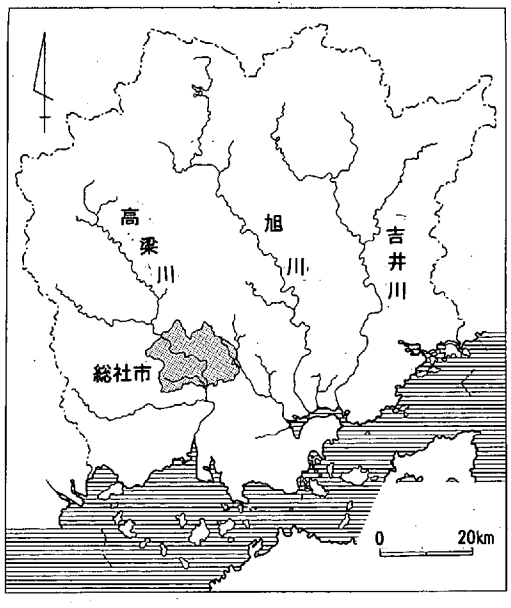
例　　言

1．本書は，総社市教育委員会が平成10年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査および立会・確認調査等について，その概要もしくは報告をまとめたものである。

2．本書の作成は，各調査の担当者が分担・執筆し，それをまとめたもので，各文末に執筆担当者名を記し，文責とする。執筆は文化財室職員，谷山雅彦・武田恭彰・平井典子・高橋進一・松尾洋平・前角和夫と，埋蔵文化財学習の館館長村上幸雄が行い，編集は前角が行った。本文は，執筆者の原稿のままとし，用語などについて統一はしていない。

3．本書で使用した方位には，真北（NN）と磁北（MN）との区別をしているものがある。

4．本書に関する写真や図面，出土遺物等については，総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。



位置図

目　　次

序　　文

例　　言

1．総社市埋蔵文化財行政の概要 …… 1

2．立会および確認調査の概要

診療所建設にともなう確認調査 …… 7

店舗造成に伴う立会調査 …… 8

共同住宅造成に伴う確認・立会調査 …… 10

駅前一丁目共同住宅建設に伴う立会調査 …… 15

アパート建設に伴う立会調査 …… 18

店舗新築工事に伴う立会調査 …… 20

工場造成工事に伴う試掘調査 …… 22

岩屋寺出土の遺物について …… 24

3．発掘調査の概要

総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事に伴う発掘調査 …… 27

駅南区画整理事業に伴う発掘調査 …… 29

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(1) …… 32

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(2) …… 39

総社小学校プール建設に伴う発掘調査 …… 41

三須地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 …… 43

真壁遺跡（中央４丁目地点）の調査概要報告 …… 45

鬼ノ城　西門跡および鬼城山周辺の調査 …… 48

作山古墳の調査について …… 104

4．発掘調査の報告

舟山遺跡・舟山古墳 …… 115

イキ山遺跡 …… 129

報告書抄録 …… 138

図　目　次

ー埋蔵文化財行政の概要ー

第１図　立会・確認調査位置図１
（S＝1/40,000）…… 3

第２図　立会・確認調査位置図２
（S＝1/40,000）…… 5

第３図　発掘調査位置図（S＝1/40,000）…… 6

ー立会および確認調査ー

診療所建設にともなう確認調査

第４図　トレンチ平・断面模式図
（S＝1/40）…… 7

店舗造成に伴う立会調査

第５図　調査地位置図（S＝1/10,000）
・遺構配置図（S＝1/600）…… 8

第６図　Ⅱ区遺構平面図（S＝1/150）
・断面図（S＝1/80）… 9

共同住宅造成に伴う確認・立会調査

第７図　調査地位置図（S＝1/10,000）…… 10

第８図　調査地平・断面図
（S＝1/1,500・1/80）… 11

第９図　調査地平・断面図
（S＝1/300・1/60）…… 12

第10図　出土遺物（S＝1/4）…… 14

駅前一丁目共同住宅建設に伴う立会調査

第11図　調査地位置図（S＝1/10,000）…… 15

第12図　調査地平・断面図
（S＝1/600・1/80・1/60）…… 16

第13図　出土遺物（S＝1/4）…… 17

アパート建設に伴う立会調査

第14図　調査地位置図（S＝1/10,000）…… 18

第15図　調査位置図 …… 19

第16図　出土遺物（S＝1/4）…… 19

店舗新築工事に伴う立会調査

第17図　調査地位置図（S＝1/5,000）…… 20

第18図　掘削範囲図（S＝1/600）…… 21

第19図　土層断面図（S＝1/40）…… 21

工場造成工事に伴う試掘調査

第20図　調査地位置図（S＝1/5,000）…… 22

第21図　トレンチ配置図（S＝1/1,500）…… 23

岩屋寺出土の遺物について

第22図　岩屋寺周辺図（S＝1/10,000）…… 24

第23図　岩屋山旧跡図（『備中誌』から）…… 24

第24図　採集遺物（S＝1/4）…… 25

ー発掘調査概要報告ー

総社市立常盤幼稚園園舎

移転新築工事に伴う発掘調査

第25図　調査区位置図（S＝1/5,000）…… 27

第26図　遺構配置図（S＝1/500）…… 28

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

第27図　調査地位置図（S＝1/5,000）…… 29

第28図　鷹尾手遺跡（幹線１号）遺構配置図
（S＝1/500）…… 30

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(1)

第29図　遺跡位置図（S＝1/10,000）…… 32

第30図　法正寺１号墳墳丘平面図
（S＝1/100）…… 33

第31図　法正寺１号墳墳丘平面図
（S＝1/150）…… 34

第32図　法正寺１号墳墳丘断面図
（S＝1/60）…… 35

第33図　法正寺１号墳出土遺物（S＝1/4）…… 36

第34図　樽見１号墳墳丘平面図（S＝1/150）… 37

総社小学校プール建設に伴う発掘調査

第35図　諸上遺跡遺構配置図（S＝1/200）…… 42

三須地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査

第36図　中須賀遺跡遺構配置図（S＝1/400）… 44

真壁遺跡（中央４丁目地点）の調査概要報告

第37図　調査地周辺遺構図（S＝1/2,500）…… 46

第38図　調査地位置図（S＝1/5,000）…… 47

西門跡および鬼城山周辺の調査

第39図　鬼ノ城平面図（S＝1/8,000）…… 49

第40図　西門跡および鬼城山周辺図
（S＝1/800）…… 50

第41図　西門跡右側城塁平面図
（S＝1/200）…… 52

第42図　西門跡右側土塁図（S＝1／100）…… 53

第43図　T15土塁図（S＝1/80）…… 54

第44図　西門跡周辺平面図（S＝1/300）…… 56

第45図　西門跡左側の城塁図（S＝1/100）…… 59

第46図　西門跡左側の敷石（S＝1/120）…… 61

第47図　高石垣（S＝1/100）…… 64

第48図　T20断面図（S＝1/100）…… 66
第49図　T23断面図（S＝1/60）…… 67
第50図　T24断面図（S＝1/60）…… 67
第51図　西門跡右側の内側列石と敷石
（S＝1/80）…… 68
第52図　西門跡右側城内の敷石状小石群
（S＝1/120）…… 71
第53図　西門跡左側の内側列石と敷石
（S＝1/80）…… 74
第54図　敷石と土塁中の柱穴列（S＝1/100）… 75
第55図　城門奥の柱穴列（S＝1/80）…… 77
第56図　T14土壙状遺構断面図（S＝1/120）… 78
第57図　集石状遺構（S＝1/60）…… 78
第58図　土壙（S＝1/60）…… 79
第59図　鬼城山周辺トレンチ配置図
（S＝1/600）…… 80
第60図　T２・５・８断面図（S＝1/80）…… 81
第61図　溜井平・断面図（S＝1／80）…… 84
第62図　土取場平面図（S＝1／300）…… 86
第63図　土取場断面図（S＝1/100）…… 86
第64図　出土遺物（S＝1/４）…… 88
第65図　西門跡左側の柱穴列（S＝1/200）…… 97
第66図　柱穴列断面図（S＝1/150）…… 98
第67図　城門部（S＝1/100）…… 101
作山古墳の調査について
第68図　調査地位置図（S＝1/30,000）…… 104
第69図　埴輪出土状況（S＝1/40）…… 105
第70図　埴輪実測図１（S＝1/4）…… 107
第71図　埴輪実測図２（S＝1/4）…… 108
第72図　埴輪実測図３（S＝1/4）…… 109
第73図　埴輪実測図４（S＝1/4）…… 110
第74図　埴輪実測図５（S＝1/4）…… 111
第75図　埴輪実測図６（S＝1/4）…… 112
第76図　埴輪実測図７（S＝1/4）…… 113
ー発掘調査報告ー
舟山遺跡・舟山古墳
第77図　調査地周辺古墳群分布図
（S＝1/5,000）…… 118
第78図　調査範囲及び遺構配置図
（S＝1/1,000）…… 120
第79図　遺構配置図（S＝1/200）…… 121
第80図　１号住居址平・断面図
（S＝1/50）…… 122
第81図　出土遺物１（S＝1/4）…… 122
第82図　出土遺物２（S＝1/1）…… 122
第83図　掘立柱建物平・断面図
（S＝1/50）…… 123
第84図　溝断面図（S＝1/40）…… 123
第85図　周溝断面図（S＝1/40）…… 124
第86図　出土遺物３（S＝1/4）…… 124
イキ山遺跡
第87図　調査地周辺図（S＝1/5,000）…… 132
第88図　遺構配置図（S＝1/500）…… 133
第89図　溝及び南低位部断面（S＝1/40）…… 134
第90図　１号住居址平・断面図（S＝1/40）… 134
第91図　２号住居址平・断面図（S＝1/40）… 135
第92図　出土遺物（S＝1/4・1/2）…… 135

図　版　目　次

共同住宅造成に伴う確認・立会調査
第１図版　発掘状況 …… 14
駅前一丁目共同住宅建設に伴う立会調査
第２図版　〈９〉断面 …… 17
アパート建設に伴う立会調査
第３図版　土層断面 …… 19
工場造成工事に伴う試掘調査
第４図版　T－１ …… 23
第５図版　T－３ …… 23
ー発掘調査概要報告ー
総社市立常盤幼稚園園舎
移転新築工事に伴う発掘調査
第６図版　火葬墓検出状況 …… 28
第７図版　大溝内甑出土状況 …… 28
駅南区画整理事業に伴う発掘調査
第８図版　三軒屋遺跡３区土壙 …… 31
第９図版　深鉢出土状況 …… 31
第10図版　鷹尾手遺跡（区画道31号線）大溝
…… 31

第11図版　鷹尾手遺跡（区画31号線）大溝断面 …… 31
第12図版　樽見１号墳・法正寺１号墳 …… 38
第13図版　法正寺１号墳（南から）…… 38
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(2)
第14図版　宮ノ前遺跡 …… 40
第15図版　古町遺跡（南から）…… 40
総社小学校プール建設に伴う発掘調査
第16図版　諸上遺跡 …… 42
三須地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
第17図版　中須賀遺跡 …… 44
真壁遺跡（中央４丁目地点）の調査概要報告
第18図版　調査地全景 …… 45
西門跡および鬼城山周辺の調査
第19図版　T15土墨と敷石 …… 54
第20図版　西門跡右側の外側列石と敷石 …… 55
第21図版　西門跡右側の土墨 …… 55
第22図版（右）外側列石前面の柱穴 …… 57
第23図版（左）外側列石前面の柱穴列 …… 57
第24図版　西門跡右側の版築の境目 …… 58
第25図版　西門跡左側の敷石 …… 60
第26図版　西門跡左側の敷石 …… 62
第27図版　高石垣 …… 64
第28図版（上）外側列石前面の柱穴 …… 65
第29図版　版築土墨 …… 65
第30図版　T23断面 …… 67
第31図版　西門跡城内 …… 69
第32図版　西門跡右側城内の敷石状小石群 … 72
第33図版　内側列石と敷石 …… 74
第34図版　土墨中の柱穴列 …… 76
第35図版　城門奥の柱穴列 …… 77
第36図版　土壙状遺構 …… 79
第37図版　実験的版築 …… 79
第38図版　狼煙場跡？ …… 82
第39図版　溜井 …… 83
第40図版　東門跡 …… 90
第41図版　第１水門跡 …… 91
第42図版　第４水門跡 …… 93
第43図版　西門跡全景（東南から）…… 95
第44図版　西門跡全景（西南から）…… 99
第45図版　城門部全景 …… 100
第46図版　調査後の西門跡（正面から）…… 103
第47図版　調査後の西門跡（城内から）…… 103
作山古墳の調査について
第48図版　埴輪列検出状況（西から）…… 105
第49図版　埴輪列検出状況（南西から）…… 105
ー発掘調査報告ー
舟山遺跡・舟山古墳
第50図版　舟山３号墳調査前（北から）…… 126
第51図版　舟山３号墳調査後（北から）…… 126
第52図版　溝断面 …… 127
第53図版　掘立柱建物と溝（南から）…… 127
イキ山遺跡
第54図版　昭和40年頃空撮 …… 135
第55図版　調査区全景 …… 136
第56図版　南の段（低位部）…… 136
第57図版　河川（大沼川）…… 137
第58図版　２号住居址（南から）…… 137

表　目　次

ー埋蔵文化財行政の概要ー
表１　発掘調査一覧表 …… 2
表２　立会・確認調査一覧表 …… 4
ー発掘調査の概要ー
西門跡および鬼城山周辺の調査
表３　外側列石前面および土墨中の柱穴一覧表 …… 102

１．総社市埋蔵文化財行政の概要

1．総社市埋蔵文化財行政の概要

総社市における埋蔵文化財行政は，教育委員会事務局　文化財室で担当しており，ほかに各種文化財の保護事業などの文化財行政を行っている。

（組織）

教育長	秋田　皓二	主　事	高橋　進一
教育次長	守長　健尚	〃	笹田　健一
参　事	横田　　優	〃	松尾　洋平
文化財室長	加藤　信二（H11．7．1～）		
主　査	谷山　雅彦（H11．7．1～）	埋蔵文化財学習の館	
主　任	武田　恭彰	館　長	村上　幸雄
主　事	平井　典子	臨時職員	近藤　雅子
〃	前角　和夫	〃	田中　富子

平成10年度に実施した発掘調査は，11遺跡，総調査期間27ケ月となる。これに事前審査等による立会・確認調査26件が加わるほか，測量調査と遺物の寄贈が各１件である（表１・２）。

最近の発掘調査における傾向としては，景気の低迷による設備投資への差し控えからか民間開発にともなうものはわずか２件にとどまっており，しかも開発規模は小さい。残る９件は公共開発がらみとなり，調査面積・期間をみると年度をまたぐように長期的かつ規模の大きい事業が目立っている。

立会・確認調査については，主に建築確認申請の中うちその建築規模等から文化財室への合議を受け，さらに室で詳細な事業内容にもとづくそれぞれの事前審査を行い，立会および確認調査をそれぞれ実施した。調査契機の中で共同住宅については完全な合議と審査がなされているものの，１階建ての店舗や個人住宅（３階建て）等においては合議の有無のばらつきが生じている。このばらつきがこれまで緊急対応としていた不時の調査に該当するものも少なくないと思われる。「基礎的データの収集」を今年度も行っている。

埋蔵文化財行政にともなう文化財保護および普及・啓発活動としては，

・指定史跡の下刈り清掃

・現地説明会

　平成10年４月12日

・鬼ノ城の写真パネル展示

平成10年11月8日

・鬼ノ城の講演会と遺跡発掘調査スライド上映会

平成11年2月7日

スライド上映　三須河原遺跡

駅南区画整理事業に伴う発掘調査－上三本松遺跡

講演「鬼ノ城を掘る」（総社市埋蔵文化財学習の館館長　村上幸雄）

が行われ，「総社市教委独自の，市民を対象とした発表の場」となった講演とスライド会は多数の参加者があり大盛況を収めた。その反面，昨年度まで総社市埋蔵文化財学習の館の例年行事としていた親子文化財教室は，参加者の減少傾向もあって実施せず他の方法を模索することにした。

このほか，博物館等の展示会や各種出版物への資料の貸出や掲載，個人研究に伴う資料の閲覧，講師派遣等を行っている。また他の機関より多くの受贈図書を寄贈していただいた。

（前角和夫）

表1　発掘調査一覧表（測量調査含む）

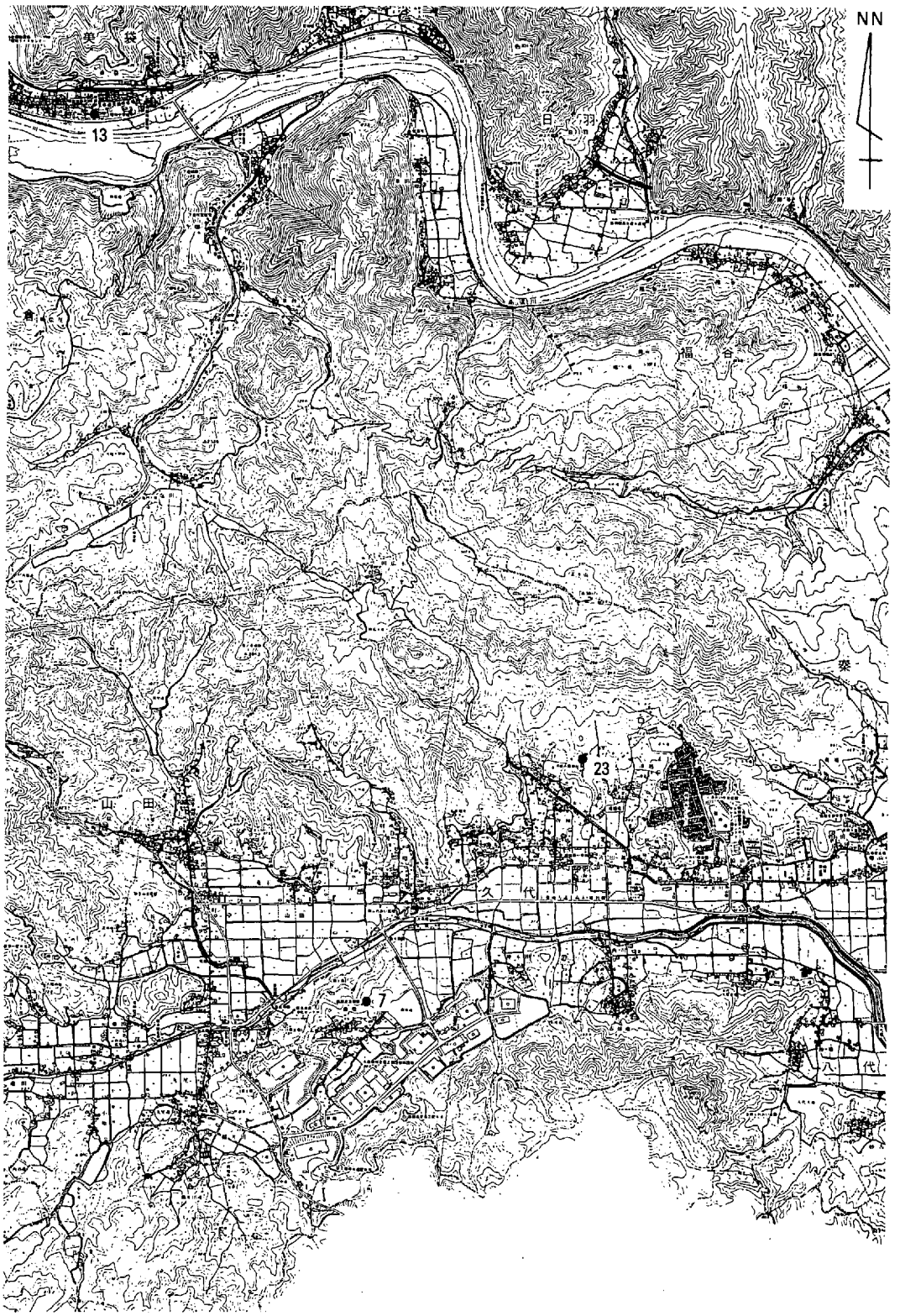
調査番号	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	備考
98001	三須河原遺跡	三須970ほか	公・担手育成事業	継続～H10.5.8	
98002	上三本松遺跡	真壁768-1ほか	公・幼稚園建設	H10.4.10～7.10	P27・28
98003	三輪散布地	三輪1055ほか	公・土地区画整理事業	H10.7.13～継続	P29・31
98004	樽見古墳群	山田1977-7ほか	公・ほ場整備事業	H10.8.1～9.11	P32・38
98005	舟山3号墳	久代5118	民・老人ホーム建設	H10.7.24～8.3	P115・127
98006	真壁遺跡	中央5-1-104	民・共同住宅建設	H10.8.31～9.16	P45～47
98007	鬼城山	黒尾1141ほか	公・史跡整備	H10.9.16～継続	P48～103
98008	諸上遺跡	総社3-13-1	公・教育施設建設	H10.12.21～99.1.31	P41・42
98009	宮ノ前遺跡	山田2462-2ほか	公・ほ場整備業	H10.12.21～継続	P39・40
98010	美濃田遺跡ほか	三須1121	公・担手育成事業	H11.1.24～継続	P43・44
98011	イキ山遺跡	長良354	公・農村集落排水事業	H11.2.8～2.12	P129～137
98012	作山古墳	三須200ほか	公・測量調査	H11.3～	P104～113

第１図　立会・確認調査位置図１（Ｓ＝1/40,000）

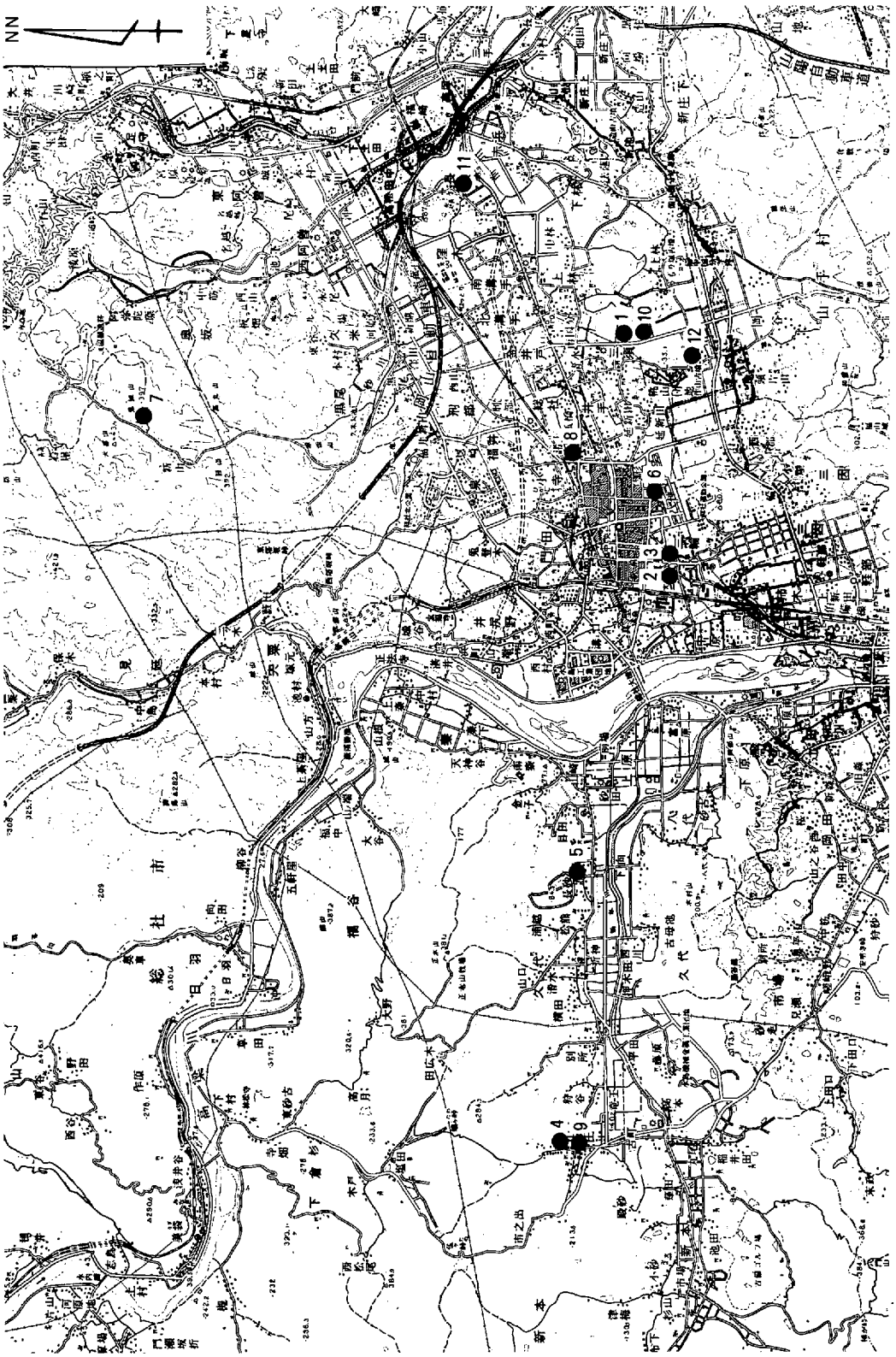
表2　立会・確認調査一覧表

番号	所　在　地	調 査 契 機	調査年月日	種別	調　査　所　見	遺物·遺構	遺跡
1	真壁158-1ほか	民・病院建設	H10. 4.13	確認	真壁遺跡地内	○・○	○
2	井手604-1ほか	民・商業店舗建設	H10. 4.15 /16	不時	清水角遺跡内	○・○	○
3	門田935-1ほか	民・住宅団地造成	H10. 4.17	確認	新規発見遺跡（宮東遺跡）	○・○	○
4	井手366-3	民・共同住宅建設	H10. 5.11	立会	掘削が浅い	？・？	？
5	駅前1-107-2	民・共同住宅建設	H10. 5.19 ／23	立会	新規発見の遺跡（散布地）	○・○	○
6	駅前2-10-107	民・共同住宅建設	H10. 5.25	立会	－	－・－	－
7	久代2524	民・土取り	H10. 5.27	確認	丘陵頂部には古墳群	×・×	×
8	井尻野391-1ほか	民・商業店舗建設	H10. 6.17, 7. 8	立会	遺跡なし	×・×	×
9	井手1390-15ほか	民・共同住宅建設	H10. 6.23	立会	－	－・－	－
10	井手697-2	民・共同住宅建設	H10. 6.23	立会	井手村後遺跡地内	○・○	○
11	井手515-1	民・宅地造成	H10. 6.30	立会	掘削及ばず	？・？	？
12	真壁2132ほか	民・飲食店建設	H10. 7.17	確認	砂層	×・×	×
13	美袋162-4ほか	公・教育施設建設	H10. 8. 4	立会	砂層（洪水砂）	×・×	×
14	溝口112-1ほか	民・共同住宅建設	H10. 8.25	確認	遺構・遺物なし（砂・礫層）	×・×	×
15	総社3-982-3ほか	民・共同住宅建設	H10. 8.26	確認	低地部か	△・×	△
16	三輪674-6ほか	民・共同住宅建設	H10. 9. 7 ／8	立会	－	－・－	－
17	井尻野241-1	民・共同住宅建設	H10. 9. 9	立会	掘削及ばず	？・？	？
18	門田99-2ほか	民・共同住宅建設	H10. 9.14	確認	砂層（中世の洪水層？）	○・×	△
19	総社2-587-1	民・商業店舗建設	H10. 9.14	立会	新規発見の遺跡（散布地）	×・○	○
20	総社1-334	個人住宅	H10. 9.16	立会	掘削及ばず	？・？	？
21	中央6-4-104	民・共同住宅建設	H10. 9.16	確認	遺構・遺物なし（粘質度）	×・×	×
22	井尻野606ほか	民・工場建設	H10.10.19	確認	遺構・遺物なし（砂層・礫層）	×・？	？
23	久代5916-1	民・通信中継施設建設	H11. 1. 9	確認	遺跡なし	×・×	×
24	中央6-13-115	民・共同住宅建設	H11. 1.25	確認	低地部か	×・？	？
25	中央3-11-107	民・商業店舗建設	H11. 1.27	立会	掘削及ばず	？・？	？
26	真壁162-1ほか	民・保育園建設	H11. 1.28	確認	遺構・遺物なし（微高地）	×・×	×
27	奥坂	遺物の寄贈	H11. 3.24	寄贈	岩屋廃寺	○・－	－

○・×・△は遺構の有無と遺跡の可能性を3段階で示す。
？は不明，－は調査簿に記入なし



第２図　立会・確認調査位置図２（Ｓ＝1/40,000）



第３図　発掘調査位置図（Ｓ＝1/40,000）

2．立会および確認調査の概要

診療所建設にともなう確認調査

遺 跡 名　真壁遺跡

所 在 地　総社市真壁158－５ほか

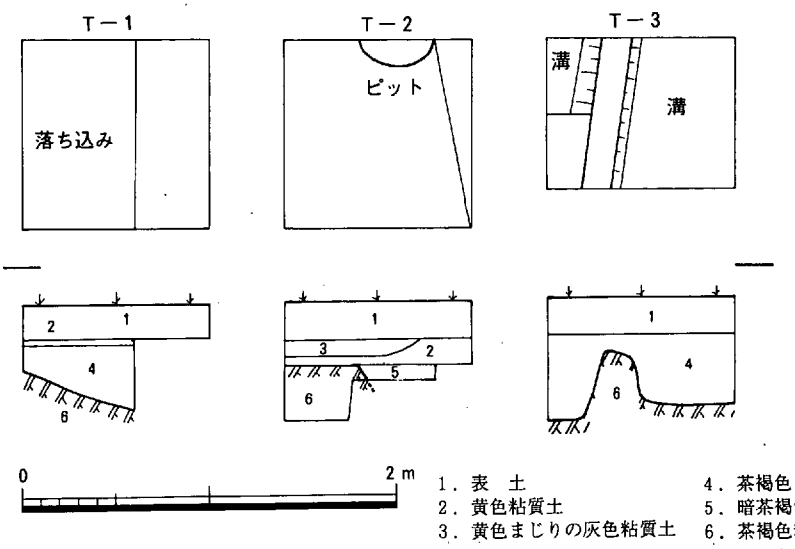
調査期間　平成10年４月13日

調査概要

今回の調査は，診療所建設にともない，３階建てであることから建築確認申請の合議事項が生じ，事前審査の結果，確認調査を行ったものである。調査地は市街地の南東端部にあたる標高約12.8ｍの水田地帯で，県道水別総社線に沿ってのみ開発の集中している地区である。しかしこれまでに３件の立会調査が実施されたにすぎず，調査地北西やや離れた位置に中心のある真壁遺跡の範囲内にあたるかどうかは不明瞭であったこと。工事内容が地盤改良のないシートパイル方式であったこと。盛土と基礎掘削が同じ1.2ｍであったこと。などから確認調査の方向で協議を進め，盛土造成前であったことから手掘りによる確認調査とした。（Ｐ47第38図）

調査は，１ｍ角のトレンチを３ヵ所に設定した。いずれも微高地となる茶褐色シルトの地山が検出され，そこに掘り込まれたピットと，溝あるいは落ち込みが認められた。遺物も前者にともなって土師器，後者にともなって須恵器が出土したが，その量はごくわずかであり，かつ細片にすぎない。

結果，遺跡の時期は古代と中世以降のものと推定され，遺構密度は高くないが，真壁遺跡地内と周知できる。しかし調査地の北東側に一段低い水田地帯があり，これが旧河道と推定され，遺構の密度や同検出面の高さなどから考えて，微高地端部にかなり近く，遺跡周辺部にあたるものと推定される。（前角和夫）



第４図　トレンチ平・断面模式図（Ｓ＝1/40）

店舗造成に伴う立会調査

遺 跡 名　清水角遺跡

所 在 地　総社市井手604－1外

調査期間　H10年4月15・16日

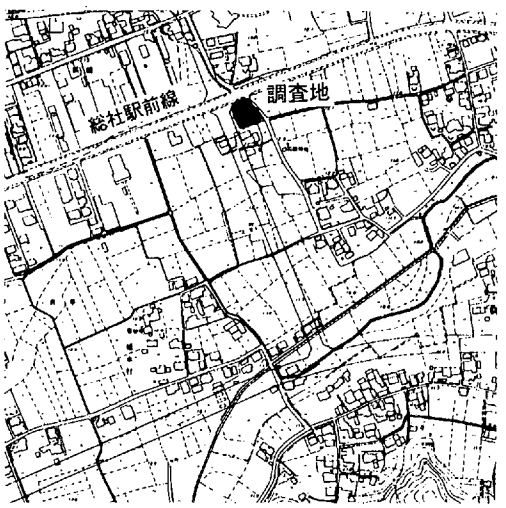
調査面積　30㎡

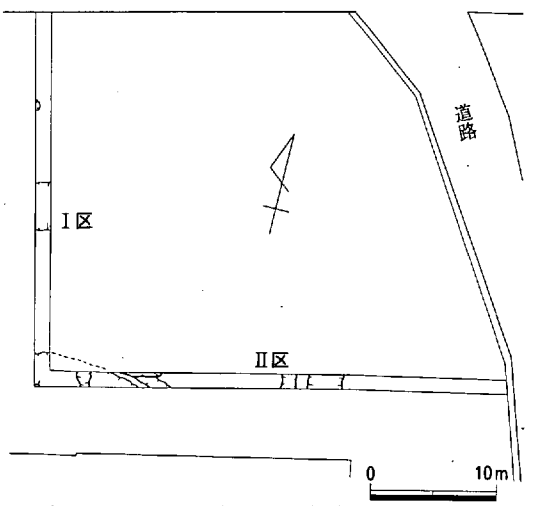
調査概要

本調査は，店舗造成に伴い掘削が行われる擁壁部分を対象に立会調査を実施したものである。調査地は総社市役所の東約1.5kmに位置し，都市区画道路総社駅前線に北面する。周辺には道路部分を中心に昭和57年，平成2年に発掘調査が行われ，近年には住宅地，店舗の増加により立会調査等の事例も増えている。

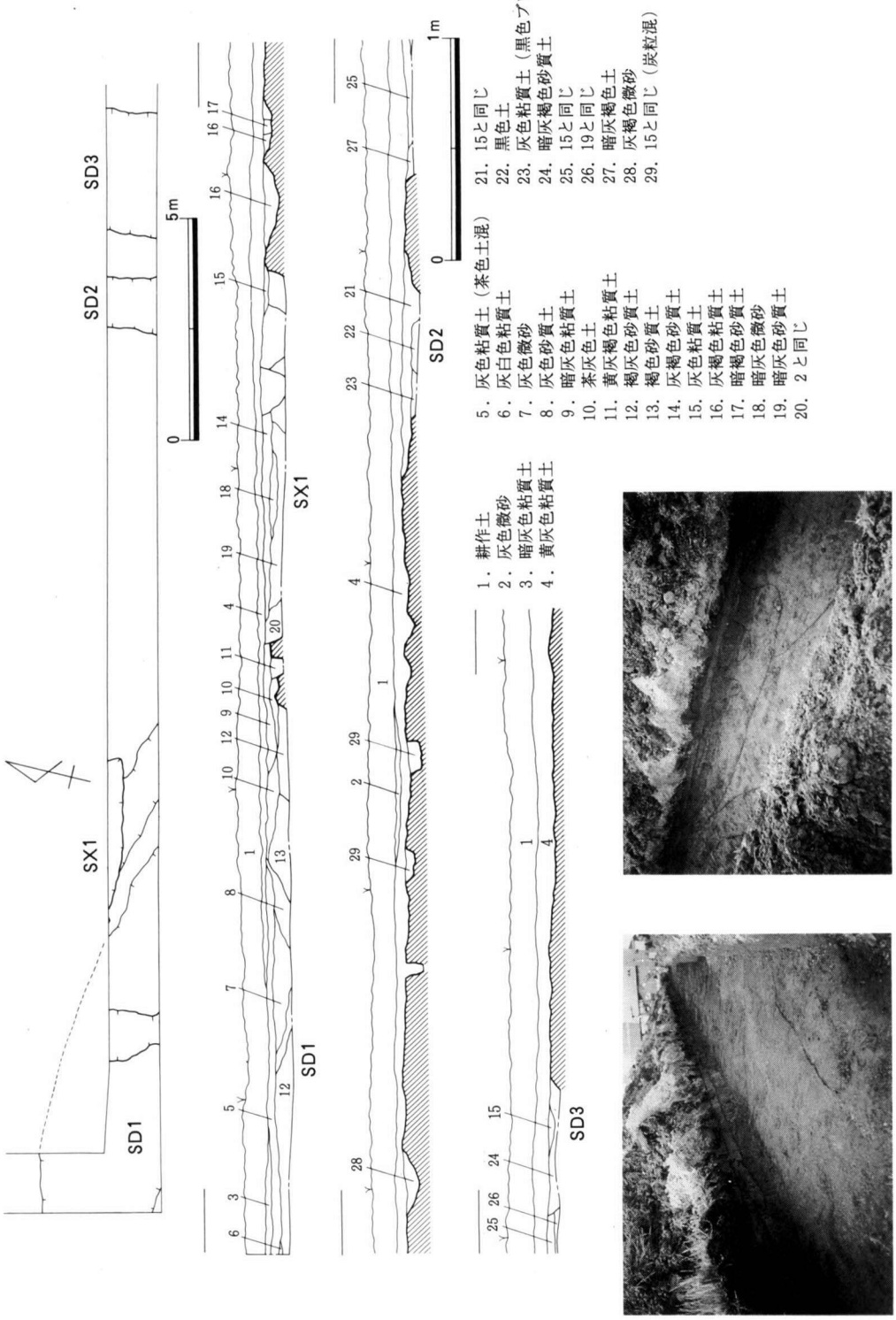
調査地はすでにGL－40～50cmの掘削が行われていたため，工事と競合する1区を除き，主として2区の土層断面と，検出面における平面観察を行った。基盤層は淡茶褐色粘質土で，基盤の高さは1区と2区西半が高く，土質も堅く締まっているが，東に向かい下降し粘性に富んだ軟質地盤となる。2区に限れば，西端と東端の高低差は約10cmであることから，1区，2区西半は微高地上に立地していると考えられ遺構密度も高く，反対に2区東半は希薄であった。

遺構は溝状遺構，柱穴，土壙状遺構等が検出された。埋土の色調等から中世の溝が南北方向に3条，柱穴等が多くを占め，時期・性格共に不明ではあるものの東西方向に溝，もしくは落ち込み状の遺構を確認した。遺物は中世前期の土師器椀等の細片がごく少量出土しており，いずれも図化に耐えない。清水角遺跡は過去2回発掘調査により中世の遺跡が確認されていることと合わせ，本調査地を含む都計道路南側への遺跡の広がりが予想される。　（松尾洋平）





第5図　調査地位置図（S＝1/10,000）・遺構配置図（S＝1/600）



第６図　Ⅱ区遺構平面図（Ｓ＝1/150）・断面図（Ｓ＝1/80）

共同住宅造成に伴う確認・立会調査

遺 跡 名　宮東遺跡

所 在 地　総社市門田字宮東935－１外

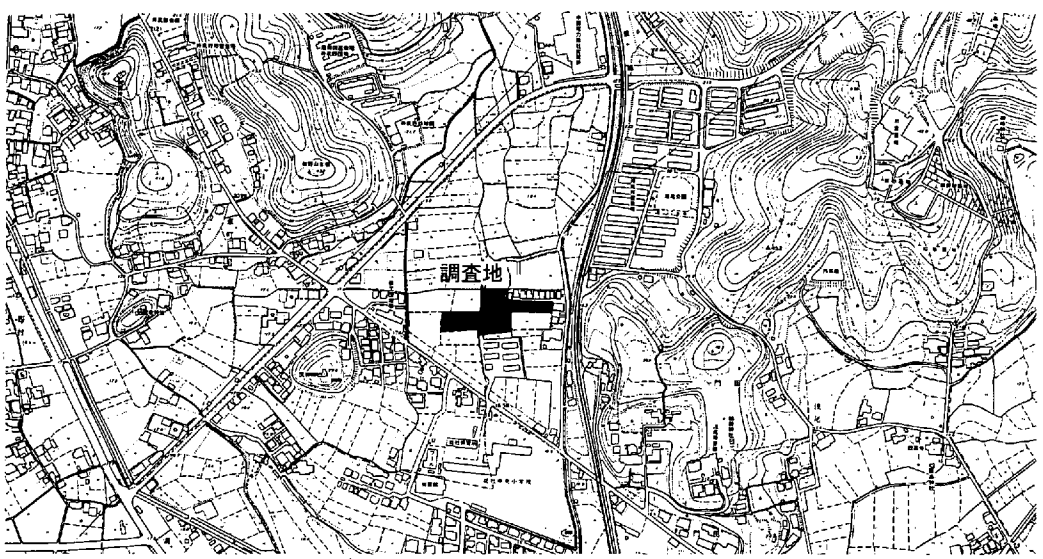
調査期間　平成10年４月17日外

調査概要

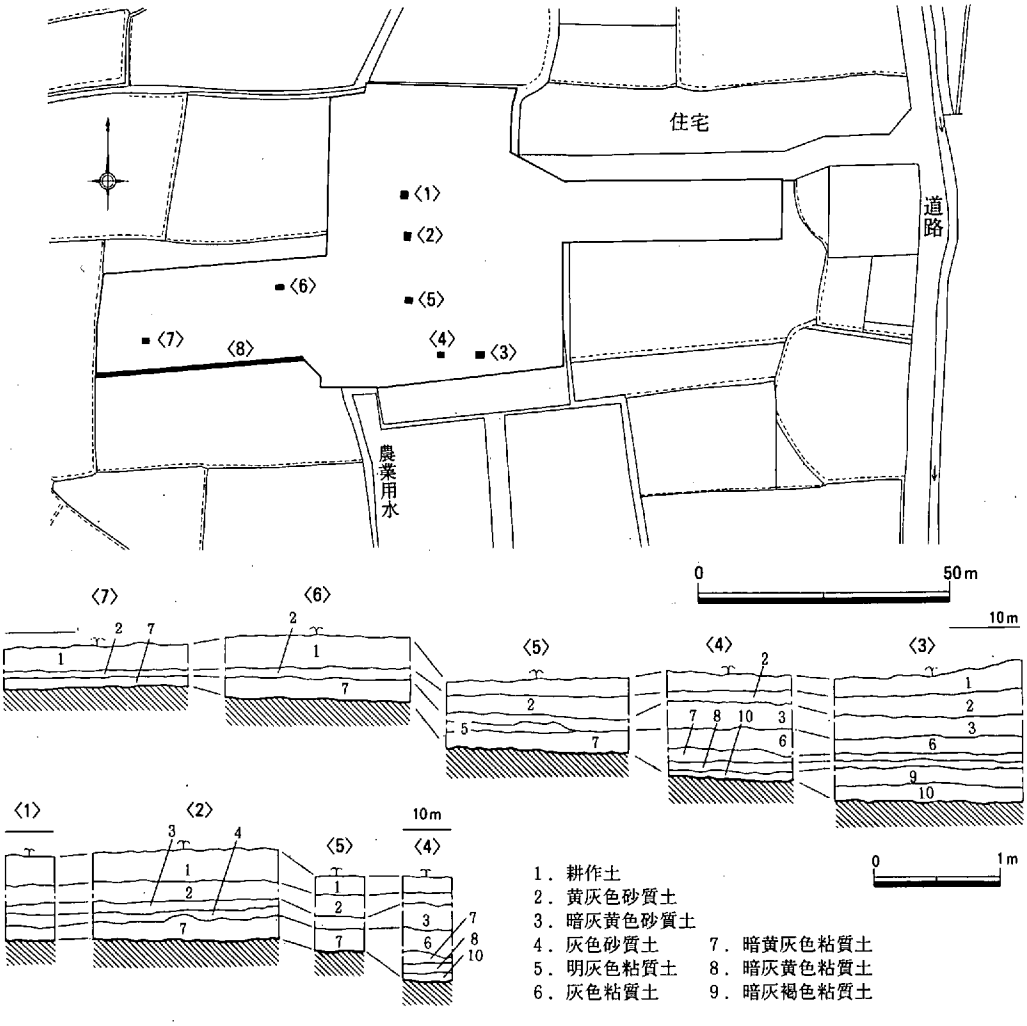
調査地は総社市街地の北域，ＪＲ総社駅より北へ約800ｍに位置し閑静な生活環境と交通の利便性が相まって近年住宅地が増加している。本調査は住宅地造成に伴い工事面積4,470㎡の内，造成地部分の確認調査を行い，擁壁構築の基礎工事については立会調査を実施したものである。

吉備高原の南端，標高247ｍの秋葉山塊から南へ分脈した二つの支峰列は，高梁川添いに西側へ1.8km×0.5kmを有し，一方の東側へは2.3km×0.9kmの広がりを見せつつ枝状に支脈が延びている。二つの山塊に挟まれた谷部は井山より低位段丘を小河川が解析し，やがて総社平野に及ぶ。調査地はこの谷部が平野に大きく広がる開口部に位置している。

平成９年12月に事業者より遺跡の取り扱いについて事前の連絡があり協議の結果，予定地平野部では周知の遺跡が確認されておらず，工事に先立ちまず遺跡の有無を確認して，その結果をもとに擁壁等掘削が及ぶ工事範囲を立会調査することにした。工事面積4,470㎡のうち工事進入路部分は早期に造成されていたため残り3,800㎡を対象に行うこととし，調査は重機を用いてトレンチを設定した。



第７図　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）

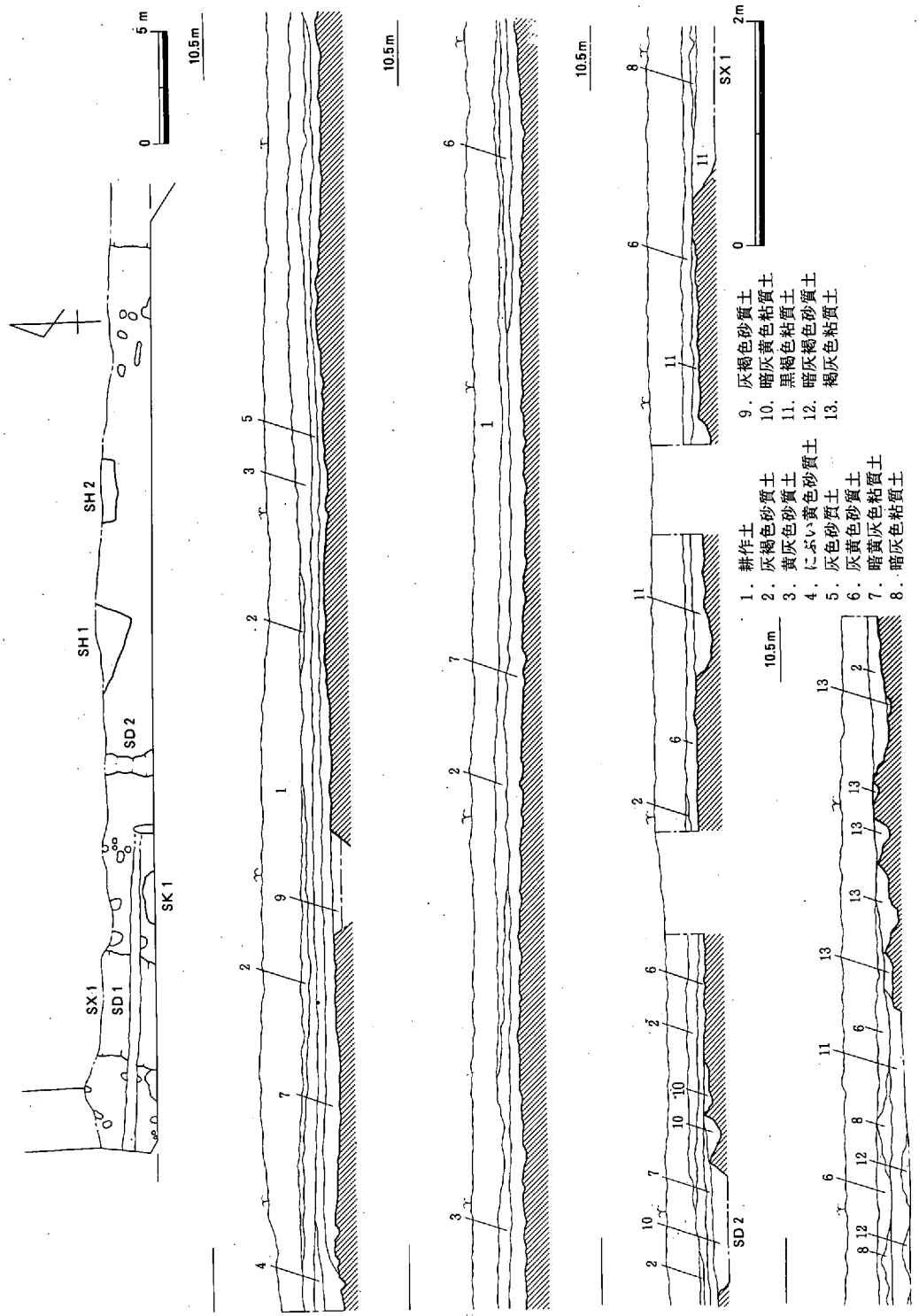


第８図　調査地平・断面図（Ｓ＝1/1,500・1/80）

調査前の状況は水田であり，用地内の高低差はまず東西方向に西端の標高10.28ｍ，東端9.7ｍを測りその差は0.51ｍである。西から東へ下る緩傾斜を呈し，予定地の西半分を分ける農業用水を境に，全体的に約40cmの段差があり明らかに西側が高い。次に南北方向では北端の標高9.89ｍ，南端9.67ｍで比高差は0.22ｍを測る。これからの状況は現地においても容易に観察することができ，調査後の土層観察によっても基本的に地形の変化は見られなかった。

基本層序

１～４層は全て砂質土で近世から現代までの水田層である。５～８層は灰白色系粘質土が堆積し層厚はそれぞれ４～18cmで，層内には中世土器の細片が混入するため中世水田層と考えられる。９層は〈3〉，〈4〉で観察され層厚14cmを測る暗灰褐色粘質土で，西から東へと厚を減ずる。この層は他のトレンチでは検出されず層内から古墳時代後期の須恵器が混入されているこ



第９図　調査地平・断面図（Ｓ＝1/300・1/60）

とから当該期の包含層と考えられる。また，基盤層は締まりのある黄褐色粘質土で，西端を示す〈7〉では標高9.55m，東端の〈3〉は8.8mを測り，その比高差は0.75mであった。南北方向では〈1〉が9.12m，〈4〉は8.76mで比高差0.36mであった。以上の結果を踏まえるならば基盤層の傾斜は東西方向において著しく，相対的に高位の〈6〉，〈7〉周辺に遺跡が存在することを予測させた。

立会調査

調査地では造成工事と併行して，進入路の北東部を除き敷地外周全域に擁壁を構築する予定のため，確認調査の結果を踏まえ，擁壁の基礎掘削中に立会調査を実施することにした。特に用地西半分はＧＬ－25～60cm程で基盤層に達し，掘削が遺構面に及ぶ可能性が高いと推定された。これを基に重点的に平面観察を繰り返した所，用地西半の南側部分において多数の遺構が検出されたが，他の外周部分については掘削が近現代水田層内で溜まり，遺構に対する影響はないと判断された。

調査は遺構の検出された長さ42m×幅2.5mの範囲を対象として行った。基本層序は１～６層が全て砂質土で近現代水田層である。７層は暗黄灰色粘質土で西から約16m地点で現れはじめ，層厚６～14cmを測る。この層は確認調査時の〈6〉〈7〉においても確認できた。

基盤層は締まりのある黄褐色粘質土で，調査区西端での標高9.86m，東端9.35mを測り，西から東へと下降する。しかし，調査区の西から約16mまでの基盤層は，現代水田の耕作のため著しく削平されていた。

遺構は調査範囲のほぼ全域で確認できたが，工事の性格上検出面以下が盛土により保存されることから遺構検出に留まり，詳細な時期や具体的な遺構の性格については明確さを欠く。

遺構は住居跡２，溝２，落ち込み１，土壙１，小穴多数他を確認した。

SH１　調査地中央部に位置する。一辺3.6m以上の方形プランを呈し，主軸は北東～南西方向と考えられる。埋土は暗褐色粘質土で炭粒，褐色土が混入する。

SH２　SH１から東へ約４mに位置する。一辺約2.8mと小規模であるが方形プランを呈し東西方向に主軸をもつ。埋土はSH１とほぼ同様であった。

SK１　調査地西半に位置する。長さ2.34mの楕円形を呈し断面観察から底は平坦で，深さ10～15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

SD１　調査地西半に位置する。現代水田に伴うＵ字側溝を除去後にこれに先行する旧流路が検出された。長さ14m以上，幅50cmを測り埋土は灰色砂質土である。

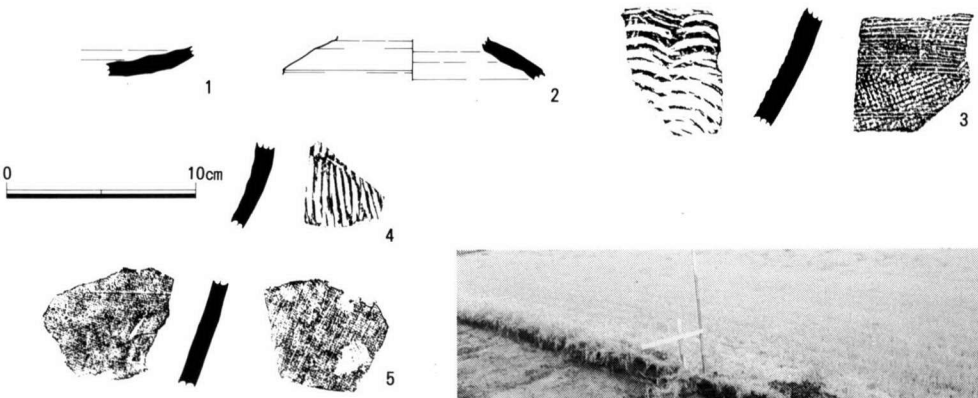
SD２　SH１から西へ約３mに位置する。南北方向に延び長さ2.2m以上，幅0.7～1.15m，深さ15cm以上を測る。埋土は暗灰色粘質土である。

SX　調査地西半に位置する南北方向に延び幅約５m，深さ20cm以上を測る。埋土は黒褐色

粘質土で下層には暗灰褐色砂質土が堆積する。

遺物は須恵器，土師器，中世土器が少量出土し，図示した1～4はいずれも各トレンチの基盤層上面より出土したものである。1は須恵器杯で〈5〉から出土し，外面に回転ヘラケズリを施している。2の須恵器壷も〈5〉から出土し，体部に一条の沈線が見られる。3は〈7〉から出土し，4の甕片は立会調査の〈8〉から出土したものである。また，5の備前焼甕は〈7〉の中世水田層より出土している。1～4の須恵器片は古墳時代後期と考えられる。

今回の調査により宮東遺跡は西が高く東が低い地形にあり，東側丘陵裾部に谷を形成する一方，高位の西側一帯に遺跡が展開するようである。また，SH1・2の住居跡が方形プランをもつことや若干の出土遺物からみて古墳時代後期の集落が存在すると考えられる。　（松尾）



第10図　出土遺物（S＝1/4）

第1図版　発掘状況

駅前１丁目共同住宅建設に伴う立会調査

所 在 地　総社市駅前１丁目107－２外

調査期間　平成10年５月19・23日

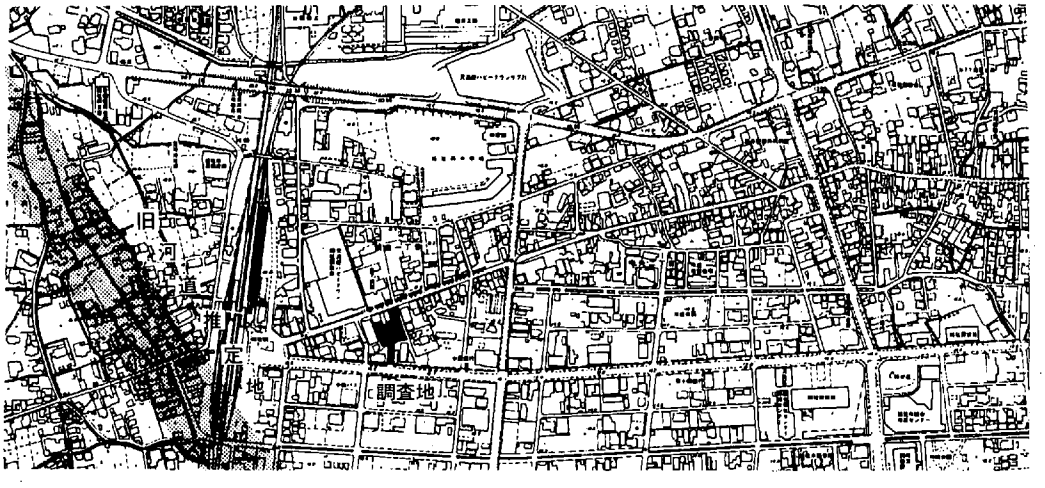
調査概要

調査地は総社市街地の中央部，JR総社駅から東へ200ｍに位置する。駅前周辺は近年総社駅改築工事を初めとし再開発事業が増加している。

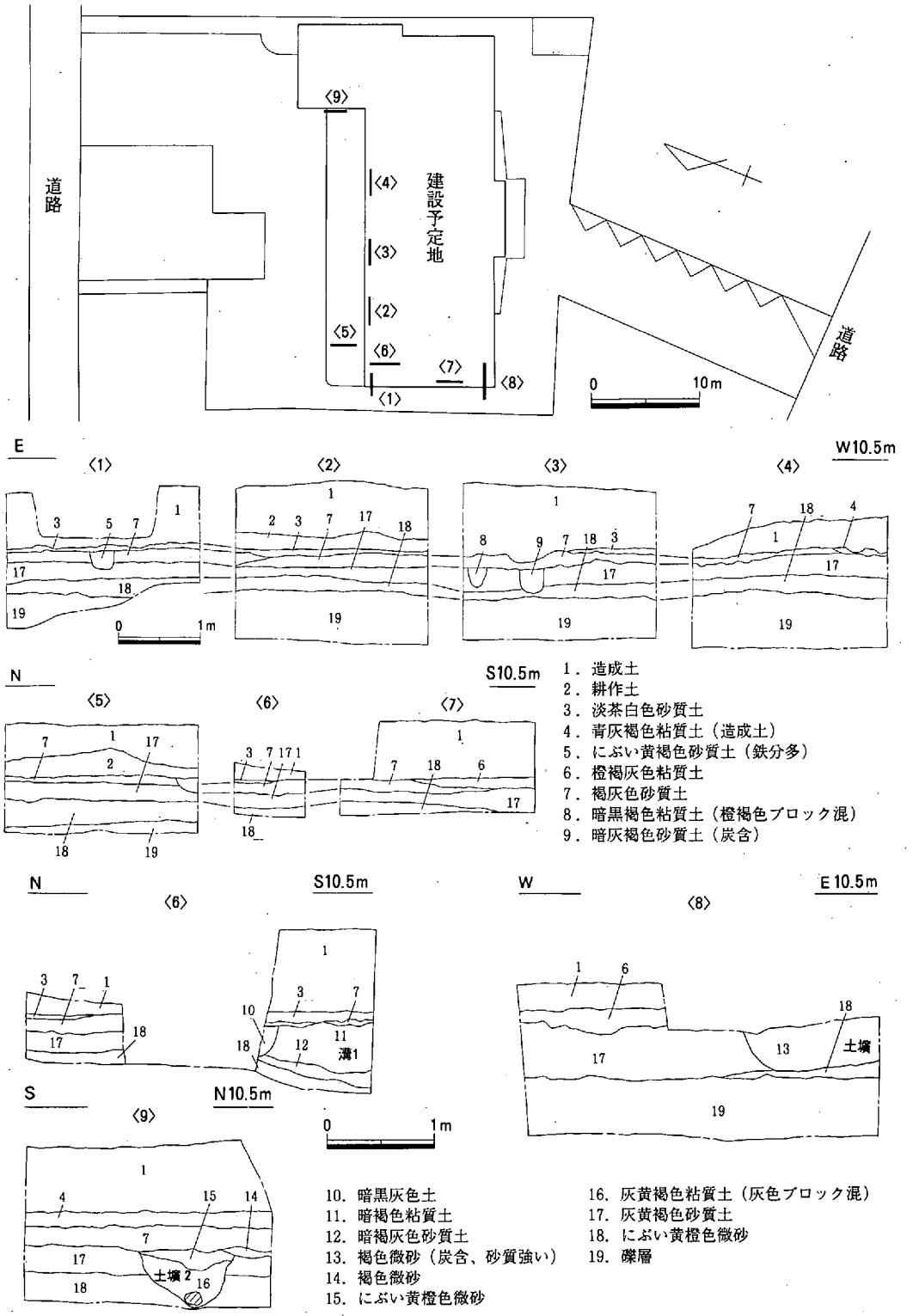
当地は５階立共同住宅の建設予定地で，建物基礎工事に伴う掘削がGL－1.4～２ｍに及ぶため立会調査を実施したものである。調査時には既に基礎部を坪掘り状に掘削し綱管を打ち込んでいたため土層観察を主として東西南北に断面を柱状化し，土層のつながりを把握すること努めた。しかし，用地部分の東半は工事前にかつての建物が存在していた事から，地下部分も著しく撹乱を受け，一部には最下層の礫層まで土壌改良が及んでいた。従って撹乱の及んでいない西半に重点を置き北壁と西壁の一部について断面観察を行うことにした。

基本層序は上から造成土の真砂土，耕作土，床土層が順次堆積する。６層の橙褐灰色粘質土は〈7〉，〈8〉の用地南西部で認められ，層厚12～20cmを測るが，６層上面まではかつての土壌改良による削平を受けていた。７層の褐灰色砂質土は北半全域で認められ層厚５～18cmを測り中世土器の細片を包含している。17層の灰黄褐色砂質土は層厚10～30cmを測り，層上面のレベルはほぼ水平で〈4〉の東端が若干高く，確認できた遺構は17層上面より掘り込んでいる。18層のにぶい黄橙色微砂は層厚12～33cmを測り17層に比較して砂質が強く，締まりがないため自然堆積層と考えられる。なお19層は礫層で，地質調査によれば地下５ｍ以上の堆積が判明している。

遺構は断面観察のため不明な点が多いものの中世以降と考えられる土壙状遺構２，小穴３，



第11図　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）



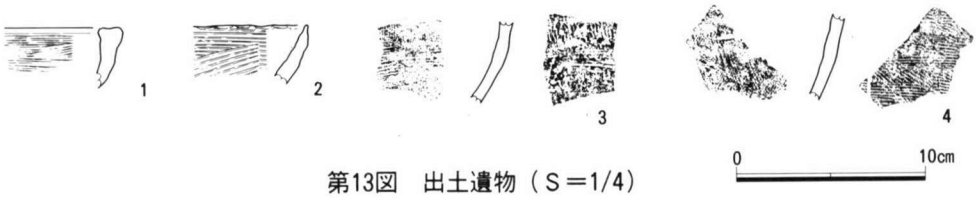
第12図　調査地平・断面図（S＝1/600・1/80・1/60）

溝１を確認した。〈6〉の溝は幅1.02ｍ以上で深さ60cmを測り，埋土は12層が砂質，13層は粘性が強く，炭小粒や小礫が混入し微量の遺物を含んでいた。〈8〉の土壙１は幅1.28ｍ，深0.4ｍを測り，底は平坦である。埋土は褐色微砂で，炭小粒が混入し比較的粘性がある。〈9〉の土壙２は幅90cm，深さ55cmを測る。埋土の16層は灰黄褐色粘質土で粘性に富み，灰色ブロックが斑紋状に混入していた。

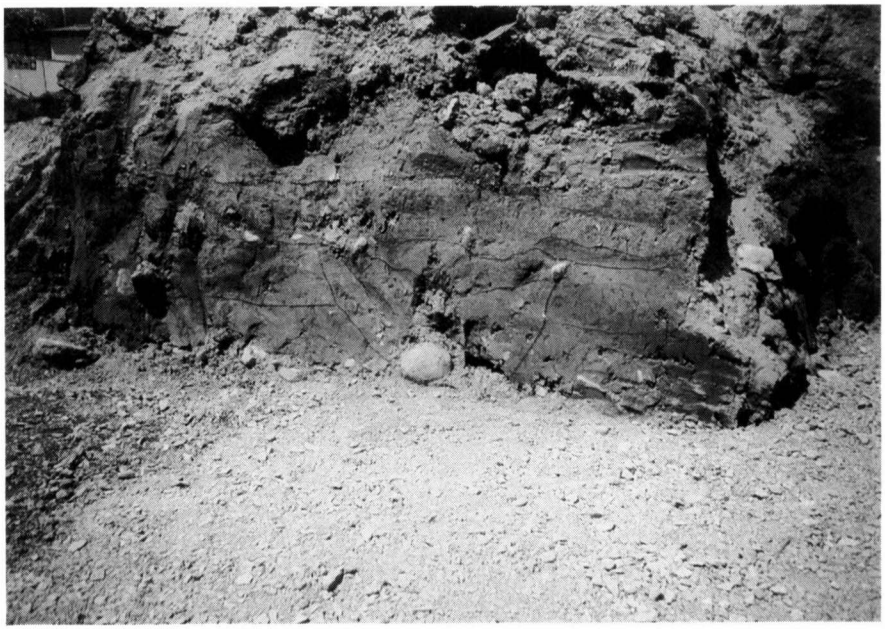
遺物は１～３が７層より，４は溝１の16層から出土した。１は鍋で精良な胎土を用いて口縁端部を肥厚させている。外面に煤が付着し内面にはヨコハケが見られる。２は粗製の土器で口縁端部を押さえ外面にヨコナデ，内面に荒いヨコハケを施す。３，４は鍋で，３は外面をハケ調整，内面にヨコハケを施し，４の体部内外面にはハケ調整が見られる。以上の出土遺物から時期は中世と考えられる。

調査地では遺構が総じて希薄であった。また断面観察からは礫層の上部に，微砂層，砂質土が順次堆積し遺構のベースとなる17層の堆積によって微高地化が進行したと思われるが，層内に中世土器の小片が所々に見られたため，少なくとも中世以降に形成されたと考えられる。

（松尾）



第13図　出土遺物（Ｓ＝1/4）



第２図版　<9>断面

アパート建設に伴う立会調査

所 在 地　総社市井手字西屋敷697－2

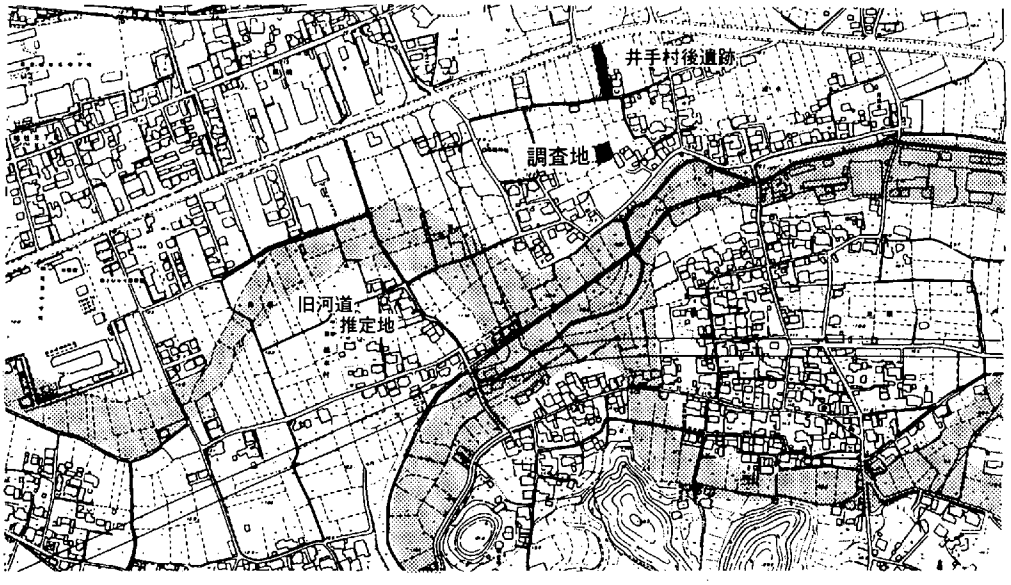
調査期間　平成10年6月23日

調査概要

調査地は総社駅前線の南約150mに位置する。市街地を東西方向に横断するこの路線は，JR総社駅より市内清水にかけて通じ国道429号線と交差する。また市内での交通量も非常に多く，近年井手周辺には小型店舗や，共同住宅が相次いで建設されている。本調査は，アパート建設に伴う浄化槽部分を対象に立会調査を実施したものである。アパート本体は盛土内でおさまるが，浄化槽部分は4×2mの範囲を重機でGL－2mまで掘削するため，遺構の確認を目的に立会調査を実施した。しかし，掘削時にGL－150cm以下が砂地の上，折りからの湧水が拍車をかけて壁面が崩壊する危険が生じ，急きょ防護壁を構築する必要があり，十分な観察と図面の作成は不可能であった。

土層断面は上から1造成土，2耕作土，3水田床土層が堆積し，灰褐色粘質土の4層は古墳時代から中世の遺物を若干含んでいた。5層はしまりのある黄褐色砂質土である。層上面を掘削中，暗灰褐色砂質土（住居跡埋土）が認められ，その形状は円形を呈していたが調査範囲の制約から形状の約1/6を確認したにすぎない。6・7層は軟弱な砂質土で湧水層であった。

遺構は具体性を欠くが住居跡1，柱穴1を確認した。1は住居跡より出土した甕である。口縁部はハの字に拡張し，外面に3条の沈線を巡らす。なで肩の体部外面にはタテハケ調整を行っ



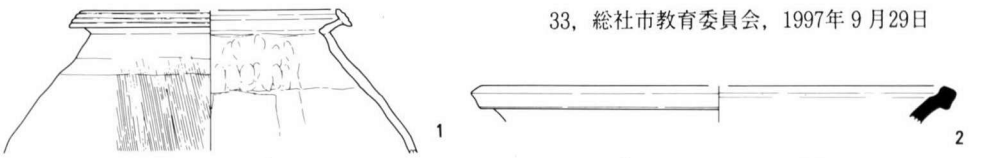
第14図　調査地位置図（S＝1/10,000）

た後，体部上面をヨコナデする。内面は体部の下半を削り，上方に押圧を加えて成形している。時期は弥生中期後半である。2は4層から出土した須恵器甕で，口縁部の一部が残存しており時期は古墳時代後期である。

調査地の北約100mには弥生後期前半の土器が多量に出土した井手村後遺跡が所在し，安定した微高地が展開する一方，南約70mには東西に走る高梁川の旧河道が推定されている。このほぼ中間地点にあたる調査地は，以前の調査から微高地の端部と考えられており，今回の調査を踏まえると弥生時代の遺跡の一部が調査地周辺にまで及ぶように思われる。　　（松尾）

参考．『総社市埋蔵文化財調査年報』7，p32～33，総社市教育委員会，1997年9月29日

第15図　調査位置図



第16図　出土遺物（S＝1/4）　0　10cm

第3図版　土層断面

店舗新築工事に伴う立会調査

遺 跡 名　総社市中村遺跡

所 在 地　総社市総社２丁目587－１，601，602，603－１，605－1

調査期間　平成10年９月14日

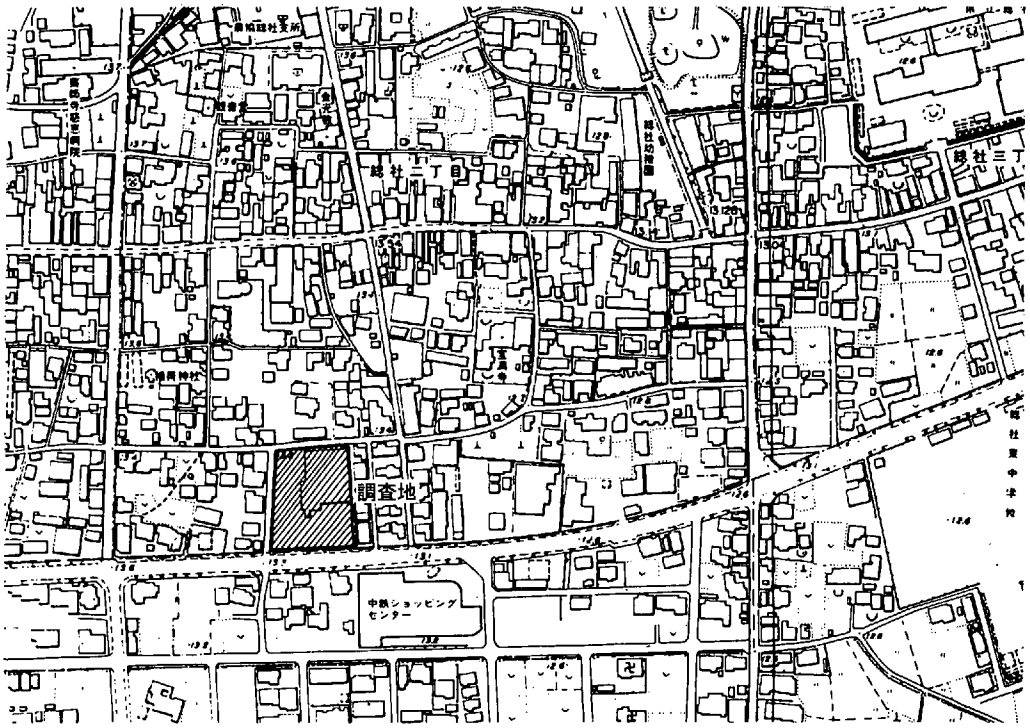
調査面積　130㎡

調査概要

調査地は市街地のほぼ中心にあり，住宅や商店が密集している。このため旧地形等の想定は困難である。これより南では中央区画整理事業が施行された時期に遺跡の存在が判明した。

今回の工事は，既存の店舗を撤去し，売場フロアーを残して上屋を建築するものであった。基礎工事による掘削は外壁部分のみである。このため，掘削時に立会調査を行うこととした。立会い調査時に遺構が確認されたため，遺跡発見届けを提出して協議をおこなった。掘削範囲が限定されていることや，既に工事が進行中であることまた，北東部分は前の建物基礎で攪乱を受けていることが判明したので，引続き立会調査を行うこととした。

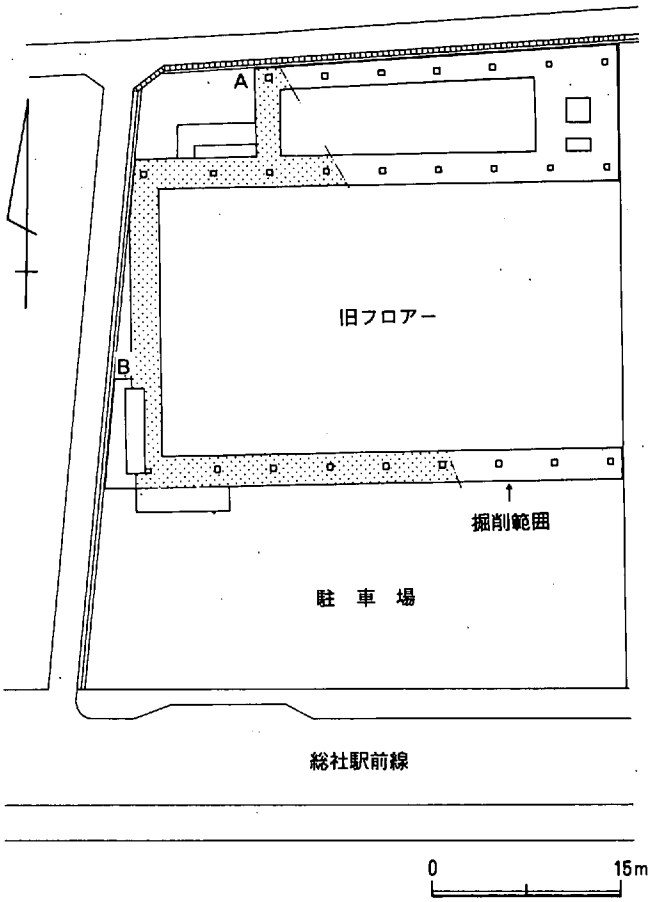
建物が建設される以前は，水田であり道路面よりかなり低いことから多くは耕作土の上に真砂土で造成し，アスファルト舗装を行っていた。掘削は現地盤から約1.5ｍであるが，60～110



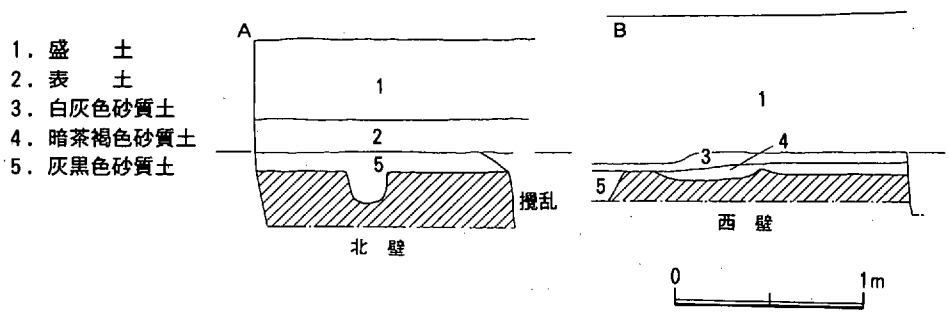
第17図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

cm盛土があるため遺構検出面からの掘削は浅い。

調査の結果，旧フロアーの基礎が深いため，土層が観察できたのは主に西壁のみであった。遺構は若干の柱穴と溝で，溝は南西角の位置で認められた。しかし上部のみの観察であるため別の遺構になる可能性もある。南東部は砂礫層が高い位置にあり，河道の可能性も考えられる。出土した遺物は小片の土器片のみである。　　（谷山雅彦）



第18図　掘削範囲図（S＝1/600）



第19図　土層断面図（S＝1/40）

工場造成工事に伴う試掘調査

所 在 地　総社市井尻野字小池606番外５筆

調査期間　平成10年10月19日

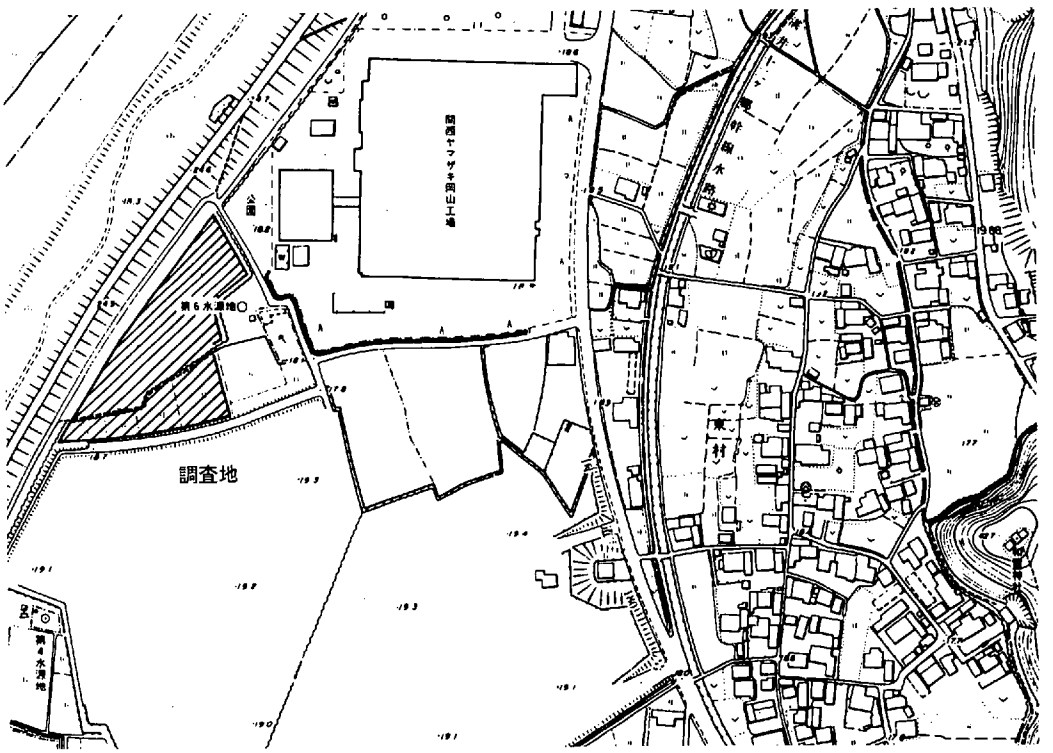
調査面積　17㎡

調査概要

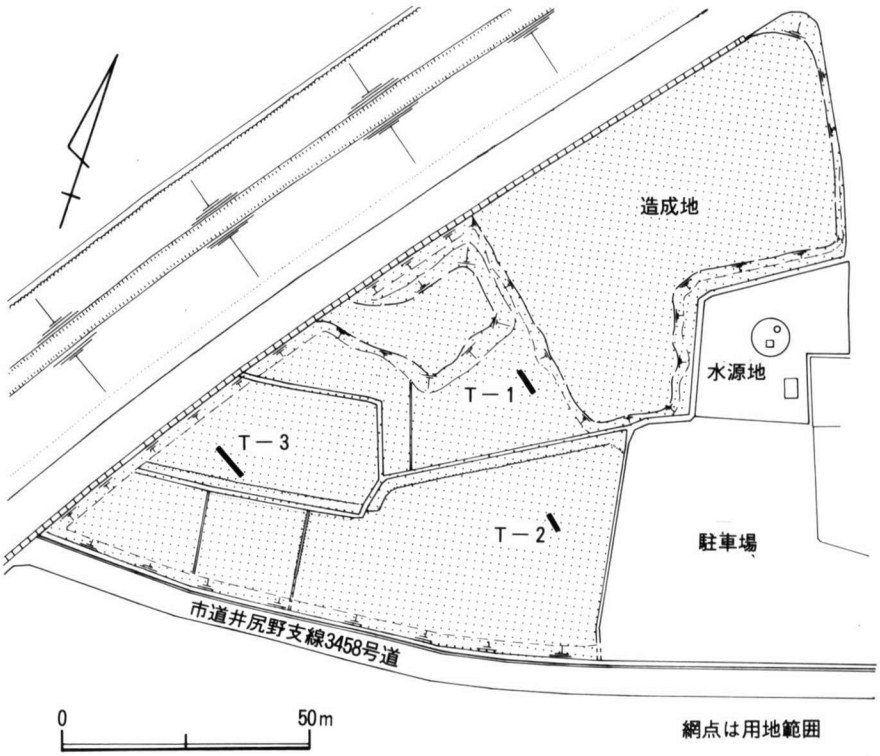
調査地の周辺では工場適地に選定されていることもあり，造成工事が急速に進められている。このなかで，遺跡が判明したのは調査地南の造成工事に伴う調査である。洪水砂下で近世の田畑が検出された。これ以外では遺物の出土が知られているのみである。

今回の調査地は周辺の地形から，一段高い中洲になることが考えられた。このため造成工事前に試掘調査を実施することとした。調査前に既存の造成地があったので，これは調査対象から外した。

試掘溝は想定される河道方向に直行する方向で３本設定した。東部分に入れた試掘溝２本はいずれも，表土下に茶褐色砂質土が20cmほど認められ，その下は砂礫層となる。西部分に設定した試掘溝では，表土下にある茶褐色砂質土は同様であるが，砂礫層の堆積が異なる。試掘溝西部分は砂層で北東方向に下がり，その上に礫層が覆う。



第20図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）



第21図　トレンチ配置図（S＝1/1,500）

今回の調査地は高梁川に近く絶えず氾濫を受け続けた地域と考えられる。このため砂礫層が高い位置にあり，場所により様相が異なる。上層の茶褐色砂質土はこの地が安定した時期があることをうかがわせるが，出土遺物がないため時期は不明である。また，遺構も検出されなかった。

（谷山）

第４図版　Ｔ－１

第５図版　Ｔ－３

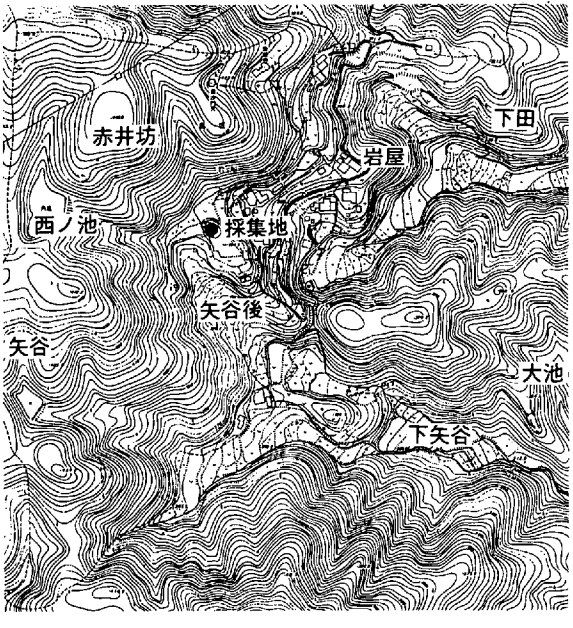
岩屋寺出土の遺物について

平成11年３月24日，総社市奥坂に在住の牧野正子氏より岩屋寺出土の遺物を寄贈していただいた。ここでは中世山岳寺院の重要性に鑑み採集遺物を紹介することにしたい。

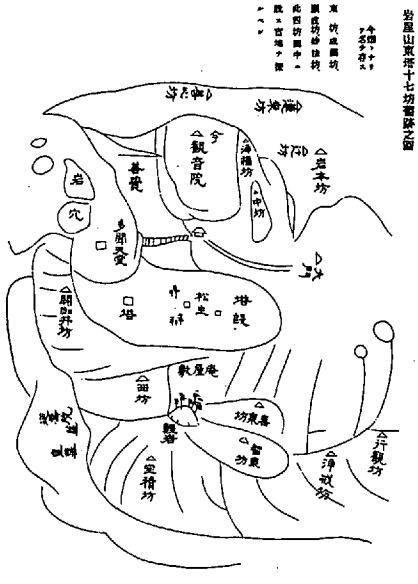
岩屋寺は，鬼ノ城から北西に約1.3km離れた吉備高原の南縁に位置する。岩屋寺の沿革を記した「岩屋寺記」（1462年）によれば７世紀中頃に沙門道教によって開かれた開山伝承が伝えられ，古代～中世にかけて隆盛を極めた寺院であることが窺える。室町時代に入ると新山寺と，もともと一山であった岩屋寺が独立化を強め，両寺とも別々に存在するようになるが，天文～天正年間（1532～92）の戦乱にまきこまれて，両寺の伽藍はほとんど消亡したと考えられている。

岩屋寺の場合は東塔院の毘沙門堂を残して消失破壊されたものの，近世に入ると少数の子院が再興され岩屋寺の法灯を伝えている。（註）

岩屋寺周辺にはかつての寺院と関連する字名がいくつか認められるが，その内の一つに「赤井坊」が確認できる。この「赤井坊」と呼ばれる山塊の頂部（標高462.2ｍ）を基軸に，支脈は東・南へとＬ字状に分脈し，その規模は東へ約900×350ｍ，南へ700ｍ以上×540ｍの広がりを見せ，この二つの支脈に挟まれた中央部には220×100ｍを測る低平な舌状丘陵が延びている。この舌状丘陵には現在延寿院が所在しているが，この堂宇の建築時に瓦・土器等の遺物が出土したといわれ，今回報告する遺物が採集されたのである。なお，現地にはかつての塔頭の一つである「西ノ坊」の石柱が建てられ，図23によって位置関係を確認することができよう。



第22図　岩屋寺周辺図（Ｓ＝1/10,000）



第23図　岩屋山旧跡図（『備中誌』から）

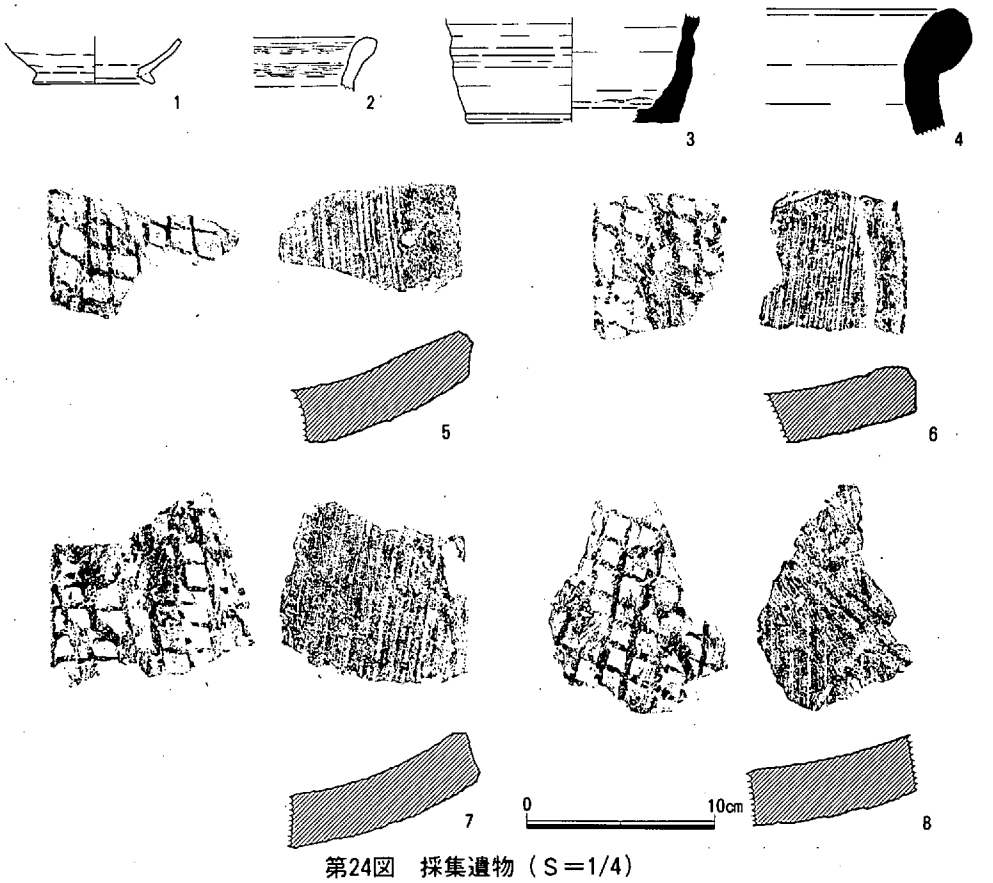
遺　物

遺物は舌状丘陵上に位置する延寿院周辺で採集された。1は吉備系土師器椀で高台を外方に向けて成形し，色調は黄灰色を呈する。2は鍋の口縁部で胎土は非常に細かく，外面にはススが付着し，内面にヨコハケ調整を行っている。3は須恵質の壷で全体的に強い回転を利用して成形され，体部外面には2条の沈線が認められる。4は備前焼甕で，口縁端部を肥厚させ内外面とも回転ナデが認められる。5～8は平瓦で凸面に格子目叩き，凹面には布目圧痕が認められる。5・7・8の観察によれば格子目叩きの切り合いから，叩きの原体幅は約4.5cmと推定され，格子目の形状は1～1.3cm角の菱形になるよう刻まれている。また凹面には布目痕が認められその単位は1cm当たり9～10本と細かく，糸切り痕が認められることから全て一枚作りの制作である。

以上の遺物の時期は全て中世の遺物と考えられ，1は13c中頃，3は13c，4は中世後期，5～8の瓦は詳細な時期は特定できないが中世と考えられるであろう。

最後になりましたが遺物を寄贈して頂きました牧野正子氏に感謝申し上げます。

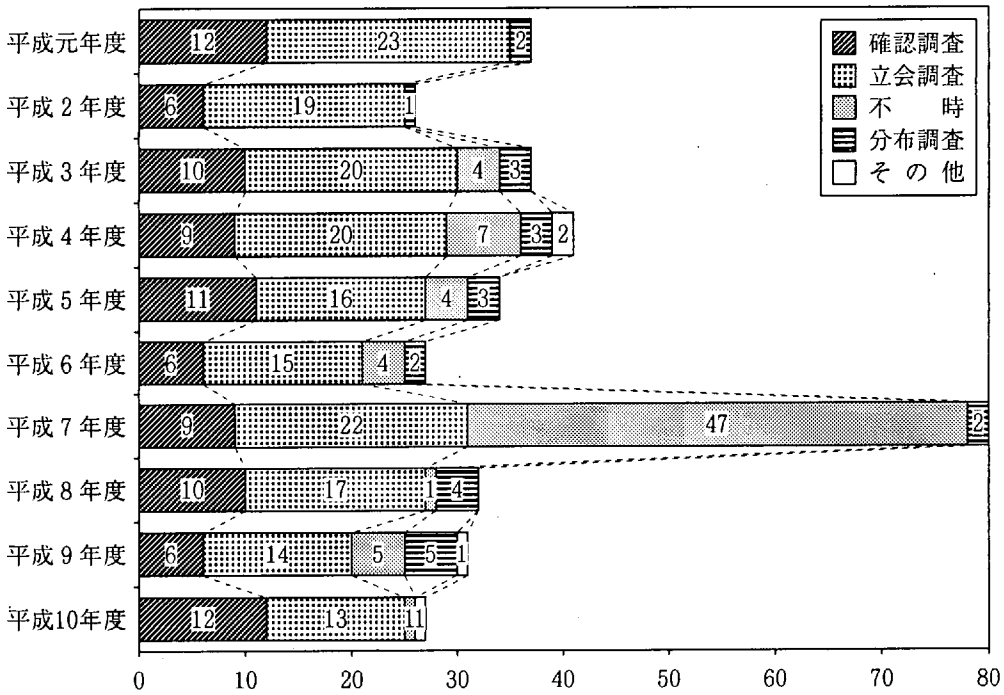
註．『総社市史』通史編，総社市役所，平成10年3月31日　　（松尾）



第24図　採集遺物（S＝1/4）

立会・確認調査件数

	確認調査	立会調査	不　時	分布調査	その他	計
平成元年度	12	23	0	2	0	37
平成2年度	6	19	0	1	0	26
平成3年度	10	20	4	3	0	37
平成4年度	9	20	7	3	2	41
平成5年度	11	16	4	3	0	34
平成6年度	6	15	4	2	0	27
平成7年度	9	22	47	2	0	80
平成8年度	10	17	1	4	0	32
平成9年度	6	14	5	5	1	31
平成10年度	12	13	1	0	1	27



3．発掘調査の概要

総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事に伴う発掘調査

遺 跡 名　上三本松遺跡

所 在 地　総社市真壁768－1，769－1，773－1，779－1

調査期間　1998年4月10日～7月10日

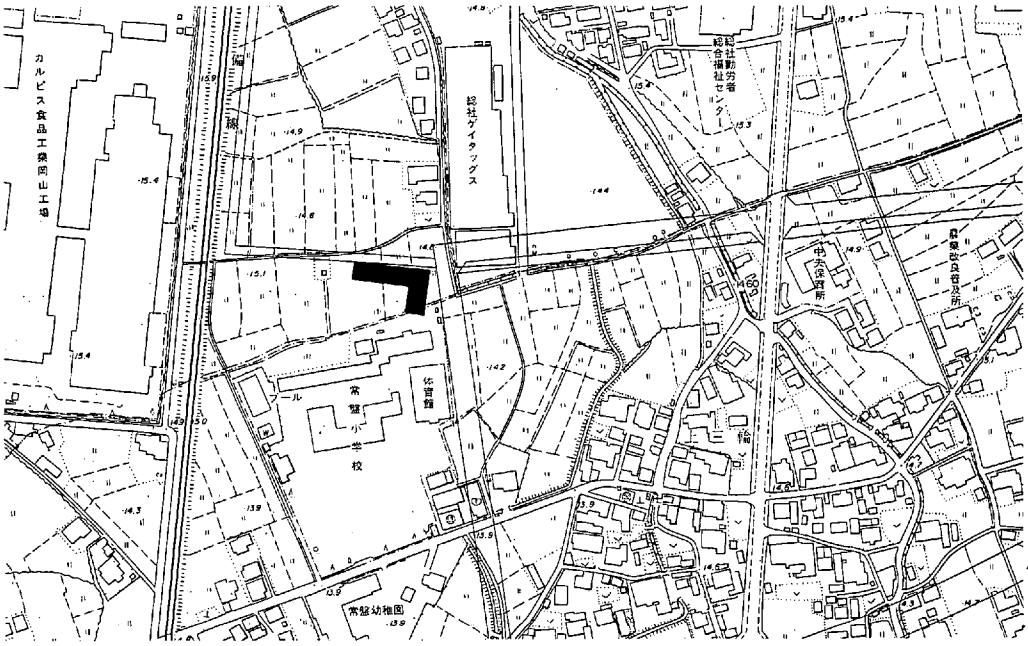
調査面積　約830m²

調査概要

（調査経緯）

総社市立常盤幼稚園は，1955年に建築された木造建物が多く，近年建具の開閉困難，壁のヒビ割れや屋根の損傷による雨漏りなど老朽化が進んでいた。また園児数の増加等により，拡張用地の取得及び園舎の増築を重ねてきたため，敷地が不整形かつ園舎の配置に無駄が多く，新敷地に移転新築することが望ましい状況であった。そうしたなか，総社駅南地区区画整理事業により，常盤幼稚園敷地が仮換地されたことから，敷地を移転し新築することとなった。

移転場所は常盤小学校に北接するもので，園舎は敷地内の東側に建設される予定であった。この地は昨年度の駅南区画整理事業に伴う発掘調査により弥生時代～中世にわたる遺構が数多く存在することが判明している。特に東及び北側にかけては古代の官衙関連遺跡も存在することから，敷地内の西側に園舎を建設するよう設計変更を要請した。しかし，出入口が東に面しており，機能的な面及び，なによりも来訪者管理の面から，建設場所の変更は困難なため，当



第25図　調査区位置図（S＝1/5,000）

初の設計通り，園舎部分の発掘を実施した。　（平井典子）

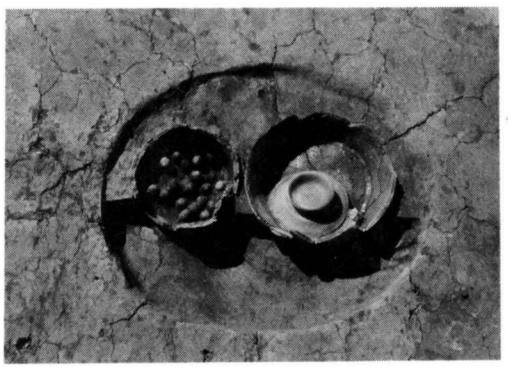
（遺構・遺物）

駅南区画整理事業に伴う昨年度の発掘調査から，園舎部分は中洲状の微高地に位置し，西側が縄文時代前期以前に，東側が古墳時代以降に形成された微高地に当たることが判明している。

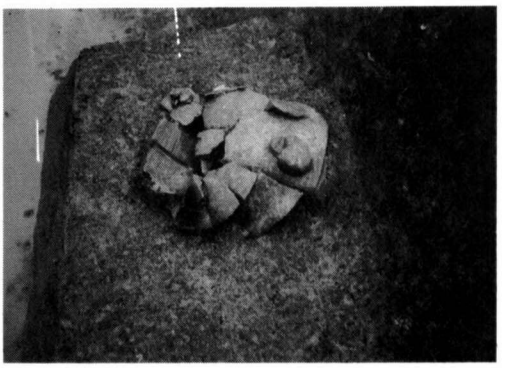
弥生～古墳時代の遺構は西側の古い微高地上に広がっており，昨年度この調査区の北側にあたる整地部分を調査した結果とほぼ同様の状況であった。弥生時代の住居址・貯蔵穴・土壙・柱穴・微高地の下がりに沿って掘り込まれた溝，古墳時代の住居址・柱穴などが検出された。

古代～中世の遺構としては，柱穴・土壙・溝等がみられ，この他，火葬墓，鍛冶炉も検出された。しかし，調査地に東接する駅南幹線１号部分の調査では，官衙関連の遺跡を想定させる古代の遺構・遺物が多数出土しているが，ここでは西にいくにしたがい遺構は減少し，遺物の内容も，施釉陶器や硯など官衙を彷彿させる資料は少なくなる。

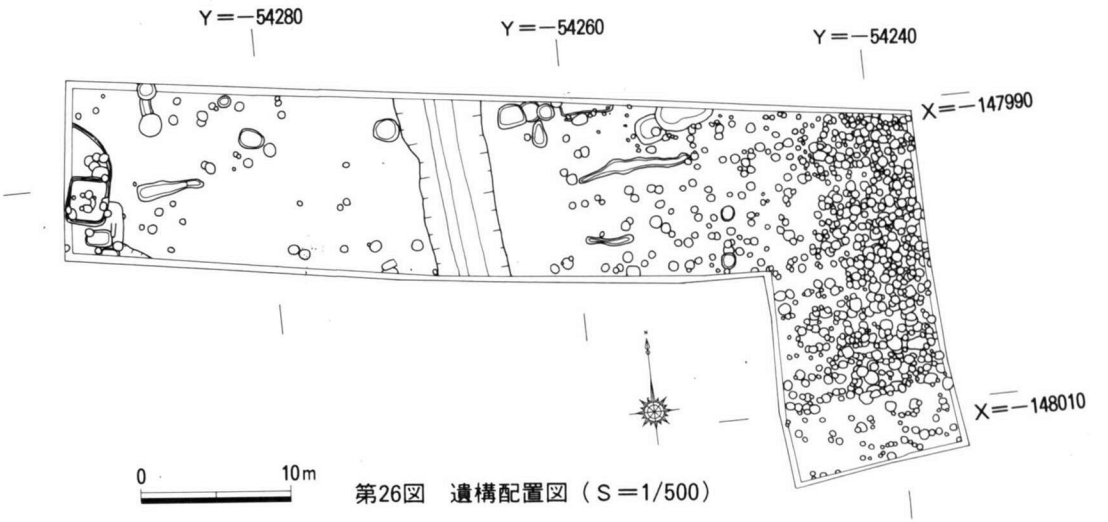
その他，縄文時代のものと思われる焼土を廃棄した土壙も検出されたが，遺物が出土しなかったため時期は定かではない。　（平井・高橋進一）



第６図版　火葬墓検出状況



第７図版　大溝内甑出土状況



第26図　遺構配置図（Ｓ＝1/500）

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺 跡 名　上三本松遺跡

所 在 地　総社市三輪

調査期間　1998年７月13日～1999年４月12日

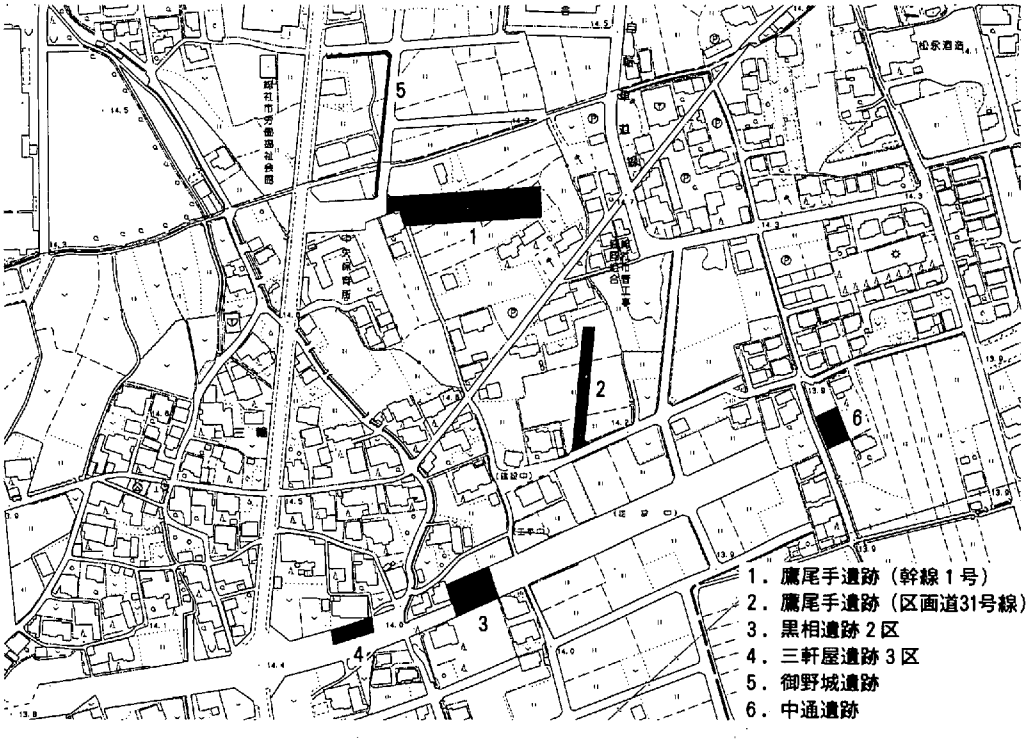
調査面積　約5,200㎡

調査概要

（調査経緯）

総社駅南部地域を対象とした区画整理事業に伴う1998年度の発掘調査は，工事の掘削が遺構面に及ばない整地部分を除外した道路部分と水路部分について実施した。一部工事に並行して調査せざるを得なかったため，昨年同様煩雑な調査工程となった。

総社市立常盤幼稚園移転地の調査終了後，すみやかに駅南区画整理事業に伴う発掘調査に取りかかった。まず，鷹尾手遺跡（幹線１号２区），次いで黒相遺跡２区・三軒屋遺跡３区→中通遺跡１区→御野城遺跡（３号水路１区）→鷹尾手遺跡（幹線１号２Ｂ区）→御野城遺跡（３号水路２区）→鷹尾手遺跡（３号水路４区）→鷹尾手遺跡（区画道31号線）→御野城遺跡（３号水路３区）→上三本松遺跡（１号水路）を一部重複しながら調査し，最後に若干次年度にか



第27図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

かったが中通遺跡２区の調査を終えて，今年度の調査を終了した。

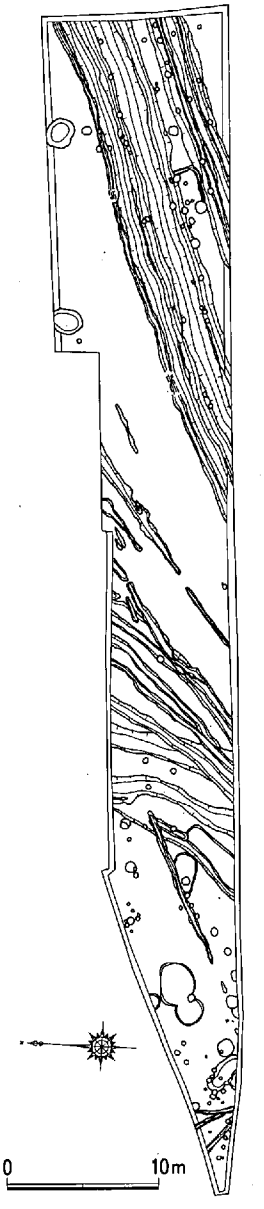
（遺構・遺物）

鷹尾手遺跡

幹線１号線部分は，昨年度の調査で６世紀代の集落が確認されたが，東接する幹線１号２区部分では地形は下がっていき，溝が主体となる。最も低い中央付近では，数条の溝が検出された。東半では地形は上がっていくものの，古墳時代以前の溝が北東～南西方向に多数重複して掘削されている。また弥生時代の基盤と考えられる層からは，縄文時代後・晩期の遺物が出土しているが，遺構は不明瞭で，僅かに土壙が３基確認されたのみである。遺物は縄文土器だけでなく，石鏃や石鏃などの石器も出土している。

区画道31号線部分は，弥生時代以降の溝が主となるが遺構の密度は低い。ここで特筆すべきことは，断面がＶ字状に近い幅約3.5ｍ，深さ２ｍの溝が出土していることである。調査区の南に位置する屋尾手遺跡（1994年度に調査）の溝に繋がるものと思われ，断面の形状，埋土の状況から環濠の可能性も考えられる。弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土している。

この他，縄文時代後期の土壙も若干検出されており，焼土や炭に伴って土器も出土しているが，量的には少ない。（平井）



第28図　鷹尾手遺跡（幹線１号）遺構配置図（Ｓ＝1/500）

黒相遺跡２区・三軒屋遺跡３区

黒相遺跡２区は，平成７年度に東側に隣接する調査地に，遺構の有無を確認するためのトレンチを設定したが，遺構の存在を確認することができなかった。今回の調査では，調査区の大半は微高地であったが，東半の約1/3の範囲においては基盤層に小礫が多く混在していた。

検出された遺構は，ほぼ南北方向の溝状の遺構３と，それに斜行する短い溝状の遺構及び柱穴であったが，全体として遺構の密度は低かった。

三軒屋遺跡３区では，溝２，土壙１のほか柱穴若干が検出された。なかでも土壙は，縄文時代の遺構と考えられ，宮瀧式の深鉢１が良好な状態で出土した。

御野城遺跡

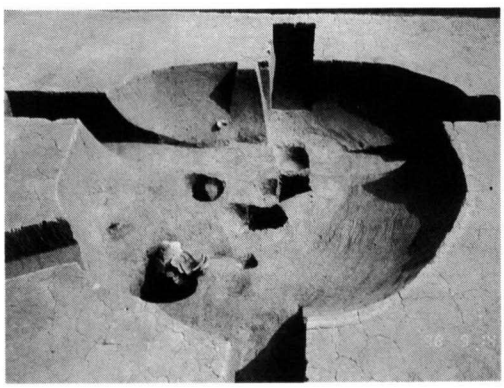
６世紀代の住居趾等が検出されており，昨年度調査した鷹尾手遺跡幹線１号１区部分から，

北にかけて集落が広がっているものと考えられる。水路部分のため調査区の幅は狭く，全体像を捉えにくいが，その密度は高いものと思われ，住居趾が10軒余り確認されている。地形は南に下がっていき，調査区の南部分では溝が主体となる。

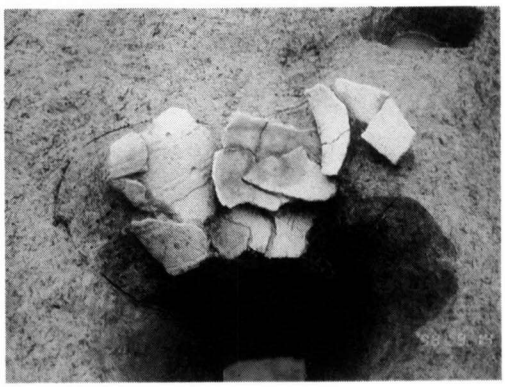
中通遺跡

中通遺跡は上下２面の調査を行った。上面からは，古代から中世にかけての遺構と考えられる建物１，溝状の遺構，柱穴が検出された。下面からは多くの柱穴とともに，縄文時代の遺構と考えられる径１～２ｍ程度の不定型の土壙が多く検出された。

また調査区の東半からは縄文時代に形成されたと推定される微高地の下がりが検出され，比較的多くの縄文土器が出土した。（高橋）



第８図版　三軒屋遺跡３区土壙



第９図版　深鉢出土状況

第10図版　鷹尾手遺跡（区画道31号線）大溝

第11図版　鷹尾手遺跡（区画道31号線）大溝断面

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(1)

遺 跡 名　法正寺１号墳・樽見１号墳

所 在 地　総社市山田

調査期間　1998年７月14日～８月31日

調査面積　800㎡

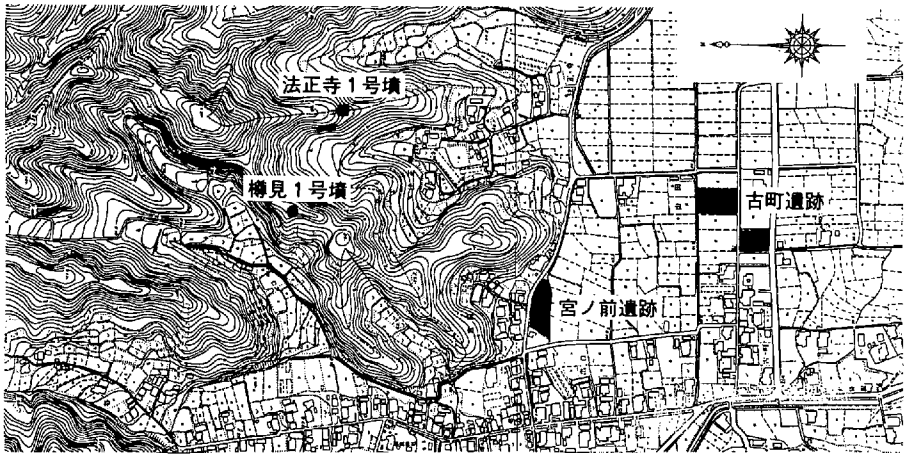
市西部の山田地区で，約100haを対象として平成10年度より五ヵ年計画の県営農業基盤整備事業に着手することが決定した。これに伴い，総社市教育委員会では埋蔵文化財の有無について関係諸機関と協議を行ない，平成10年度の工事予定区域の平地部約10haと，集落の背後の尾根部を横断する集落道予定地について確認調査を実施することとなった。

確認調査は，９月から工事が着手される予定の尾根部について７月より先行して行い，平地部は稲刈り後に実施することとした。

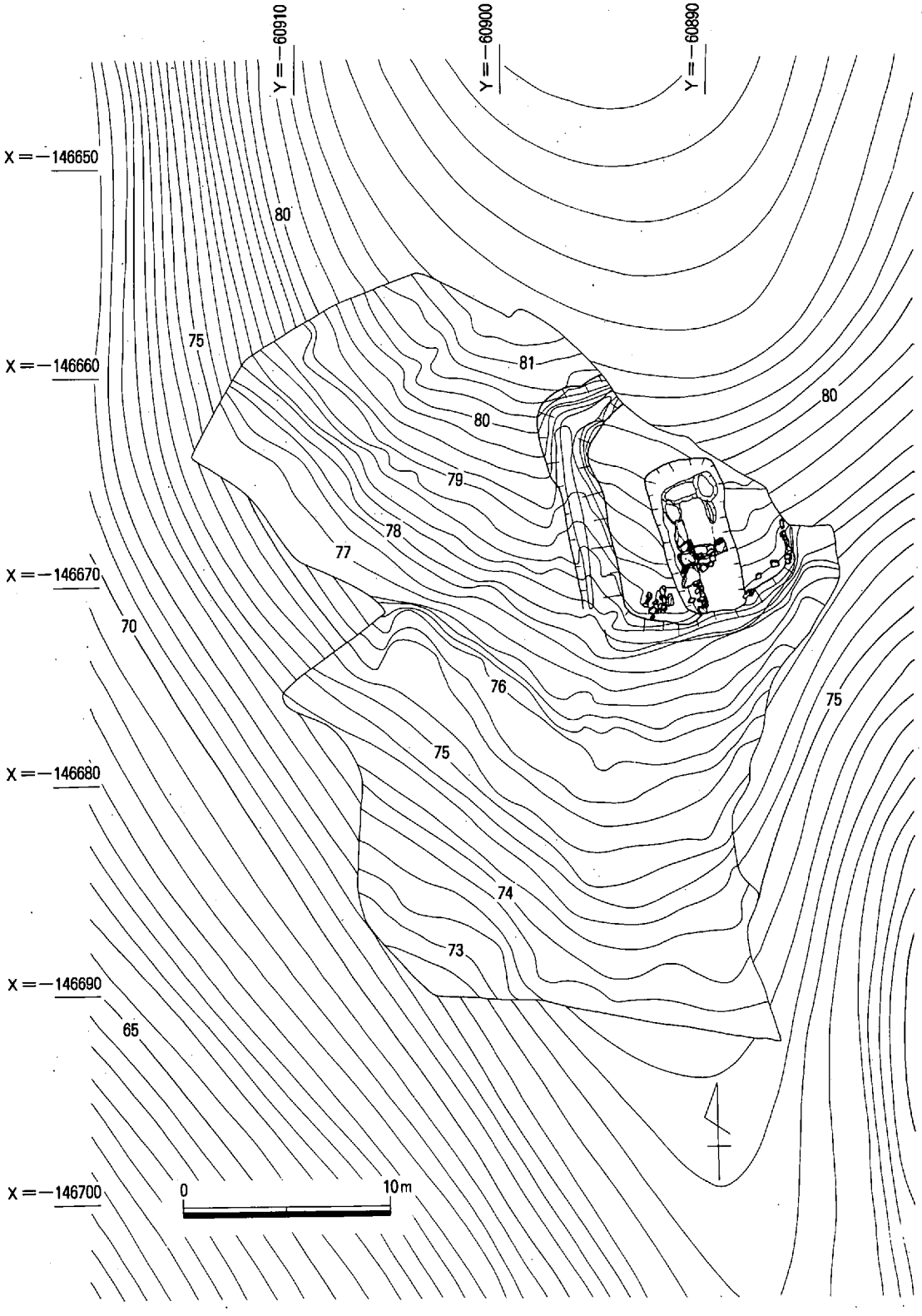
集落道が計画された樽見地区と法正寺地区の内，樽見地区の尾根上と西側斜面には，箱式石棺と横穴式石室を主体とした10基程度の古墳で構成される樽見古墳群の存在が知られており，工事対象地域内を伐採した時点で，盗掘により蓋石が一部除去された１号墳を確認した。

また，東側の法正寺地区の尾根は伐採の時点では明確な墳丘等は確認できなかったが，尾根の稜線に並行して設定したトレンチの上端で，墳丘の盛土と石材の抜き取り痕跡が認められたことから，墳丘が良好に残存する古墳１基を確認し，法正寺１号墳と命名した。

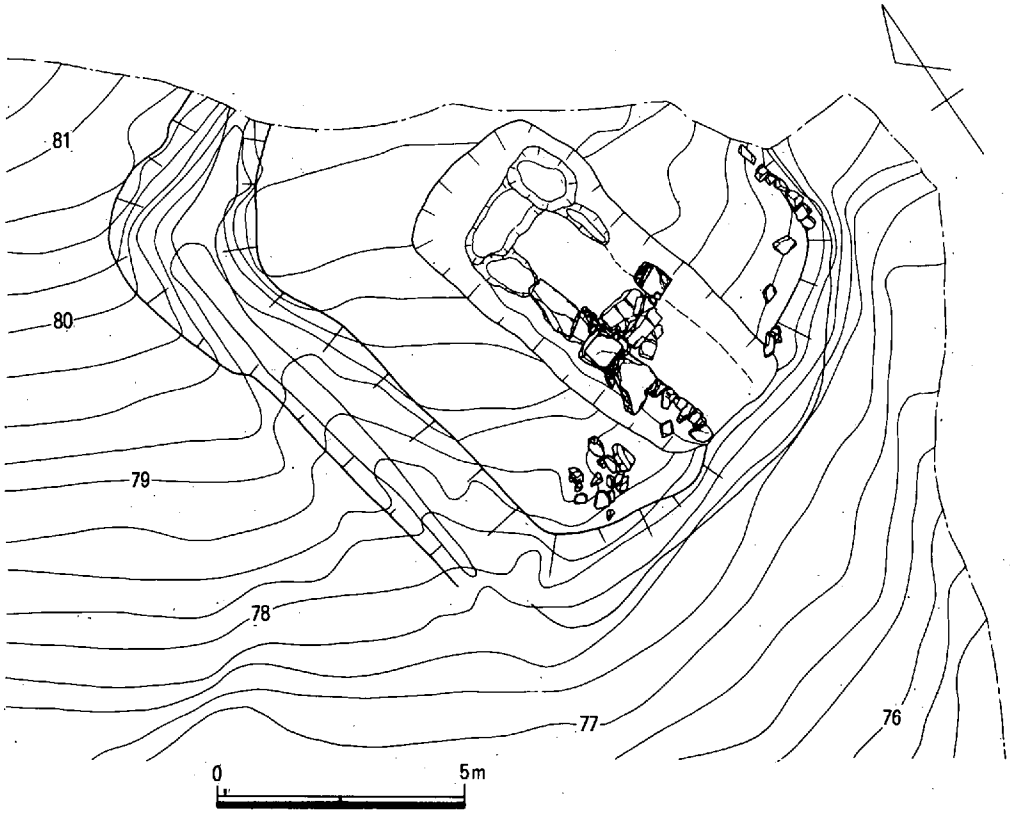
確認調査で所在が明らかになった２基の古墳について，保存の方向で関係諸機関と協議を重ねたが，既に用地買収が終了しており路線変更が困難なため，止むを得ず記録保存の処置をとることとなり，県教育委員会文化課の指導を受けて市教育委員会が発掘調査を実施した。



第29図　遺跡位置図（Ｓ＝1/10,000）



第30図　法正寺１号墳墳丘平面図（Ｓ＝1/100）



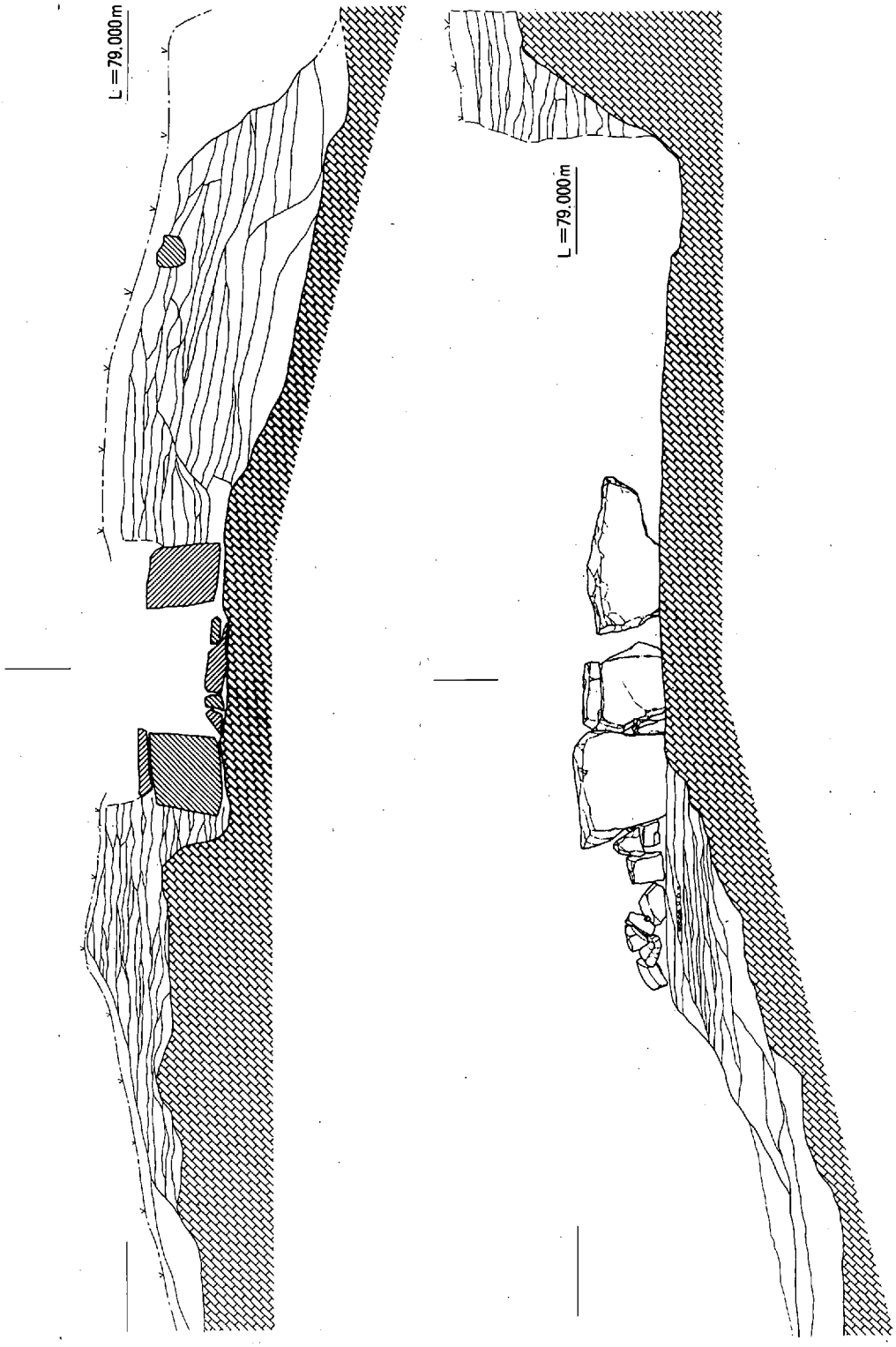
第31図　法正寺１号墳墳丘平面図（Ｓ＝1/150）

(1)　法正寺１号墳

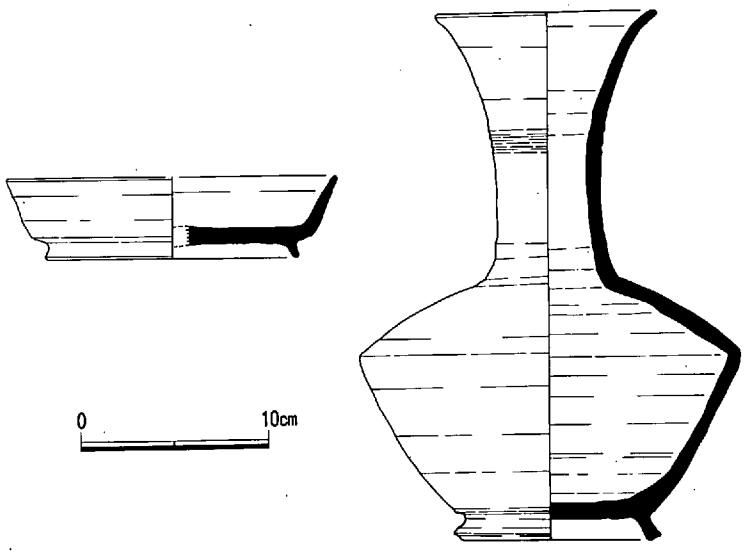
法正寺１号墳は現集落を望んで，南へ樹枝状に派生するやせた尾根上に位置し，稜線の傾斜が段状に下降する標高80ｍ前後の南向き斜面に構築されている。

本墳の埋葬主体部は横穴式石室であるが，大半の石材が溜め池の構築材に転用して抜き取られており残存状態は非常に悪い。確認できた石材の据え付け穴等から推定すると，石室の平面形態は無袖で，規模は長さ680cm，幅120cm前後と推定される。

残存する石室の石材は，いずれも上端を揃えて平滑な面を石室内面に向けて据えられており，一部に加工したとみられる痕跡も認められ，比較的整美な石積みであったと想定できる。



第32図　法正寺１号墳墳丘断面図（Ｓ＝1/60）



第33図　法正寺１号墳出土遺物（Ｓ＝1/4）

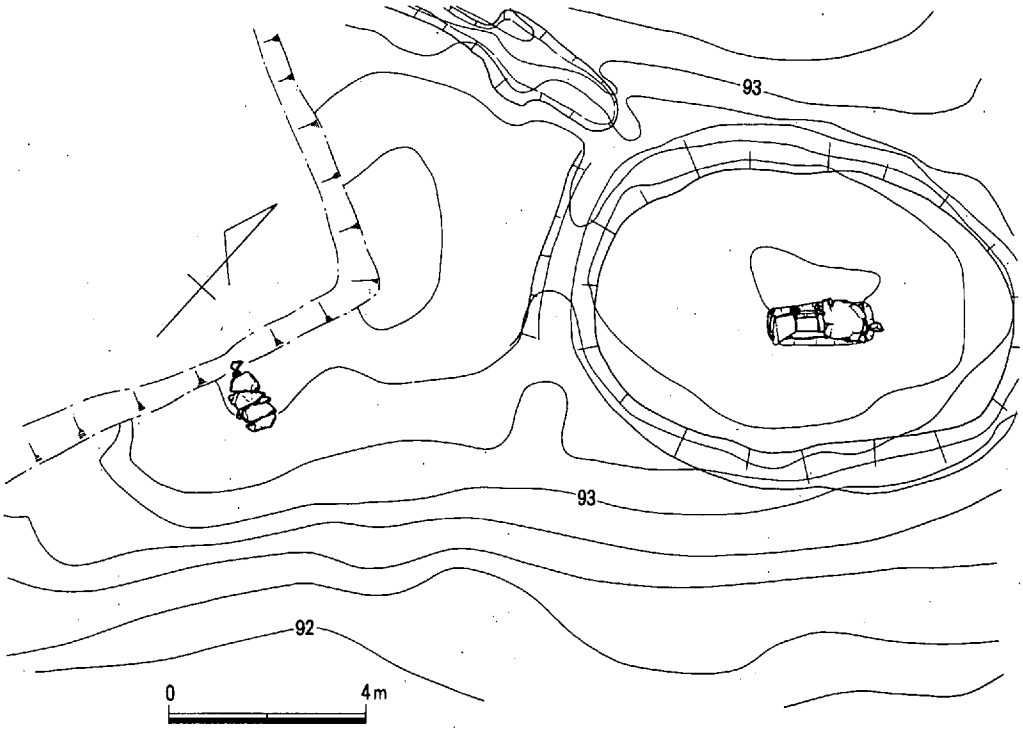
墳丘は北東隅が用地外になるため，全体の正確な規模・形態は不明であるが，調査した範囲の墳端で推定すれば東西辺11ｍ，南北辺12ｍの方墳と考えられ，前面の段の有無は開墾による削平が激しく不明である。墳丘の盛土は，細かい砂質土と粗い真砂土を交互に入念に突き固めて構築されている。特に地形が下降する墳丘東側は，灰混じりの細かい砂質土で石室の西側の地山と同じ高さまで積み上げた後に，石室掘形内を石材の積み上げに応じて入念に突き固めている。また，墳丘背後の周溝は急傾斜を深く掘り込んでおり，傾斜の交換点に位置した立地と相まって墳丘の背面は屏風状に切り立った景観を呈していたと考えられる。

古墳の築造時期は西側周溝の底面上と石室内から出土した須恵器の坏・長頸壺より古い時期の遺物は認められないため，須恵器の示す７世紀末期葉～８世紀初頭と考えられる。

総社市内に於ける本墳と同時期の終末期古墳の調査例としては，千引７号墳，福井大塚12号墳がある。いずれも両脇に尾根が伸びる奥まった地点に立地し，方墳である点は共通しているが，墳丘・石室の規模・構造は本墳に較べてかなり貧弱である。

また，県内の終末期古墳の調査例と比較すると，備中北部の北房町に所在し，特異な段構造の列石を有する終末期の方墳として著名な大谷１号墳・定北古墳に，墳丘・石室はほぼ次ぐ規模といえる。さらに，古墳の立地と残存する整美な石材や，非常に入念な墳丘の盛土も通常の終末期群集墳とは隔絶した内容であり，古墳の築造時期が藤原京期に当たる点とあわせて考えると，本墳の被葬者を国衙・評衙の官人に登用された在地政治勢力とみることができよう。

なお，古墳の周溝覆土と墳丘盛土からは，上方から流れ込んだ弥生土器の破片が多数出土した。これらの土器片はいずれも供献用の壺・高杯であることから，調査区外に所在する古墳の上方の高まりは弥生期の墳墓である可能性が考えられる。



第34図　樽見１号墳墳丘平面図（Ｓ＝1/150）

(2)　樽見１号墳

樽見１号墳は，現集落を分断するように最も南に伸びる緩やかな尾根上に位置している。

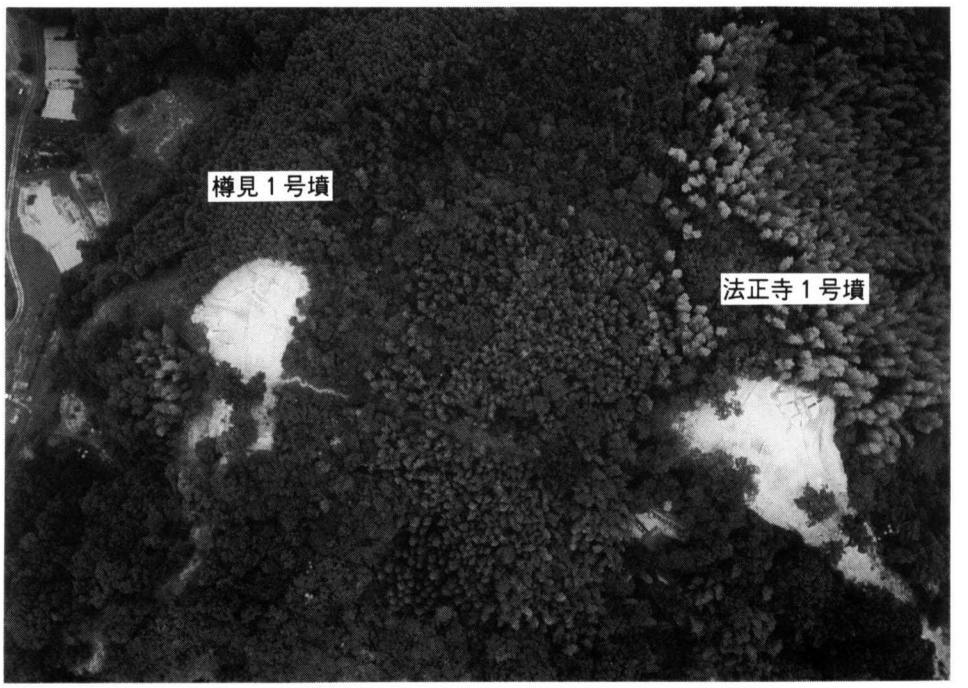
古墳が所在する尾根は戦前から開墾が進行し墳丘の近くまで削平が及んでおり，主体部の箱式石棺の蓋も一部が取り去られており，内部も攪乱を受け開口した状態であったため古墳の存在は従来から知られていた。

発掘調査は樹木の伐採後に，尾根の稜線上と斜面にトレンチを設定して遺構の有無を確認し，樽見１号墳と，隣接して石蓋土壙墓１基を検出した。地元では開墾時にこの尾根上の数カ所から土器が出土したことが知られており，今回の調査対象範囲では他の遺構の存在は確認できなかったが，地形からみて弥生期の集落や前期古墳が存在した可能性は十分考えられる。

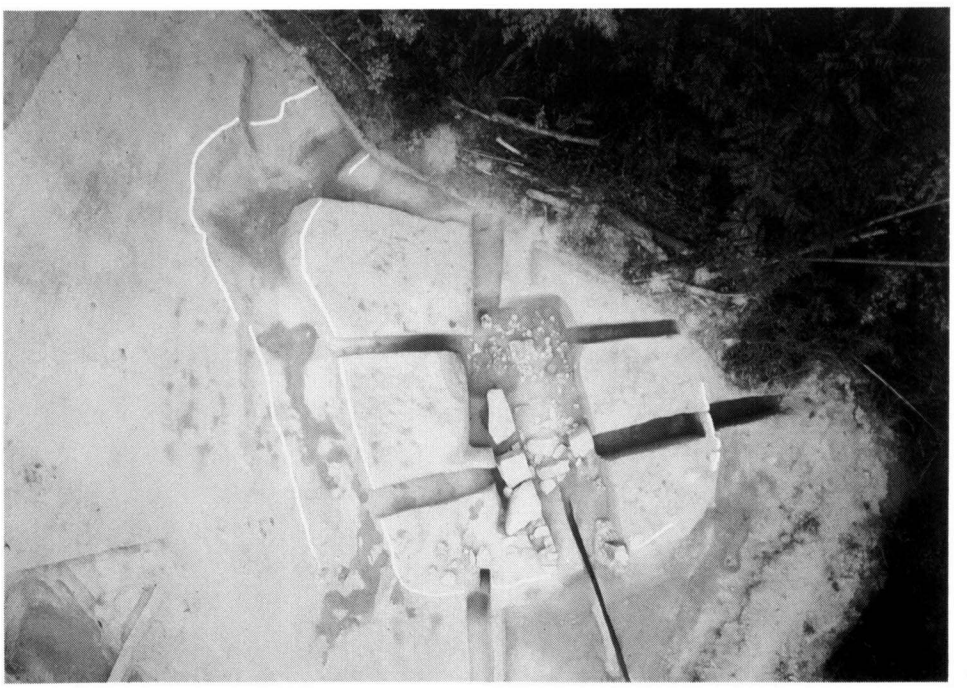
樽見１号墳は，箱式石棺を主体部とする長径約9.5ｍのやや楕円形を呈する円墳で，尾根の稜線を幅約1.5ｍの周溝で分断し，地山を整形して墳形を造り出しており，盛土の大半は流失しているものの墳丘の形態は明瞭に視認できる。

主体部の箱式石棺は盗掘時に床面を攪乱されており，遺物等は皆無であった。

また１号墳と周溝を隔てた南側の高まりで，板石で蓋をした土壙を検出したが，周囲に墳丘等の地形を改変した痕跡は認められず，１号墳と接近した時期の埋葬遺構とみられるものの，遺物の出土も皆無のため関係は不明である。　（武田恭彰）



第12図版　樽見１号墳・法正寺１号墳



第13図版　法正寺１号墳（南から）

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(2)

遺 跡 名　宮ノ前遺跡・古町遺跡

所 在 地　総社市山田

調査期間　1998年12月8日～1999年3月31日

調査面積　4000㎡

今回，ほ場整備事業の対象となった山田地区は，砂子山古墳群をはじめとして丘陵部には古墳が集中していることが知られている他，鬼ノ身城を中心とした16世紀の城下町の存在も想定される等，埋蔵文化財の濃密な分布が予想される地域である。

このような状況を鑑み，市教育委員会では，先ず平成10年度のほ場整備工事対象区域約10haの内，掘削の予定される約3haについて遺構の有無，範囲を確認するため人力による試堀調査を実施した。その結果，現水田の標高から予想した地形に反して，丘陵から派生した幾筋もの小谷が形成した低湿地が各所で確認され，南向きでなだらかに広がる現地形の景観の大半は，後世の地上げ造成によるものであることが判明した。このため，遺構の存在が確認されたのは山裾の宮ノ前地区と現集落周辺の古町地区の計約4000㎡のみであった。また，遺構の密度も一時的に限られるため濃密ではなく，隣接する新本地区でみられた弥生・古墳時代の大規模集落が古代・中世の遺構と著しく重複する様相とは対照的な様相を呈している。

なお関係諸機関と協議の結果，確認された宮ノ前遺跡・古町遺跡については，いずれも削平深度が大きく現状での保存が困難なため，市教委が発掘調査を実施することが決定した。

宮ノ前遺跡の調査は平成11年2月下旬から着手し，他の地区での確認調査のため一時中断したが6月末に終了した。遺跡は現集落に接して小谷が丘陵裾部を浸食して形成された扇状の段丘上に所在し，8～9世紀初頭の集落址と，13世紀末葉に開削された水路を確認した。

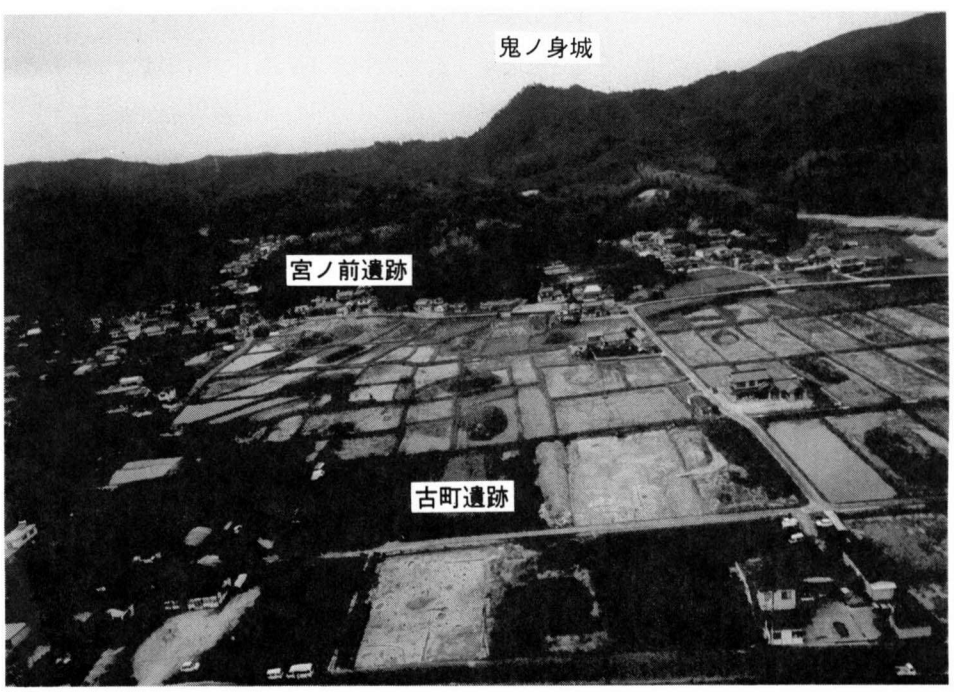
確認された律令期の集落は8世紀前半にその中心時期があり，建物・倉庫・溝・炭窯が検出された。建物群は方位に合致して建てられているが，全体に官衙特有の規則的な配置はみられず，規模も市内で明らかになっている郡衙クラスのものに較べて小さい。

しかしながら，出土遺物でみると丹塗り土師器や円面硯・転用硯のまとまった出土は，通常の農村集落ではみられないものであり，自然発生的な集落中に設置された末端行政施設とも言うべき官衙の可能性が考えられる。

宮ノ前遺跡から低湿地を隔てて，南に約200mの地点に位置する古町遺跡では，16世紀後半の建物跡・井戸・土壙が多数検出された。これらの遺構は関ケ原の役まで鬼ノ身城に在城した宍戸氏に関係する屋敷とみられ，改役後に一帯が急速に水田化した状況が窺われた。

なお，この二遺跡は，主調査期間が平成11年度のため，来年度の報告で詳細に報告したい。(武田)

第14図版　宮ノ前遺跡



第15図版　古町遺跡（南から）

総社小学校プール建設に伴う発掘調査

遺 跡 名　諸上遺跡

所 在 地　総社市総社

調査期間　1998年12月21日～1999年１月24日

調査面積　350㎡

調査対象地となった総社小学校は，旧市街地の中心に鎮座する総社宮と国道180号線を挟み北東に位置しており，明治期に学校が建設されるまでは広大な境内地の一部であった。

市教育委員会では，平成10年の12月補正予算で老朽化したプールを急遽建て替えることが決定したことをうけ，総社宮周辺が備中国府の有力な推定候補地である点を考慮し遺跡の有無についての確認調査を実施した。この結果，建設予定の校庭東端で遺構を確認したが，プールの竣工が地元学区の要望により平成11年６月に予定されているため，ただちに基礎工事部分の350㎡について発掘調査を実施することになった。

発掘調査予定地は，旧校舎の基礎等の構造物が埋没していることが予想されたため，重機を用いて遺構面まで掘削した後，人力で精査を行って遺構の検出を行った。

遺構面は現校庭から約50㎝下の高さで確認できたが，地下構造物等の攪乱が激しく柱穴等の遺構が良好に検出できた面は全体の半分以下にとどまる。

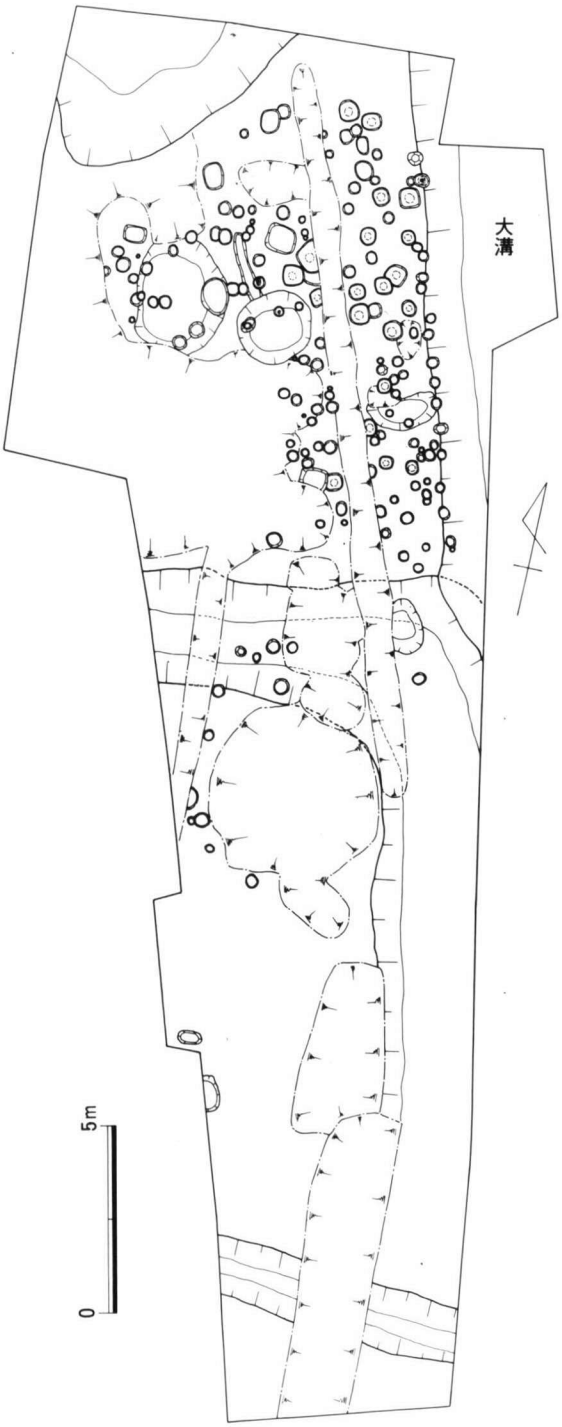
調査区の北半で検出された土壙・柱穴は淡灰色の埋土で，柱痕や柱の抜き取り後に小石を詰めた状態も確認できたが，攪乱が多く正確な配置は確定できていない。これらの土壙・柱穴の時期は，出土した陶磁器・土師器から13世紀末葉～14世紀前半と考えられる。

さらに，調査区東端では南北に走る深さ90㎝の大溝を検出したが，この溝の肩部には柵列とみられる柱穴が直線的な配置で掘られており，本来の深さが１ｍ以上と推定できる大溝が，防御的な役割の濠であったことを示している。

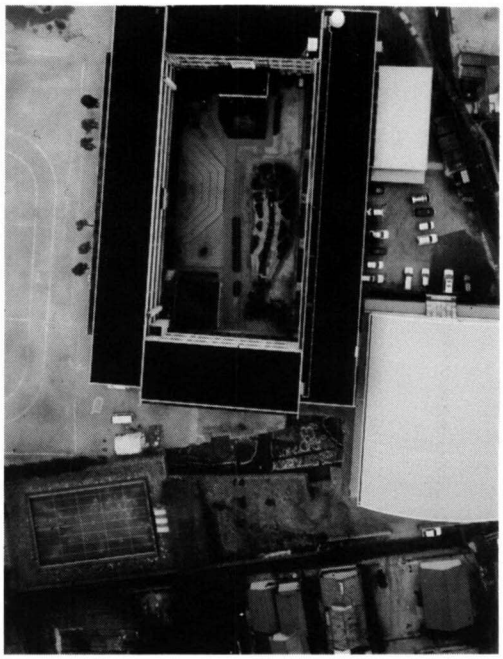
大溝の断面観察から，溝が機能していたのは柱穴群と同時期であり，16世紀には完全に埋没し，近世に再び小規模な溝が掘り直されたことが明らかになった。大溝の規模は今回の調査区内では不明であるが，底面が上昇し始める変換点から推定して幅は４ｍ程度と考えられる。

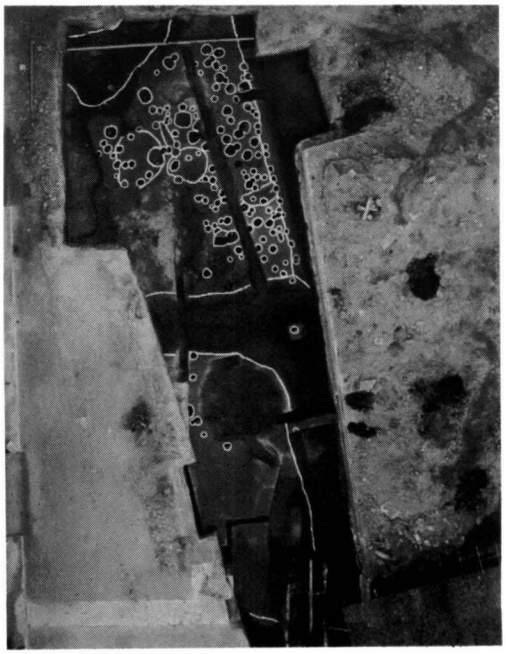
また，調査区の中程で西に屈曲する幅約２ｍ，深さ50㎝の溝を検出した。溝は中世段階に周辺の弥生期の遺構を削平して埋められており，埋土中には土器片がまとまって含まれていたが，底面からは８世紀の須恵器が出土したため，溝が機能していたのは奈良時代と考えられる。

今回の調査では範囲が限られるため遺構の性格について詳しく言及できないが，中世・古代の溝が共に方位に合致して掘られている点から，政治的な要素を有する施設の可能性が高く，近接する総社宮との関係を想定して，地形・地割りを含めた検討が必要であろう。　（武田）



第35図　諸上遺跡遺構配置図（S＝1/200）





第16図版　諸上遺跡

三須地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査

遺 跡 名　三須中須賀遺跡・美濃田遺跡

所 在 地　総社市三須

調査期間　1999年1月24日～3月31日

調査面積　1140㎡

平成10年度の三須地区県営ほ場整備事業は，前年度に調査を実施した河原・畠田地区に続き中須賀・美濃田地区が対象になった。中須賀・美濃田地区は確認調査時に遺構が部分的に存在することが明らかになっている。しかしながら，工事計画では全面が盛土となるため関係諸機関と協議の結果，遺跡に抵触する掘削予定の幅約3ｍの南北水路部分についてのみ，市教委が県文化課の指導を受けて発掘調査を行い記録保存を行うこととなった。

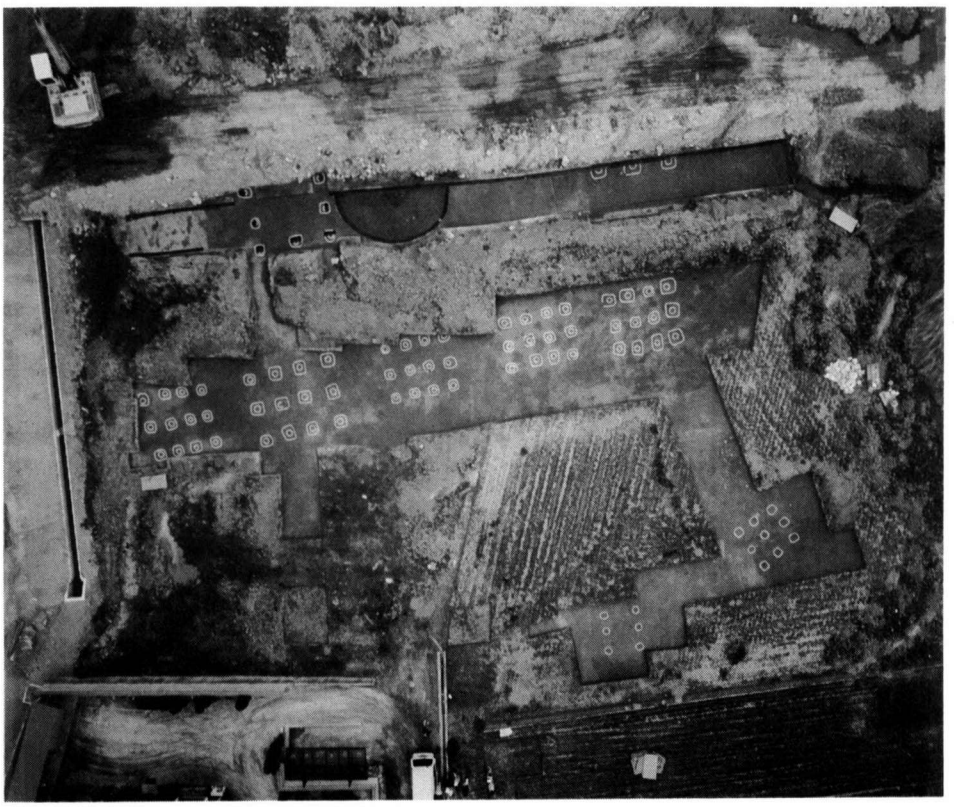
発掘調査は美濃田遺跡から着手し，東西方向の弥生時代後期の溝1条，古墳時代初頭の住居址1軒を調査した。美濃田遺跡についは，隣接する国道の拡幅時に弥生期の住居址が確認されているが，今回の調査では北に隣接する中須賀遺跡・畠田遺跡ほどの濃密な遺構の分布はみられず，微高地の範囲は不確定だが一帯に広がる集落遺跡の南端にあたると考えられる。

中須賀遺跡は美濃田遺跡・河原遺跡との間に位置し，両遺跡とは幅約30ｍの低位部で隔てられた東西に伸びる微高地上に，弥生・古墳時代の遺構が濃密に存在する状況が確認調査時に明らかになっている。

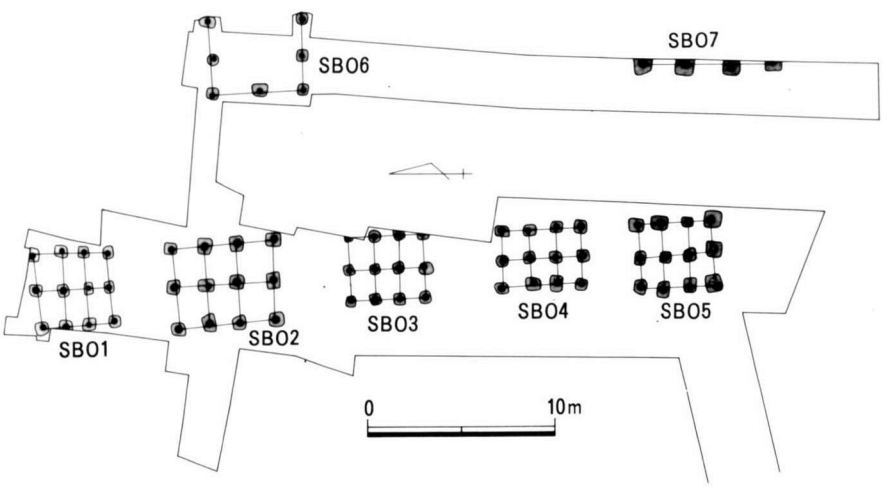
中須賀遺跡の水路部分の調査では弥生期の住居址1軒が検出されたが，他に方形の掘形の柱穴が並列して存在することが明らかになり，確認調査時には未確認であった古代の遺構が広がることが確実となった。このため，遺構の範囲を確認するため，土盛り工事が及んでいない西側の水田に試掘溝を拡張したところ，南北に直線的に配置された総柱の建物5棟を耕作土直下で検出した。さらに西側の国道付近まで試掘溝を延長したが，小規模な建物が散在するのみであり，5棟の建物以外に規則的な配置はみられない。

5棟の建物は全て2×3間の総柱式高床倉庫と考えられるが規模は不揃いであり，床面積は13.6㎡～23.6㎡とやや幅がある。ただ，建物群の主軸が南北に合致し，ほぼ直線である点と柱穴の埋土の状態から5棟の建物は同時期に存在した可能性が高い。

これらの建物は柱穴周辺から出土した須恵器から，河原遺跡のⅠ期と同時期の8世紀初頭の所産であると考えられ，両遺跡を隔てる低湿地は後世に掘削されたことを考慮すると，本来は同一の建物群として造営された可能性は十分考えられる。この場合，5棟の倉庫を郡衙の正倉とするのには小規模であるが，水路調査区の南端のSBO7は推定床面積が35㎡以上ある点から，本体の大規模な正倉群は東の未調査部分に存在すると考えられる。　（武田）



第17図版　中須賀遺跡



第36図　中須賀遺跡遺構配置図（S＝1/400）

真壁遺跡（中央４丁目地点）の調査概要報告

遺 跡 名　真壁遺跡

所 在 地　総社市中央４丁目14－105

調査期間　平成10年８月31日～平成10年９月14日

調査概要

（調査経緯）

今回の調査は，共同住宅建設にともなう事前の発掘調査として実施したものである。調査地は，高梁川分流により形成された総社平野のほぼ中央に位置し，標高約13ｍを測る。周囲の状況は市街地の南東部にあたり，住宅化等の進行著しい地区である。

真壁遺跡は，昭和55～57年の中央地区土地区画整理事業に，昭和63年の職業安定所総社出張所建設に伴ってそれぞれ発掘調査が行われており，ほかにも立会・確認調査等が数多く実施されている。その結果，縄文時代から中世にいたる遺構や遺物を多数検出しており，中でもとくに弥生時代では総社平野内における拠点的集落としての様相のうかがわれる状況である。

（遺構・遺物）

調査地の北に接する都市計画道路位置で住居群が，南東のやや距離があるものの同じく道路位置で溝群がこれまでに検出されており，調査地内には住居群と溝群の存在が予想された。

検出された遺構は，溝群のみであった。その多くが北西～南東に流れるもので，掘削と埋没が幾度か同位置で行なわれたことによるやや幅広かつ深めの溝群と，それに取りつく幅の狭いかつ浅い溝群の２つが認められる。また，予想された住居群については，建物位置が敷地の南に寄っており，北に接する道路との間に距離があることから検出されなかった。

出土した遺物は，溝によりかなり点数の片寄りが認められる。深さのある溝群の方が当然出土した量が多いものの，その中でも溝によって片寄りが生じている。

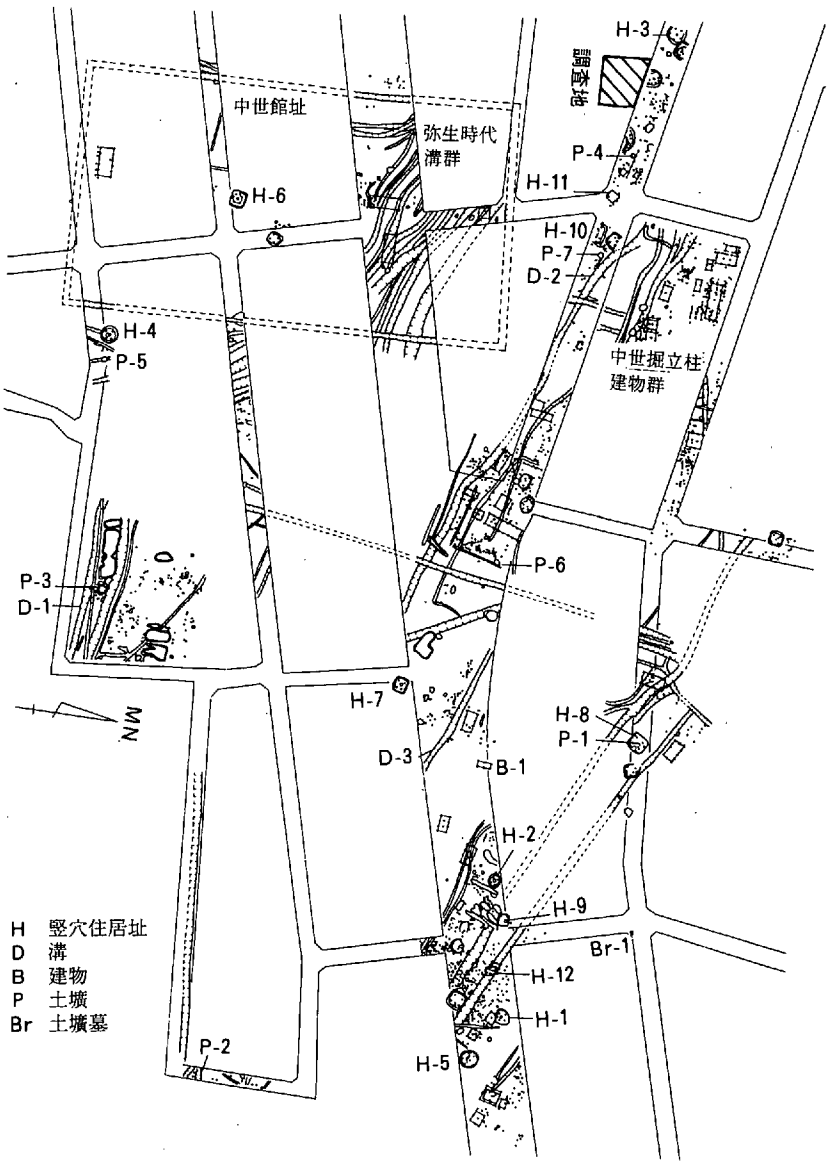
（まとめ）

今回の調査は，建築確認申請の合議による事前審査で，３階建ての店舗付き共同住宅のために地盤の改良が予定されたことから緊急に行った発掘調査である。充分な調査期間はとれなかったものの，これまでの調査例からより高い予測がたてられ，調査に充分活かせられた。

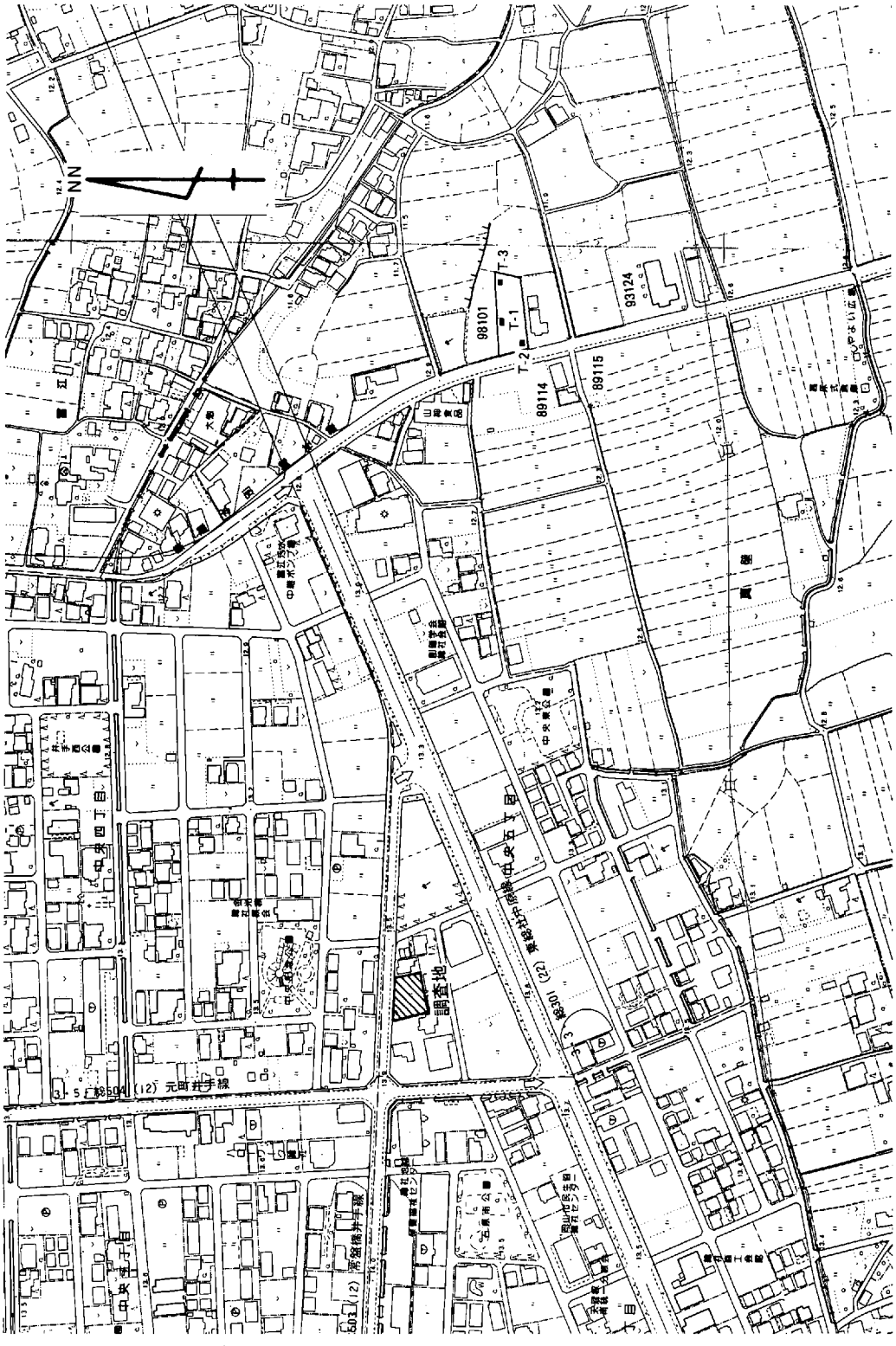
第18図版　調査地全景

住居群と溝群が予想された今回の調査地であるが，建物部分のみが調査対象であったことから，溝群のみの検出にとどまった。溝の形状等からは2種類に分けられ，深さ1m前後・幅1.5m以上のものと，深さ0.3m以下・幅0.5m前後のものとなる。前者は集落内の主排水路，後者は従排水路としての用途が考えられる。出土した遺物は，整理前の洗浄も行ってないことから詳細不明であるが，大部分が土器類で，完形となるようなものは少ないと思われる。調査時の判断から弥生時代中期～古墳時代中期ごろの溝群となろうか。なお，溝群の検出面となる土層とその下層において炭化粒や縄文土器と推定される小片がわずかに検出されたことから，当時期の遺構の存在が予想され，溝群のないわずかな空間を精査したが検出できなかった。

（前角）



第37図　調査地周辺遺構図（S＝1/2,500）



第38図　調査地位置図（S＝1/5,000）

鬼ノ城　西門跡および鬼城山周辺の調査

所 在 地　総社市黒尾1141ほか２筆

調査期間　1998年９月16日～1999年４月22日

調査面積　約1660㎡

はじめに

平成６年度に東門跡の発掘調査を実施して以来，５年目を迎えることとなった。

本年度の発掘調査は，平成９年12月10日に開催した第７回「鬼城山整備委員会」において決定した，西門跡の城内部および城内最高所である鬼城山周辺を対象として行うこととなった。整備委員会の席上では，北門跡の発掘調査も討議されたが，同門跡は開口部の床面石敷材が横転するなど残存状況が悪く，調査後の遺構保存にやや課題が残ることから，後日を期すこととなった。

調査状況については，次項以下で報告するが，特筆すべきは「版築用の柱」と考えられる柱穴列が，鬼ノ城ではじめて外面の前面および土塁中において検出できたことである。

調査中の平成10年11月９日に第８回「鬼城山整備委員会」を開催した。

諸先生方には，ご多忙にもかかわらず現地でのご指導ご助言をはじめ，整備計画案のご提言ご検討など，多大なご支援をいただいた。

また，文化庁，岡山県教育委員会など関係機関各位からもご指導ご助言をいただいた。銘記し，深く謝意を表します。

鬼城山整備委員会

委 員 長　　坪井清足（大阪府文化財調査研究センター理事長）

副委員長　　近藤義郎（岡山大学名誉教授）

委　　員　　水内昌康（元岡山県文化財保護審議委員）

高橋　護（ノートルダム清心女子大学教授）

河本　清（くらしき作陽大学教授）

葛原克人（岡山県古代吉備文化財センター所長）

高瀬要一（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景調査室長）

オブザーバー　文化庁

岡山県教育委員会文化課

岡山県環境保健部自然保護課

岡山県倉敷地方振興局森林課

なお，第８回「鬼城山整備委員会」において，岡山大学教授　狩野　久氏を新たに整備委員

にご推薦いただき，同氏のご快諾を得られたので，新年度よりご就任いただくこととなった。

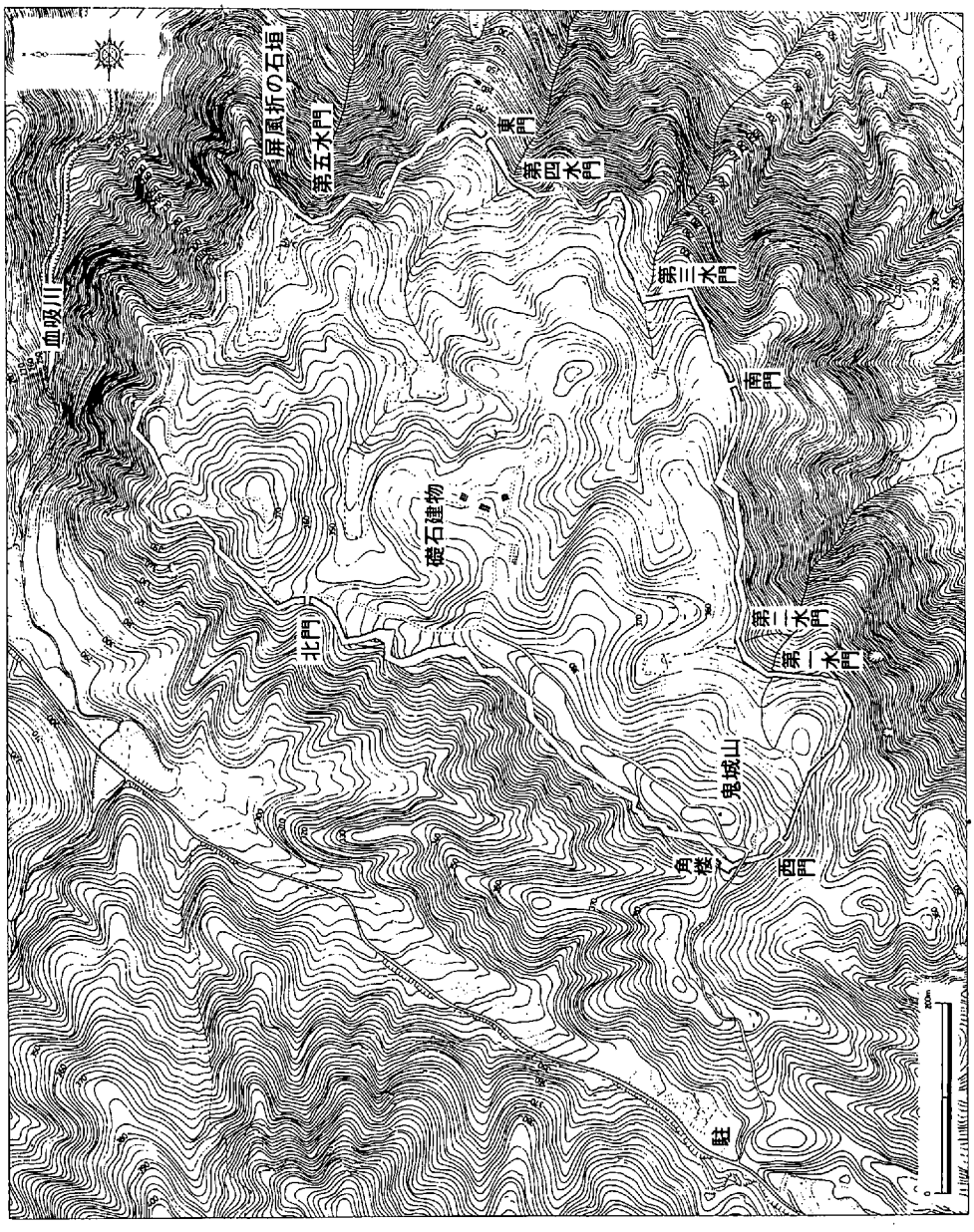
また下記の方々には，現地で多くのご教示をいただいた。記して謝意を表します。

今尾文昭　小田富士雄　狩野　久　鎌田元一　亀田修一　岸本直文　桑原滋郎　清水真一

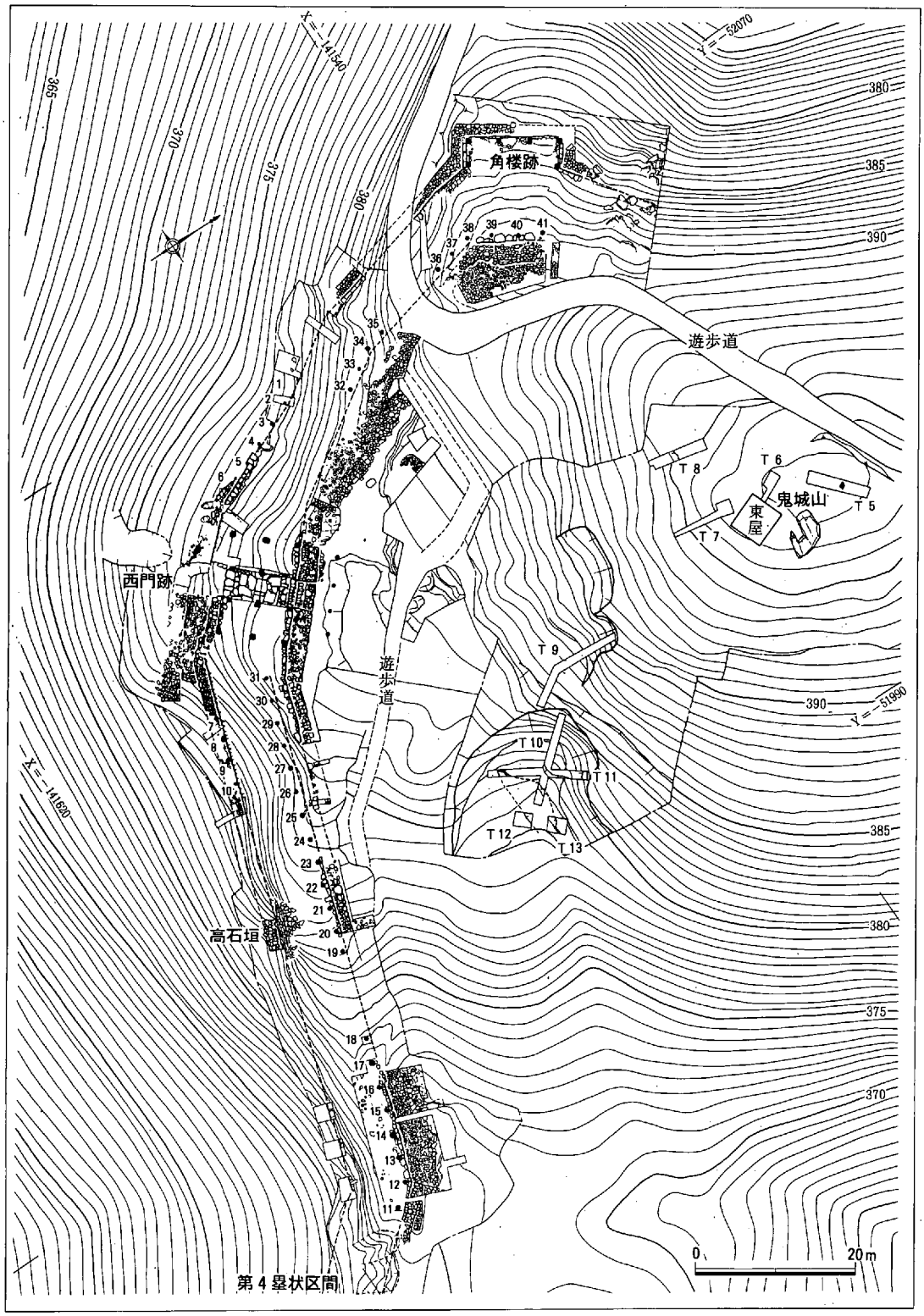
白鳥良一　園村辰実　武末純一　舘野和己　西住欣一郎　乗岡　実　増渕　徹

本年度の調査は，村上幸雄，前角和夫，松尾洋平が担当し，実測・製図は松尾が行った。

なお執筆は，出土遺物を松尾が担当し，他は村上が行った。



第39図　鬼ノ城平面図（S＝1/8,000）



第40図　西門跡および鬼城山周辺図（S＝1/800）

西　門　跡

1．調査の経過

平成８年度の調査は，第３城門跡と呼称され，「搦手門」的な門跡と推定されていた遺構の調査が主体であった。だが，調査の結果そこは門跡ではなく，日本の古代山城では明確な状態としては初の検出事例となる「角楼」という特殊な遺構であることが判明した。

しかし，この地は城内最高所である鬼城山直下であり，また外郭線全体からみても背面側の要所であることから，近くに門跡の存在を想定し，試行錯誤のすえ漸く発見した門跡である。同年の調査では，年度末間近という時間的制約もあったため，城門開口部を中心に行い，東門跡よりも遥かに大きい６本柱の掘立柱城門で，残存状態も良好であることが確認された。

ところが，平成９年度の調査で，南門跡が12本柱からなる大規模な掘立柱城門であることが確認されたことから，西門跡の見直し調査を行い，南門跡と同様に12本柱であることが確認された。規模はほぼ同大，構造的にも同工であることが判明した。

しかしかなりのスペースをもつ城内部が未掘であること，角楼から門跡にかけての外郭線の接続状況などが課題として残っていたため，本年度に調査することとなった。

なお図面の関係上，角楼～西門間，西門～高石垣間をおおまかな区分とする。表記上，右側，左側と表す場合は城内側からみて，ということである。

2．外郭線

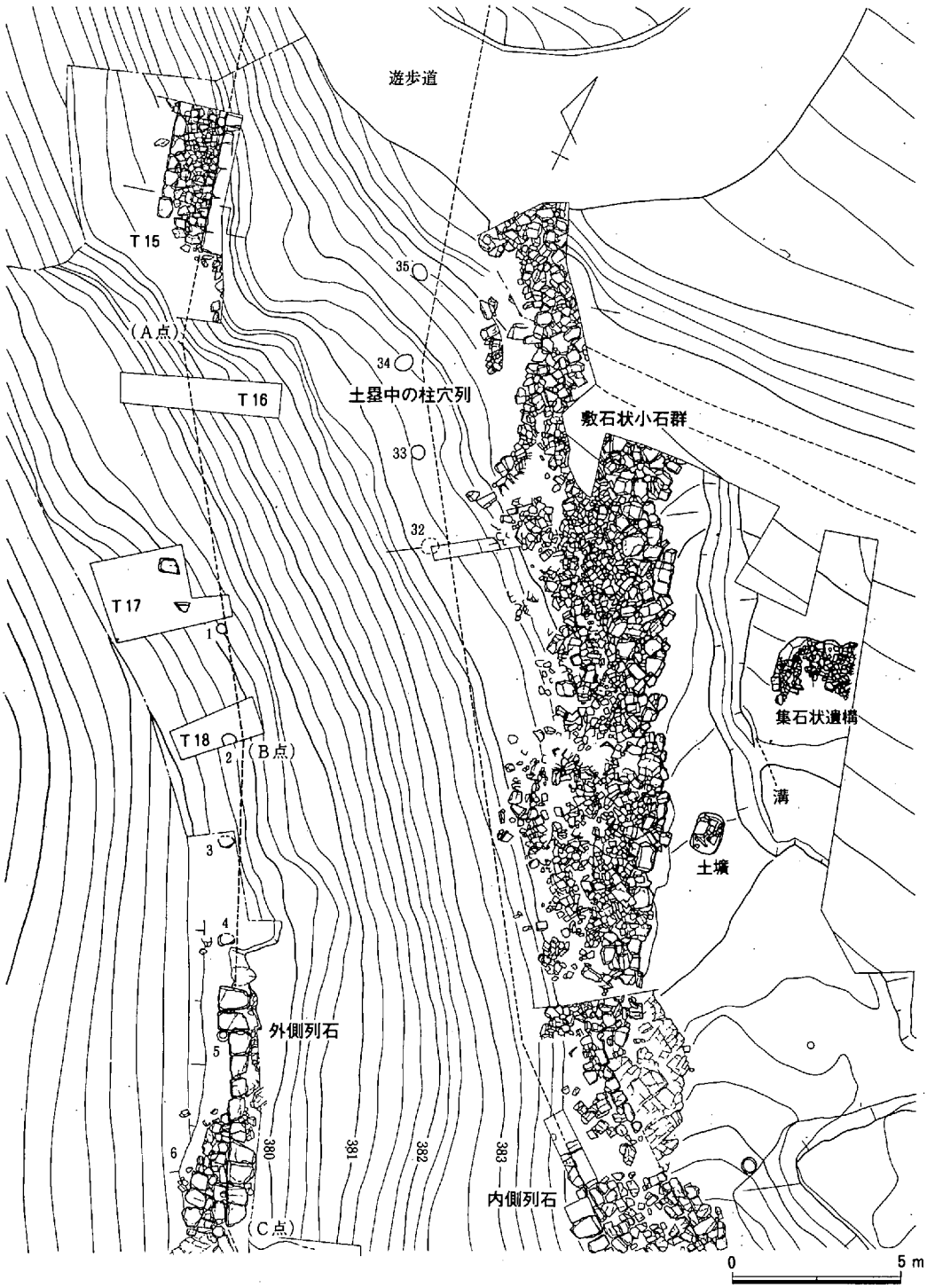
(1)　角楼～西門間

角楼跡から西門跡にかけての城塁の接続状況は，角楼跡左側の石垣から10度内折して版築土塁が37ｍ続き，そこで35度内折して19.5ｍ続いて城門床面の石敷前端線に接続すると推定していた。ところが，城門左側は前面に幅1.2ｍの城外側敷石が屈折して約６ｍほど敷かれていた。城門右側では，城外側敷石はみられず，左右で異なる状況となっており，その追求が課題であった。

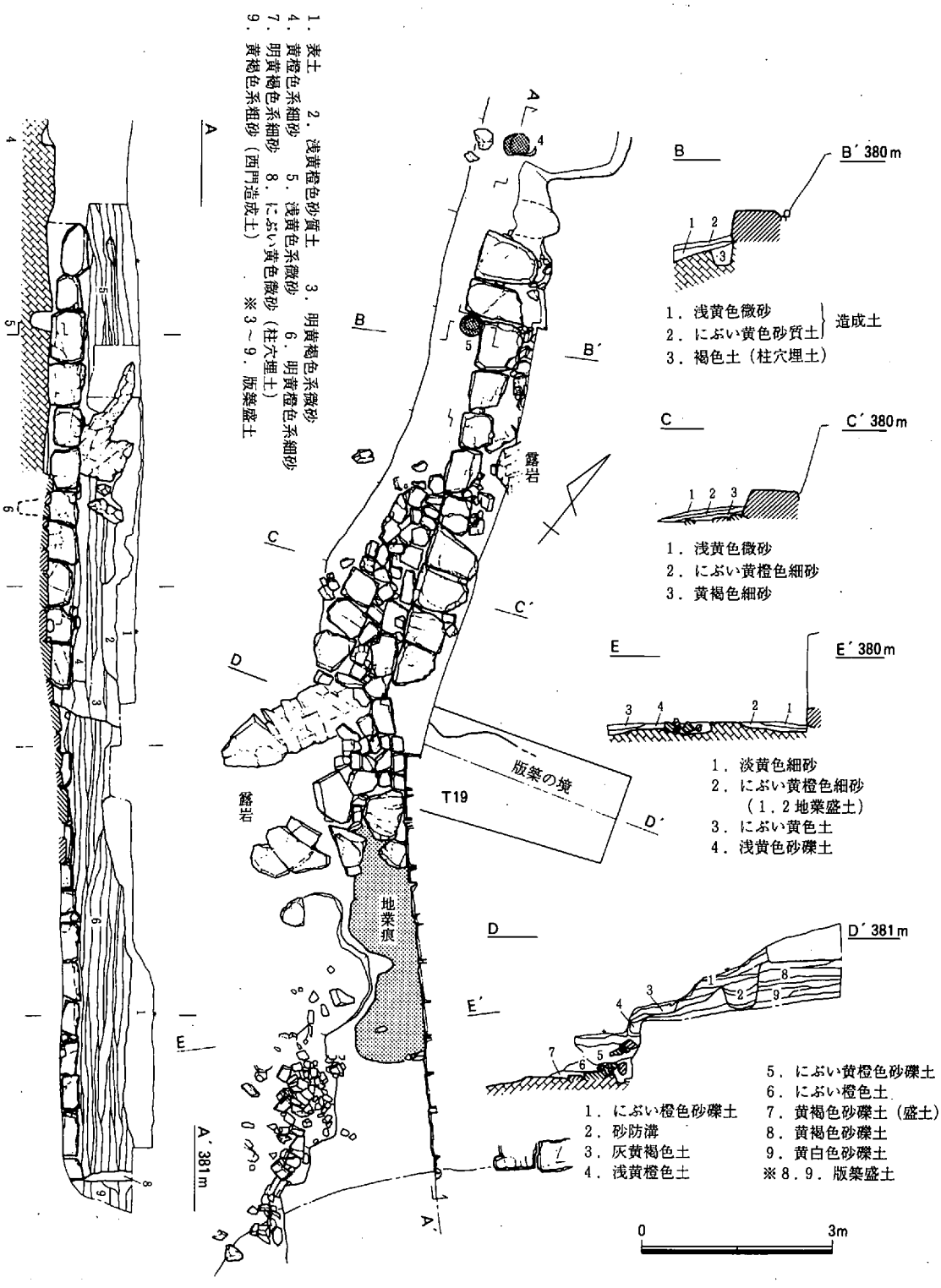
そこで本年度の調査では，12本柱の外柱（柱７）の右側に下方まで少し長くトレンチ（T19）を設けたところ，外側列石と城外側敷石の一部を検出することができた。以下に城門右側の外郭線の調査状況について，個別に報告する。

外側列石

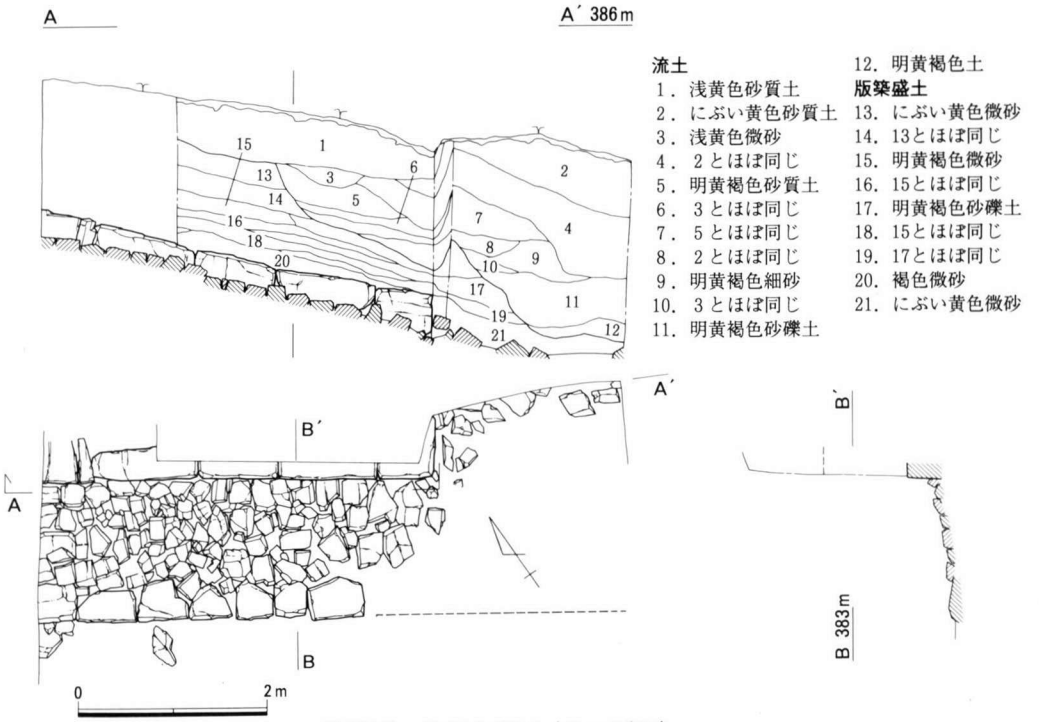
トレンチ（T19）で外側列石を２石検出することができたところから，左右方向に追求していった。トレンチから城門側へはアプライトの割石を用いて外側列石としており，12石で長さ



第41図　西門跡右側城塁平面図（S＝1/200）



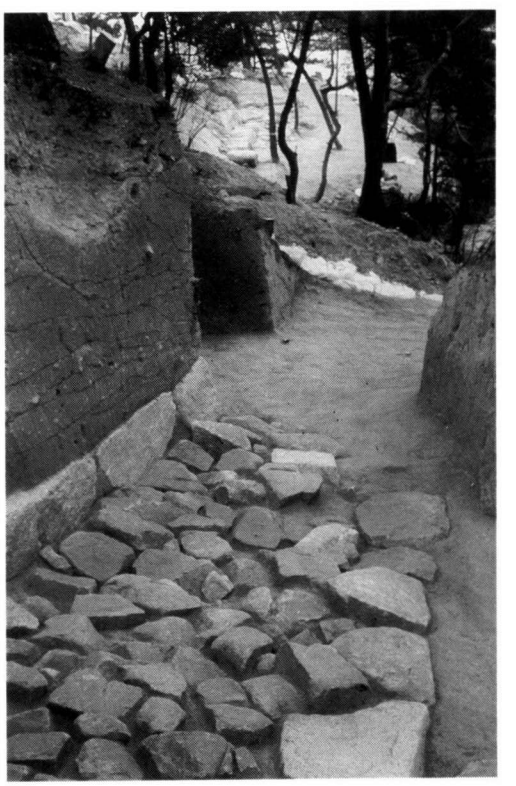
第42図　西門跡右側土塁図（S＝1/100）



第43図　T15土塁図（S＝1/80）

7ｍほどを検出することができた。やや小型材だが前面と上面を揃えて並べ置いているが，最も城門寄りの1石は上面が水平とならず，城門側へ上がるようにおかれている。この1石より開口部側へかけては列石がなく，その位置は開口部右側の柱穴列（門柱4～6）のほぼ延長線前面である。なお，城門開口部近くのアプライトを用いた列石は，転石や樹木があったりしたため，どの範囲までかは明確にしえないが，その一部は埋め殺されていたようである。これは開口部右側前面がスロープ状になるためで，その築成は土塁に比べるとかなり軟弱である。

この列石線から角楼跡側へかけては，おそらく2石が欠失しているらしいが，敷石の状況から19度内折して11石が7.2ｍの長さをもって検出された。石材はすべて花崗岩で，城門

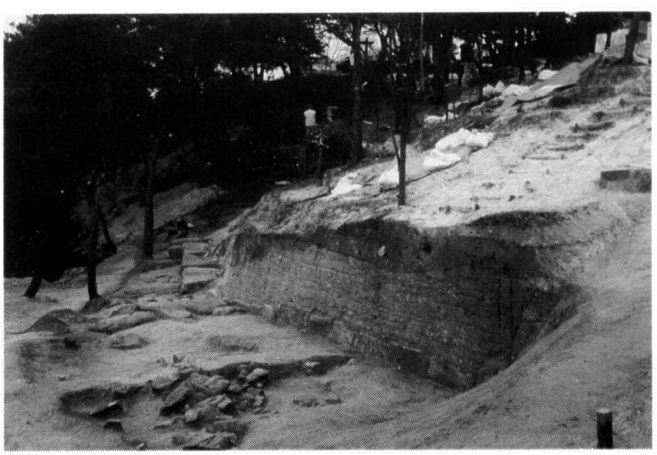


第19図版　T15土塁と敷石

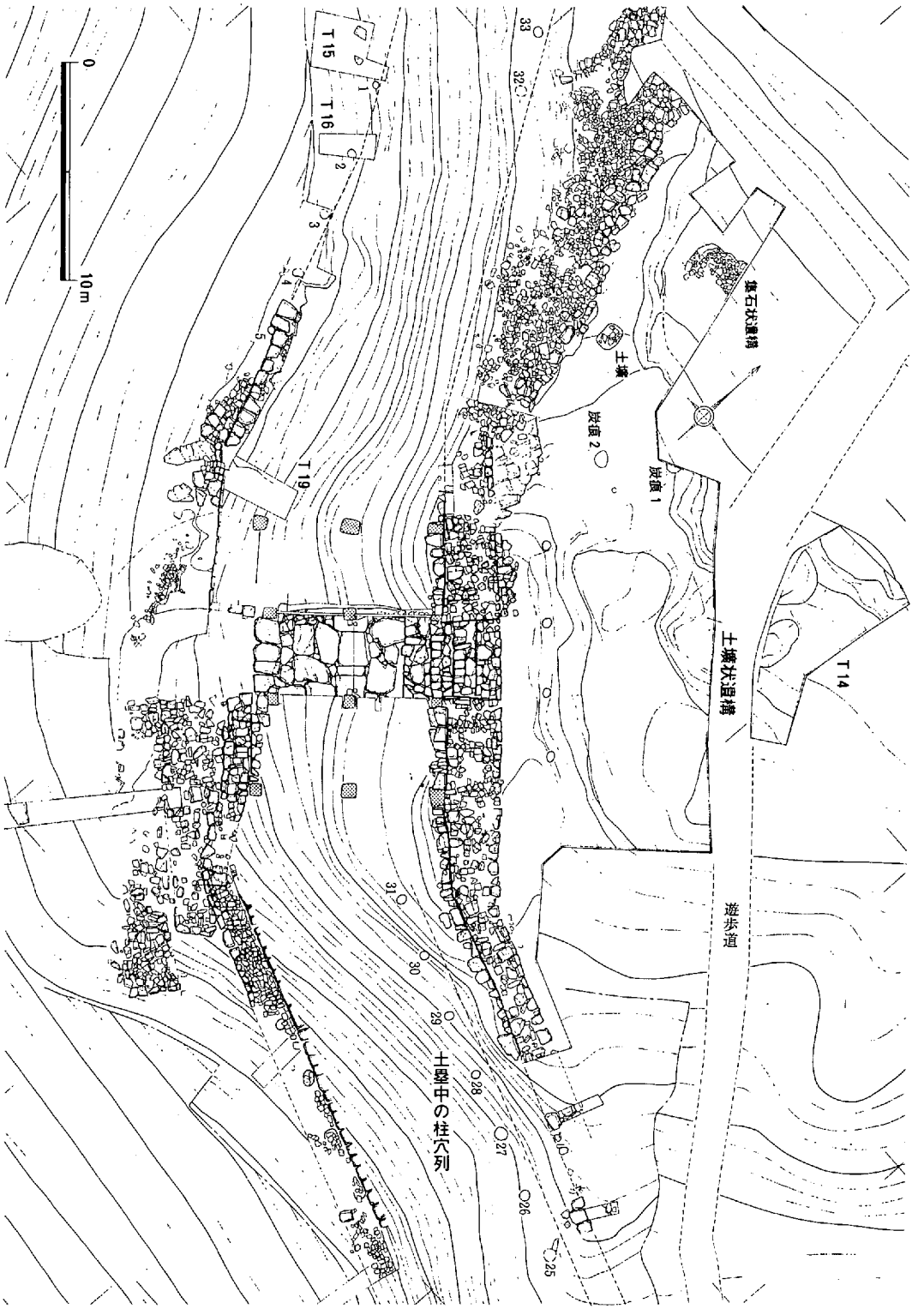
寄りのアプライトの列石より石材も大きく，重厚な印象をうける。この列石の最も右側の２石は，40cmほど前面へはみだしているが，石材の奥寄りに掘り方らしい痕跡があり，後世に石材利用の目的で動かそうとしたものらしい。というのもこの花崗岩を用いた列石上には，調査前には砂防石段が３段ほど積まれており，そのため前年のトレンチ調査でも一部に露岩のあることもあって石垣の手前で止めていたところである。この前方へはみ出している２石が，築成時の状況を反映していないらしいことは，のちに検出された列石前面の柱穴列からもうなづけよう。これより角楼跡側へかけては，中間部分は列石を欠いている。列石がみられるのは遊歩道下のトレンチ（T15）で，平成８年度のトレンチを城門側へ広げて調査したが，既知の列石を含め，長さ4.3mにわたって花崗岩の５石を検出したのみである。そこから角楼跡側へかけては，未掘だが埋積土の深さからみても残存している可能性が高いと考えられる。

以上のように，中間部22mほどの外側列石が欠けているため，外側列石のみの追求からは角楼～城門間の城塁の屈折状況については不明とせざるをえない。このことについては後述したい。

第20図版　西門跡右側の外側列石と敷石



第21図版　西門跡右側の土塁



第44図　西門跡周辺平面図（S＝1/300）

城外側敷石

城外側敷石も，部分的だが検出された。一つは遊歩道下のトレンチ（T15）で，残存する列石線のほぼ全面にわたって幅1.5mで付設している。前面にやや大きい石材をもちいて端面を揃え，列石との間は小石材で充填している。もう一ケ所は，城門近くの屈折部で7m弱ほどが残存するが，前面端部を欠失し1.5m幅をもつところはない。屈折部には露岩があり，それをうまく利用しつつ敷設している。敷石がこのあたりで残存していないのは，欠失部分もあろうかと思われるが，城門前面がスロープ状になるためであろうと推定される。スロープ上には敷石らしい石材はみあたらなかった。

敷石の調査中，思わぬ成果が得られた。版築用の柱と推定される外側列石前面の柱穴は，これまでの調査ではそれらしい2，3のものはあったが，城外側敷石が残存していることもあって検出できなかった。ところが幸いにも，この角楼～西門間の外側列石および城外側敷石の欠失部で，それが検出できた。

外側列石前面の柱穴

最初に検出できたのは，城門寄りの花崗岩を用いた列石線の右端部においてであった。動かされて前面へせりだしている列石のところである。ついで柱間をほぼ3m前後と推定し検出にあたったが，列石線の推定線がはっきりしないこともあって苦闘したが，何とか計5穴を確認できた。さらに城外側敷石中でも，敷石材の隙間をピンポールで探り，1穴の存在を確認できた。検出面での柱径，柱間距離は別表のとおりである。

版築用の柱穴の存在は予測していたところであるが，その存在を確認できた意義は大きく，外側列石を欠く区間では，その存在から区間の接続状況や屈折の仕方がより高い確度で想定できることになった。

第22図版（右）　外側列石前面柱穴
第23図版（左）　外側列石前面の柱穴列
ピンポールの位置

土　塁

土塁は城門部とその周辺では，外側列石上面で70cm前後残っているが，それよりT15までの間は流失が著しく，外側列石も城外側敷石も欠いている。

城門部周辺は，薄くよくつき固めた状況がうかがわれるが，屈折点からT18のあたりにかけては多少厚層気味である。しかしこの部分も堅くよく締まっている。

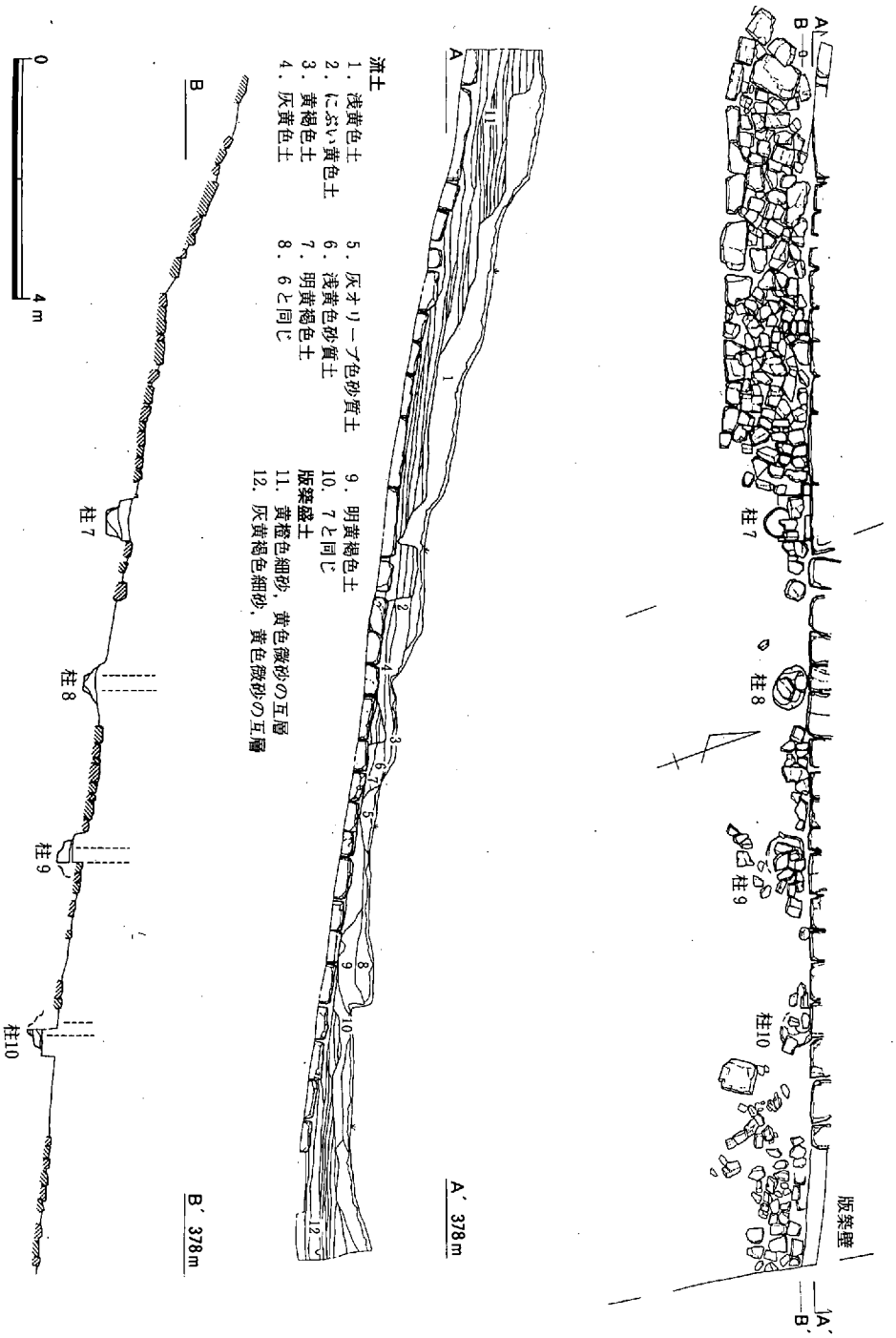
土層を仔細に観察すると，屈折点のあたりに土塁の短軸側方向における版築の境目（第24図参照）が認められる。その状況は城門側が先行したことをうかがわせており，ついでT18の方向へ築成された様相が認められる。屈折部のあたりにある版築の境目の前面の柱穴は，敷石が残存するため検出できていないが，柱間距離としては矛盾がない。これより右側の様子は，土塁流失のため不明だが，城門という主要遺構とその構造的内容を考慮すれば，城門部が先行するのは当然であろう。

第24図版
西門跡右側の版築の境目

(2)　西門跡～高石垣間

外側列石

平成８年度の調査時に，城門左側にのみ小石材を検出していたが，他区間のものと比べるとあまりにも小さく，外側列石とするには疑問に感じていた。このことについては，いまも変わらないが，門柱１から10の前面には小石材ながら約４ｍの長さで遺存している。門柱10から左側については，表土層を除去した段階では，城外側敷石は一部に欠落があるものの存在しているが，外側列石はこのレベルでは検出できていない。しかし門柱10から３ｍほど左側（ここで

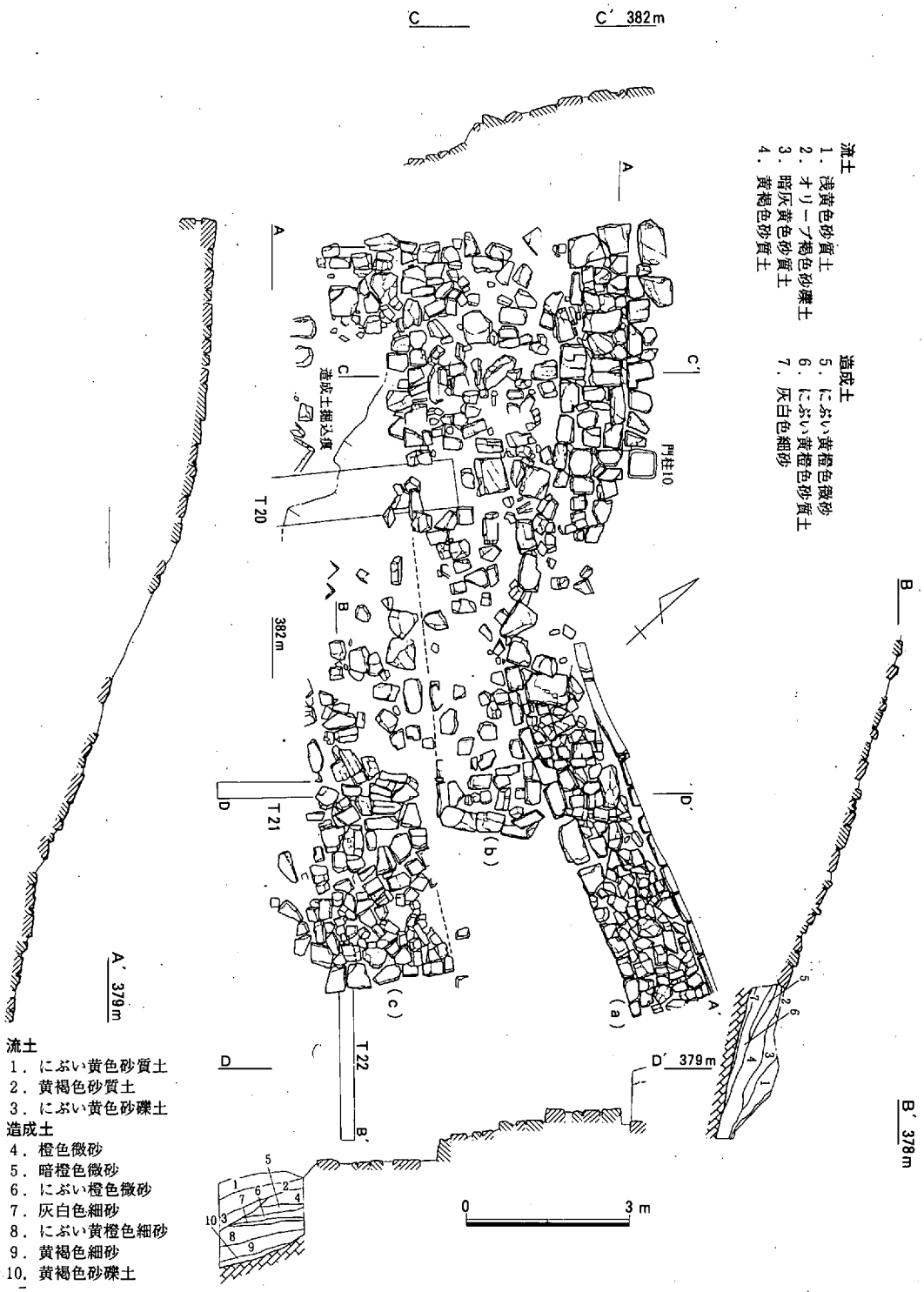


第45図　西門跡左側の城塁図（S＝1/100）

は城外側敷石が屈折している）では，地表下１～1.2mに外側列石が存在している。前面上層に敷石があるため，掘下げ幅が狭くまた深いことから探査も困難なため確認できていないが，外側列石のもつ機能からすれば，門柱10から次の屈折点までにも存在している蓋然性はたかいと考えてよい。ただ懸念されるのは，門柱10の３m先の屈折部で地表下１～1.2mの深さで検出された外側列石が，そのまま開口部方向へ門柱10のあたりまで直線的にのび，ついで門柱１の前面近くまでのびてくる可能性もないではない。これは城門右側の状況と相似することを前提とした想定である。いずれにしても敷石の残存状況がよく，また存在するとしても深い位置となるため未調査であり，今後の課題でもある。なお城門開口部前面については，平成８年度に床面前面から長さ3.5mのトレンチをいれているが，そこでは外側列石となる石材は検出されていない。

城門左側の外側線については，敷石の状況のみからみれば門柱１から門柱10までの約４mは直線的にのび，門柱10のあたりで17度外折して４mほどつづき，再び38度内折して直線区間になるのであろうか。この屈折部から21mほどは直線的に外側列石が並び置かれており，高石垣までの間14mほどは未掘だが，前年度の調査結果を考慮すれば，約70mの直線区間が存在することになる。確実に外側列石といえる門柱10の３m先の屈折部（敷石で判断）からの外側列石は，11度ほど下降しつつ５mほどのび，ついで７～９度ほどの下降傾斜となる。石材はアプライト主体で，花崗岩との混用である。

第25図版　西門跡左側の敷石



第46図　西門跡左側の敷石（S＝1/120）

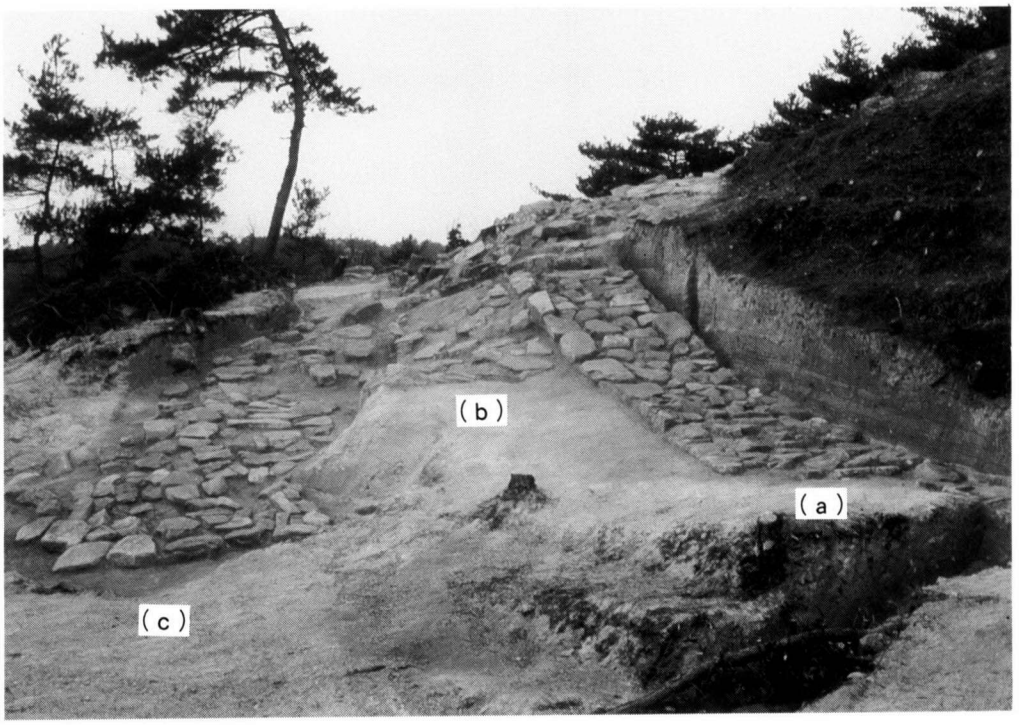
城外側敷石

城外側敷石については，平成８年度の調査時に長さ６ｍほどを検出し，さらに下降しつつ存在するらしい感触を得るとともに，敷石の前面にも敷石とよべるほどではないが，同種石材が敷石状に拡がっているのを確認していた。

今回の調査では，部分的な欠失はあるものの全体として幅６ｍ強，長さ15ｍ弱の広い範囲にわたって敷設されていることが確認された。この広範な拡がりをもつ，いわば敷石帯ともいうべきものは，いくつかの理由から機能上は三つに分けて考えられそうなので，煩雑になることを避けるため個別的に報告する。

(a) 通常の城外側敷石

外側列石に接して敷設されたもので，門柱１から門柱10の前面まで約４ｍはほぼ直線的であるが，門柱10のあたりから17度外折する。外折点からは土塁側は欠石が多いが，前面はよく残っているから3.5ｍほど続くことが判る。ここで38度内折して長く直線的にのびる。長軸側の面は，その前方の敷石より少し高く敷設されていることから，意図的に区分されていると考えられるので，幅の計測が可能となる。門柱１から門柱10の次の屈折部までは1.2ｍとなる。屈折部からは1.5ｍとなり，他区間におけるものと同幅となっている。前面の石材は屈折部までは同大程度のものが多いが，屈折部からはやや大きめの石材が目立つ。長軸側の敷石上面の傾斜



第26図版　西門跡左側の敷石

は，門柱１～10までは僅かに下降，門柱10から屈折部までは14度となり，さらにここから５ｍの間は21度もの急な下降傾斜となるが，やがて８度前後の緩やかなものとなる。

(b) 城外側敷石前面の敷石？

城外側敷石を除く幅４～５ｍの拡がりの中を細かくみると，ほぼ中央に面を認めることができる。開口部寄りは，石材を寝かせ置いているため段差とはならないが，傾斜が下降するにつれ，一部の敷石は石材を立てて用いていることからほぼ直線的な面として理解できる。幅は開口部寄りが３ｍと広いが，下方は外側列石が外折しているため幅を減じ２ｍほどである。傾斜は長軸方向は城外側敷石とほぼ同じだが，開口部寄りの短軸方向は急である。

(c) (b)の前面の敷石

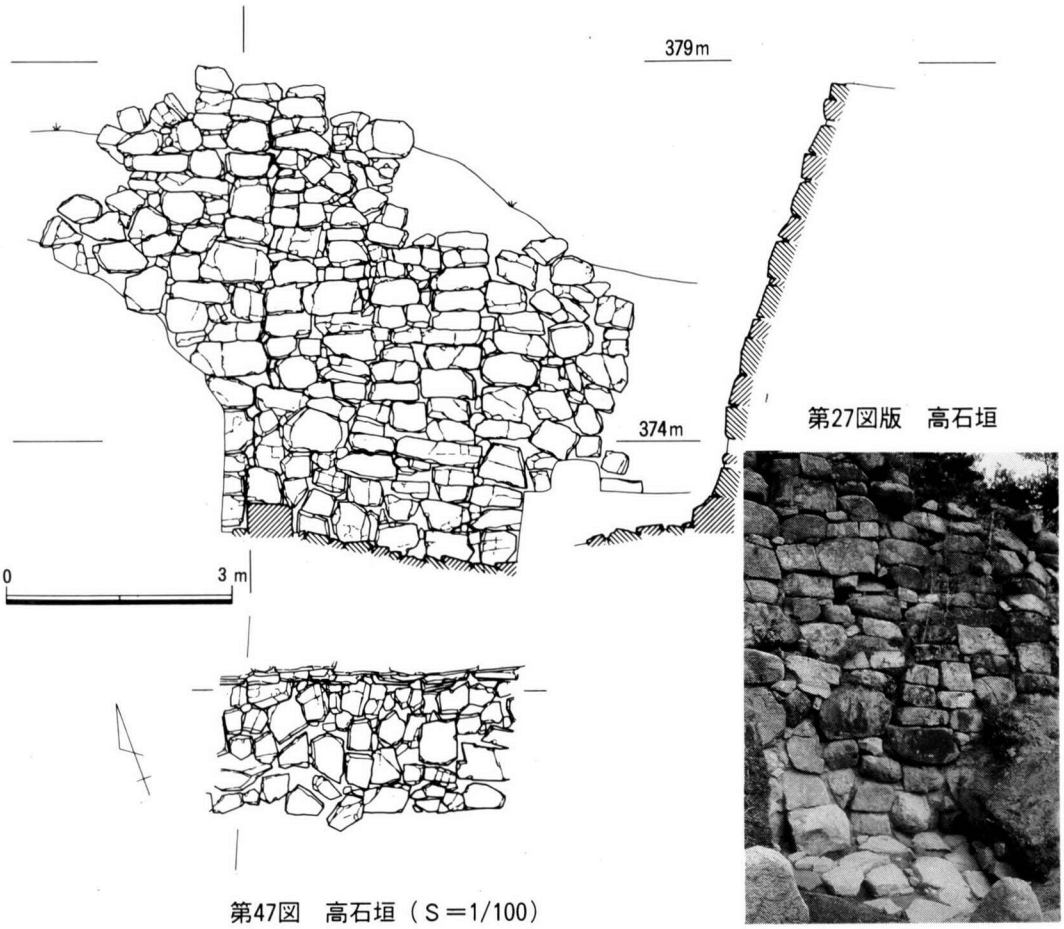
欠石の最も多い敷石だが，下方の端部は比較的よく残っている。しかし敷石を追って調査区の幅を広げつつ検出したものの，下方側の長軸側は明瞭な面として捉えることができなかった。ただ，下端部の残存状況からみると2.5ｍ前後の幅であったと推定される。傾斜は長軸側で19度ほどの上がり勾配となり，(a)や(b)ほどの部分的な急傾斜をなすところはない。この(a)，(b)，(c)に分けた敷石帯の開口部側は面がほぼ揃っている。ただ開口部前面については，これまでの調査でも検出されていない。また(b)と(c)の短軸側の端面には2.5ｍほどの長短があるため，敷石のない小区画となっているが，整地土のみで遺構は検出されなかった。

さて，この三つに分けた敷石の各々は，どのように理解したらよいのであろうか。(a)は通常の城外側敷石であるが，問題は(b)と(c)である。(c)は欠石が多いものの幅員や勾配からみても通路的機能が充分考えられるものである。麓下から城門へいたる進入路については，まだ踏査できていないが，深い谷部から尾根筋をつづら折れに曲折しながら城門へいたるルートを想定できよう。だとすれば，(c)の敷石はこの進入路の最終地点を表しているのではあるまいか。では(b)はどうか。通路的機能を全く否定することはできないが，開口部側の短軸方向の勾配は部分的ではあるが急であり，疑念をもたざるを得ない。むしろ，この(a)と(c)の間の(b)は，(a)にあたる城外側敷石の崩落防止を主目的にしたものではあるまいか。(b)の下方端面が城外側敷石の傾斜の急な部分あたりまでに存在しているのは，そうしたことを暗示しているのかもしれない。

高石垣前面の城外側敷石

西門跡開口部から，およそ45ｍほど下ったところに高石垣が築かれている。現状は約４ｍ強ほどの高さで，西門の門柱10の次の屈折点から直線的に接続していることは容易に観察できるが，石垣が約15度ほど内傾し，また下端が埋没していることもあって，現状では城内へ少し引いた感じになっている。

鬼ノ城の高石垣区間は，全体としておおまかには６ケ所あるが，露岩を利用しその上に石垣を積んだところを除けば，石垣下端まで露出しているものはない。そこで石垣の本来の高さを



第47図　高石垣（S＝1/100）

みるために，高石垣前面にトレンチを設けた。下端は1～1.6m下で検出された。石垣の中央から1m弱ほど西門寄りの下端の1石は，30cmほど前方へ突出したような形状を示しており，あるいはこれが石垣構築の指標石的なものかと考え掘り拡げたが，これに照応するものは調査範囲内では存在しなかった。この石材は突出した部分が節理に沿って剥落し，平坦面をなしていないため，敢えてこうした状態で据え置いたものらしい。

予想もしなかったのは，この石垣前面で城外側敷石を検出したことである。1.5m幅をもち，残存状態もよい。

城外側敷石については，これまでのところ城内側敷石ほど多区間に敷設されているとは思えず，要所のみに敷設していると推定していたが，この検出例によりその予測を拡大してみる必要があるかと思われる。

外側列石前面の柱穴列

角楼～西門跡間の外側列石前面で柱穴列が検出されたので，西門～高石垣間でも検出を行った。柱穴は敷石の欠失した部分から4穴（7～10）が検出された。径および柱間距離は102頁

を参照されたいが，深さ20cmほどの浅い穴である。柱は版築構築後抜き取り，その後穴を埋め全体を整地して敷石を敷設したものである。

第28図版（上）
外側列石前面の柱穴

土　塁

城門部の版築土塁は流失著しく，構築状況が不明である。しかし内折する屈折部から高石垣の方向にかけては，上部が近代の砂防工事により削られ，砂防土段が築かれているが，40～100cmほどの高さで残存している。構築状況をみると，薄くよく突きかためられており，層序関係から城門部より遠い方から城門部へ向けて構築した状況をみることができる。城門部との先後関係は城門部の土塁の流失，城外側敷石が城門へ向かって上がっていき，敷石レベルが高く

第29図版
版築土塁

なることなどからはっきりしない。しかし城門部右側の版築は，まず城門部とその周辺一部までを築いているから，この左側部分でも同様に考えて大過あるまい。

城門正面前面の窪地状部

平成８年度に西門跡を発見した際，開口部中軸線よりやや西寄りの位置で，石敷床面の前端から約７ｍほど下方に，幅５ｍ弱，長さ９ｍほどの広い溝状部が確認された。地滑り等から生じたものではなく，あきらかに人為的なもので，一部には露岩も存在し，数段の砂防土段が築かれていた。当時この窪地状部が城門部と関わるらしいとは認識できず，また適当な排土置場もなかったため，開口部の埋積土で埋め戻した。

平成９年度の南門跡の調査でも，城門前面にこれより大きい窪地状部があり，砂防段が施されていた。性格的には同じものと考えられ，城門前面における防備の一手段と推定されるとともに，入門の仕方を暗示しているようである。

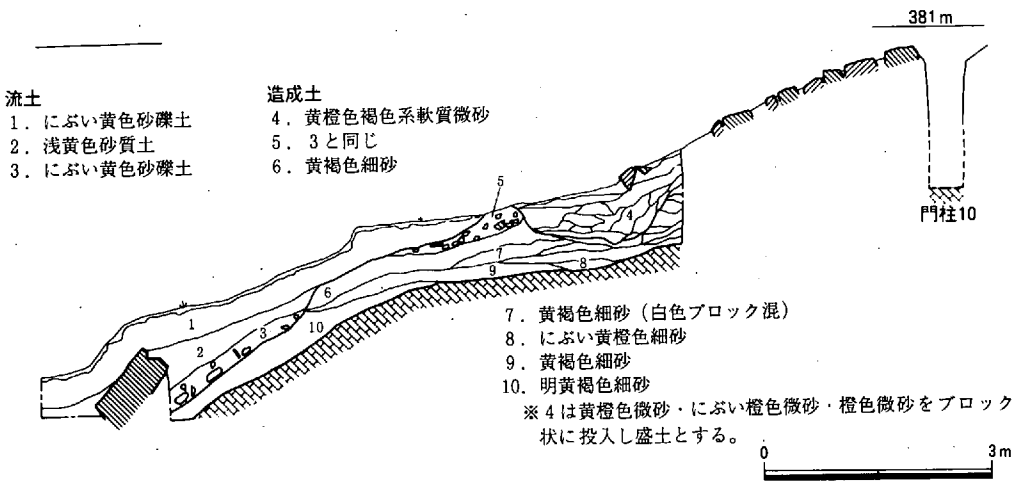
西門跡は，鬼城山から南西に張りだす小尾根に位置し，城門の正面は小鞍部となって下り，その両側とくに左側はかなりの急傾斜となっている。城門のほぼ正面に位置するこの窪地状部は，正面側からの入門を阻むかのように人為的に掘削されたものと推定される。

トレンチ

城門の周辺や城墨の前面が，築成時にどれほどの広さを整地していたのかは，これまで適当な調査地がなかったためはっきりしないが，今回その機会を得た。

T20

城門の左側，門柱10の３ｍ下方から設定した長さ８ｍのトレンチである。トレンチの下方に花崗岩の大きな１石があり，このあたりまで整地されている状況をうかがうことができる。トレンチの上方には整地後掘り込まれた形跡があるが，これが何を意味するのかは判らない。ト



第48図　T20断面図（S＝1/100）

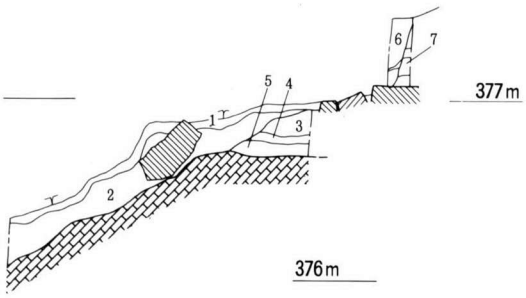
レンチ先端の花崗岩のあたりから周辺をみると，とくに左側では地形が前方へ張りだすような形状をしており，現地では等高線で表示される以上に段差がある。自然地形をベースにしていることは当然であるが，敷石帯の敷設状況からみてもかなり広範な部分にわたって整地しているらしいことをうかがわせる。

T 23

地山を削平したのち造成，整地している。造成土は現状で外側列石から1.1ｍほど残存するが，敷石幅が1.5ｍであるから，すでにかなりの部分が流失していると考えられる。

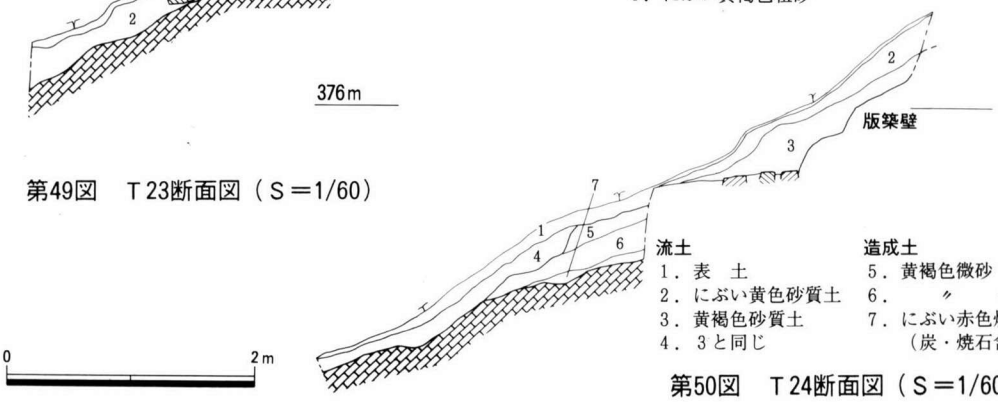
T 24

調査区の高石垣に最も近いトレンチで，外側列石はどうしたことかすでに欠失している。しかし残存する敷石は，外側列石の延長線上にあるから，それを基準にみると造成は前面へ2.5ｍほど行われていたことになる。T 23でも本来はこうした造成幅をもっていたものと思われる。



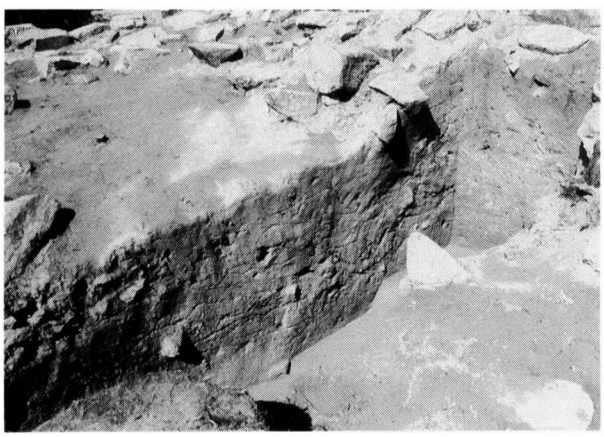
流土
1．表　土
2．にぶい黄色砂礫土
造成土
3．にぶい黄褐色細砂
4．にぶい黄褐色粗砂
5．にぶい橙色粗砂
6．2と同じ（流土）
7．版築盛土

第49図　T 23断面図（S＝1/60）

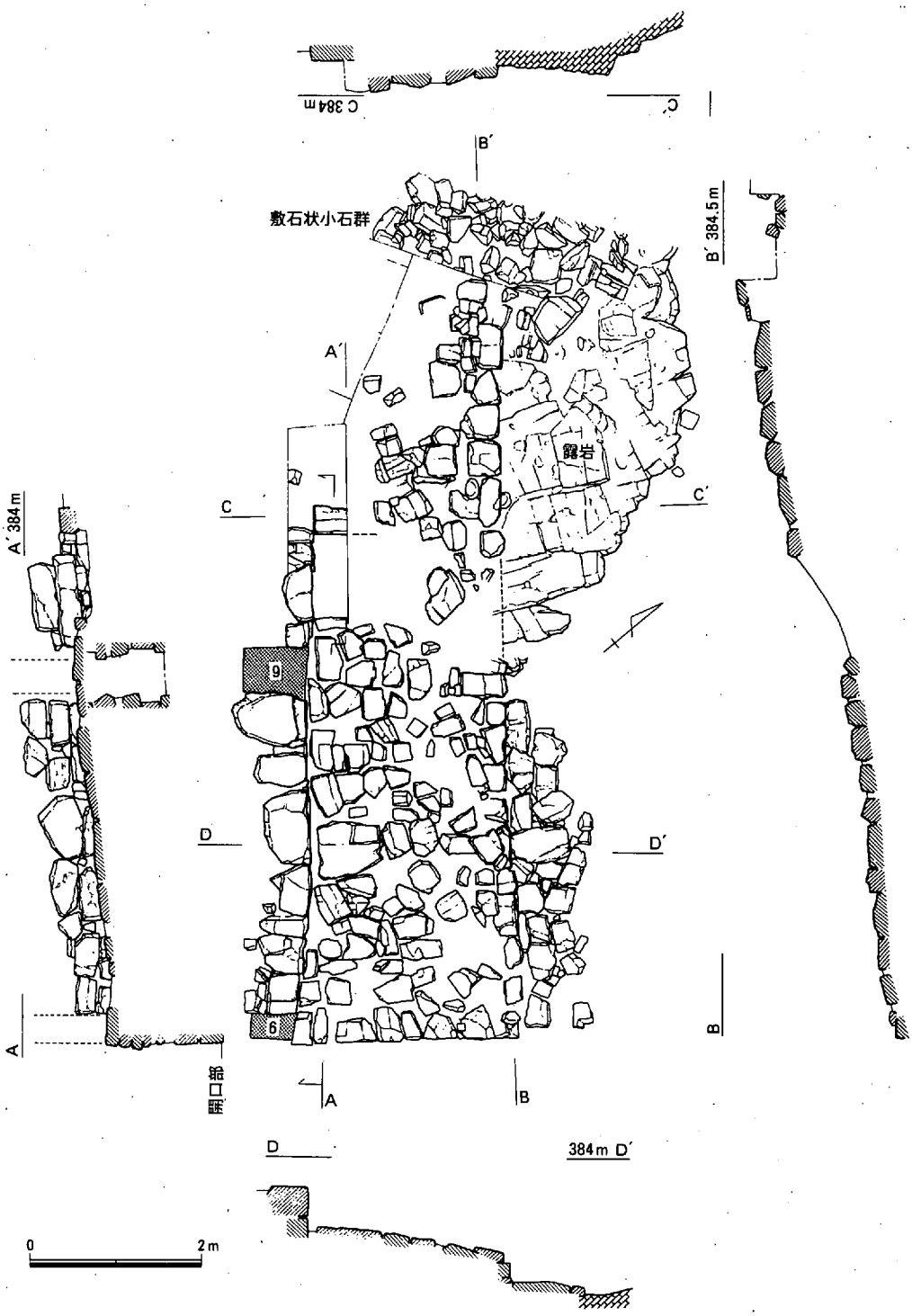


流土
1．表　土
2．にぶい黄色砂質土
3．黄褐色砂質土
4．3と同じ
造成土
5．黄褐色微砂
6．　〃　（炭多量含）
7．にぶい赤色焼土層（炭・焼石含）

第50図　T 24断面図（S＝1/60）



第30図版　T 23断面



第51図　西門跡右側の内側列石と敷石（S＝1/80）

3．内側線

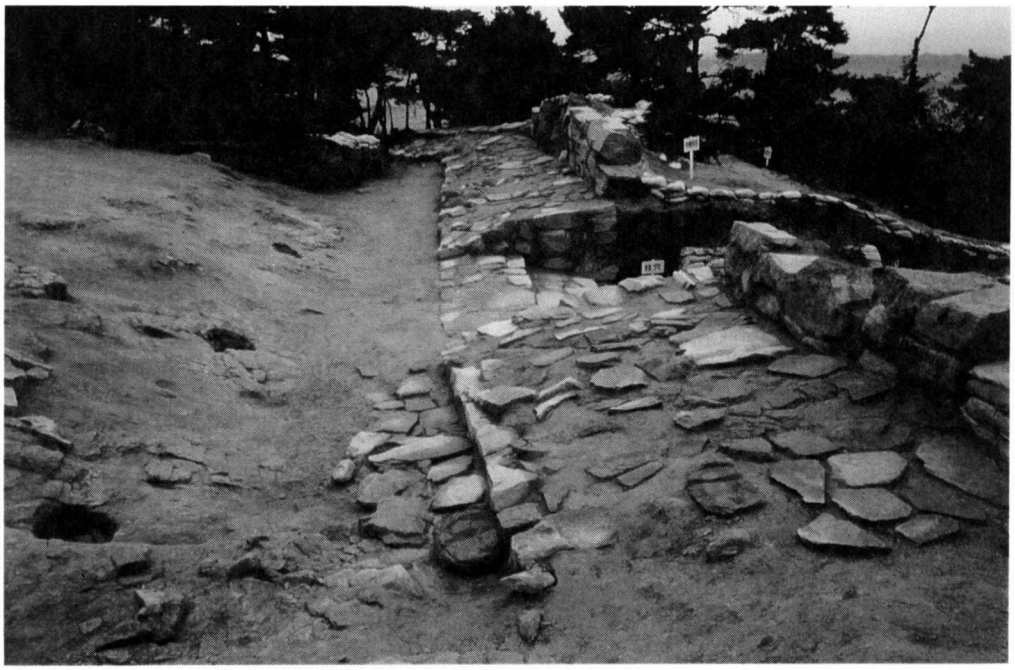
(1) 角楼～西門間

内側列石

城内壁となる内側列石の残存状態は悪く，城門部のあたりに僅かに残るのみで，大部分は流失し欠いている。このため内側列石から城塁の屈折状況や幅員を判断することも，また困難である。残存する内側列石は，開口部の門柱６から門柱９の1.4m先まで，全体として６ｍほどである。高さは２～３段積みで60～70cmである。ここから角楼跡側へかけては，調査区のすべてで欠失している。残存する門柱９の1.4m先では，石材は小型化するだけでなく，その部分で交差するように１石が城内側へ置かれている。この二つの石材の関係をみると，内側列石がこの位置で城内側へ直角に屈折するような石材の据え方ではなく，しかも残存する城内側敷石の端面もこの地点の少し先では直線的にのびている。

この小石材は，城内側敷石が上り勾配になる位置にあるから，むしろ整地時における敷石斜面の土留石的なものと考えた方がよさそうである。城内側敷石の長軸側端面となるあたりは地山面に大きな露岩があり，その上にわずかに整地して敷石を敷設しているから，整地層が厚くなる城内側へのみ置かれたものと思われる。

城内側敷石



第31図版　西門跡城内

敷石も内側列石が残存するあたりを中心に残っている。長軸側端面は，城門開口部から９ｍほどが幅２ｍ強で直線的に残っている。門柱６～９の前面の残りはよいが，門柱９から角楼跡方向へかけては城内側端面を中心に残存する。このあたりは門柱９から上り勾配になるところであり，それが流失を招いた原因であろうか。

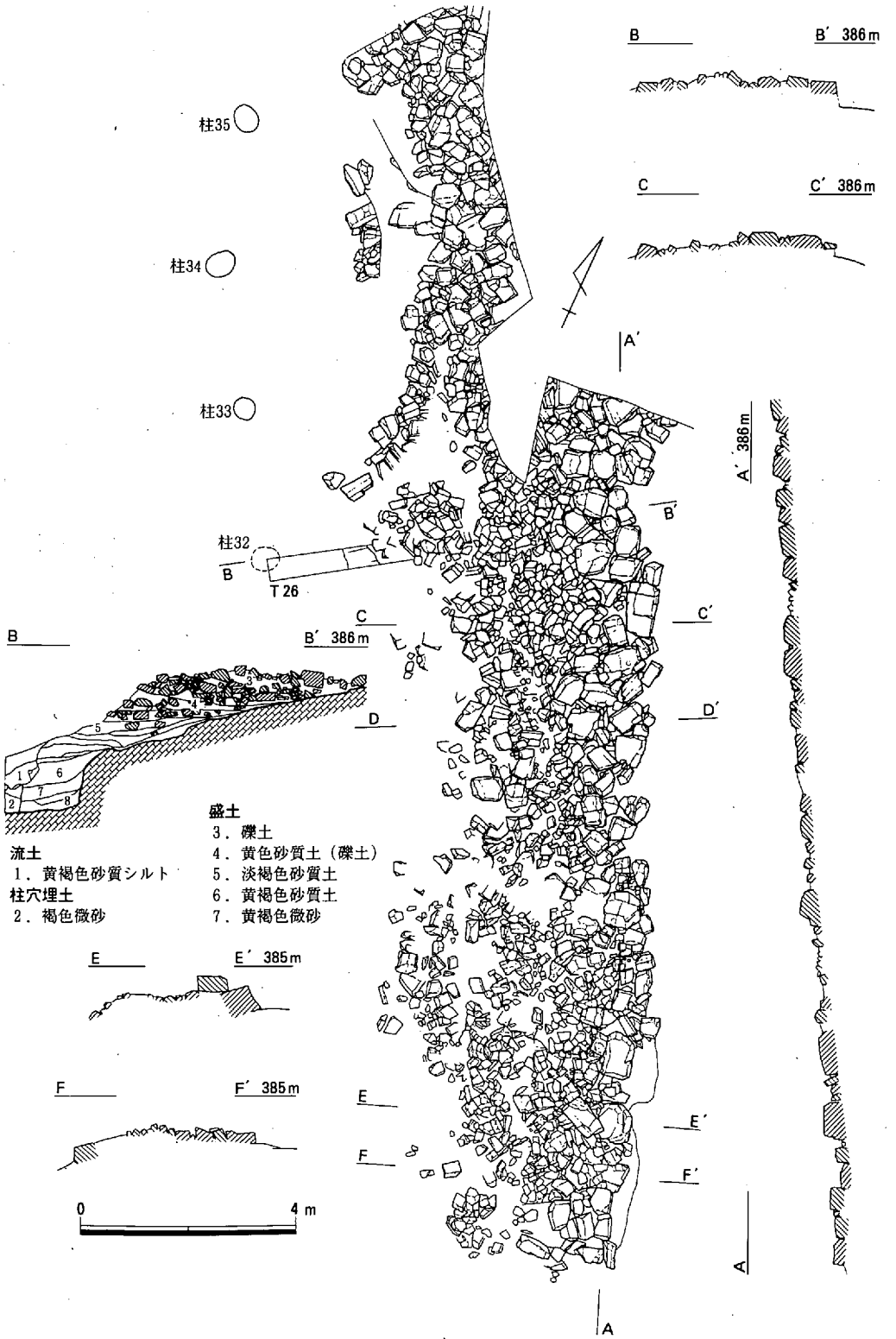
ところでこの城内側数石の前面に，１段低く敷設された敷石がある。位置は門柱６～９の城内側敷石の前面で，長軸側の端面を揃えつつ三角形状に残っている。この１段低い位置にある敷石は，現状では降雨時には上方の露岩の方からの流路となるところであり，そのため城内側敷石の保護を目的としたものと思われる。このように城内側敷石が二重になるのは，すでに他区間でもしられている。

なお，西門～角楼間で城内側敷石が残存するのは，ここだけで他は欠失している。

敷石状小石群

この遺構をどのように表記してよいかわからないが，とりあえずこのように仮称しておく。平成８年度の調査時に，角楼跡の城内側で６～７段からなる石段が検出された。石段の前面には，アプライトを用いた敷石状の小石群が前面一帯に拡がっていた。この小石群の直下は地山であり，わずかに整地した上に小石を乱雑においたような状況であったが，一部には地山を１ｍほど掘下げてやや大型材を混えてアプライトの小石群を詰め込んだような状況もみられた。

第32図版　西門跡右側城内の敷石状小石群



第52図　西門跡右側城内の敷石状小石群（S＝1/120）

この石段前面の小石群は，上面がごつごつしたものであり，通常の敷石ほど上面が平らではない。こうした状況をみると，この小石群はたとえ一部に敷石と同機能をもつにしても，敷石と同性格とは考え難く，むしろ石段の基礎部の保護を主目的とし，一部は水はけを意図したものと推定していた。また遊歩道下の城塁線内側にも同種の小石群が露出しており，地形をみても小さな谷部があることから，あるいは排水施設が設けられているのではないかとも想定していた。

本年度の調査はそうしたことを考慮しつつ，想定される拡がりのうち遊歩道を残してほぼ全面的に検出した。その状況は以下のとおりである。

・検出された小石群の広がりは，長さ約20m幅5～6mにわたって残存している。

・城内側の長軸側端部には，群中に使用している石材の中では上面が平らなやや大型材を使用している。これより城壁側にかけてはより小型材をしっかり充填しているが，推定される内側列石側は土塁の流失とともにかなり欠失している。

・第52図の断面をみると，内側列石に近い側では地山を垂直状に掘下げたのち埋めもどすとともに上層では土砂で整地する段階で小石材を混入しており，最上層ではむしろ石材が主体となっている。

　したがって，この小石群は，最上層にだけ石材を充填しているのではなく，内側列石に近い下部では70cmほどの厚さをもつ。

・残存状況でみるかぎり，この小石群の短軸側はわずかだが城内側へ下降傾斜している。

・この小石群中には，排水施設と考えられるものは検出されなかった。

・石材はすべてといっていいほどアプライトを用いている。

・この小石群の城内側の長軸方向の前面は，浅い溝状となっているが，地形的にみると自然地形ではなく，人為的なものと考えられる。

以上がこの遺構の概要であるが，ではこれをどのような機能をもったものとして理解したらよいのであろうか。

まず考えられるのは城内側敷石としての機能であるが，位置，拡がりからみて大いに疑問がある。というのは，拡がりをみても広い方の遊歩道から角楼石段の前面の一群と一連のものであることは疑いなく，位置や城塁の屈折状況さらには他の城内側敷石と比較しても妥当性を欠くと思われる。

ここで手掛かりとなりそうなのは，サブトレンチの断面である。地山は緩やかだが下降しているから，内側列石を据え，その前面に敷石を敷設するだけでは雨水に洗われるのは必然的であり，そのため敷石帯の破壊流失を招き，やがて内側列石さえも流失することになろう。それゆえに敷石の前面をあらかじめ石材を混えつつ盛り上げていると思われる。そうしたうえで，

小石群前面に浅い溝状の流路を掘り，排水処理をしているものと推定される。

したがって，この小石群は基礎部の安定強化と内側列石および敷石の保護を目的としたものであろう。

なお，現状では内側列石と敷石は流失しているが，これは土塁が外側から崩壊し流失したためである。

土塁中の柱穴列

内側列石は欠失しているが，それに沿うような位置で計４本の柱穴列が検出された。柱34と柱35は直線上に位置し，柱34からは19度内折して２本がある。ここから城門側にかけては，推定される位置のすべてを調査したわけではないが，地形や残存状況からみてもすでに流失していると思われる。

この柱穴列は，角楼跡の内側列石に沿うような形状で土塁中から検出されている６本の柱穴列のうち，柱36から直線上にのるものであることはあきらかである。そうすると欠失している内側列石の原位置をほぼ推定することが可能となる。このことについては，最後にまとめてみたい。

(2) 西門～高石垣間

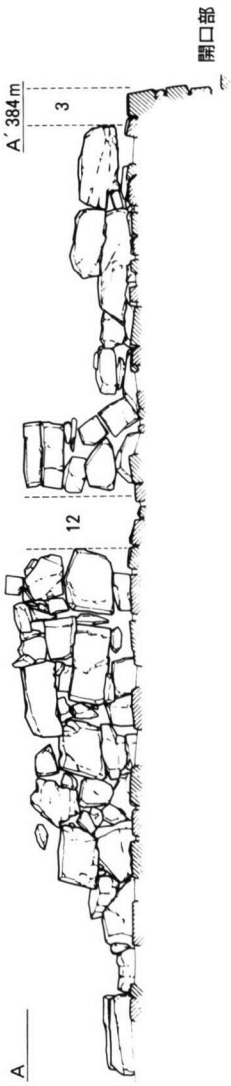
内側列石

この区間では，開口部から6.5ｍほどの長さで数段積みの石垣が最高部で１ｍほどの高さで残っている。そこからは20度内折し，敷石よりも10cmほど高い石材列が８ｍほど続いている。これより高石垣の背面までの間に，平成８年の調査で二つのトレンチを設け石材列を検出しており，それらは城内側敷石の城内面を示すものと推定していた。しかしそのように推定すると，内側列石線と高石垣背面の内側列石とを結ぶ推定線が未掘区もあり，うまくむすびつかない感触がこれまでにもあった。

今回の調査でも，新たに内側列石や敷石を追跡することは，欠失部分が多いため行っていないが，次に述べる柱穴列の検出から，内側列石がおかれていたであろう位置を推定することが可能となった。しかし平成９年度の調査で，次区間となる第４塁状区間との屈折部周辺で，内個列石に沿う状況で土塁内で８本の柱穴列（柱11～18）が検出され，また高石垣の背面側でも同様に５本（柱19～23）が検出された。これらはほぼ直線上に位置するものであることから，それを城門側にむけて延長した。

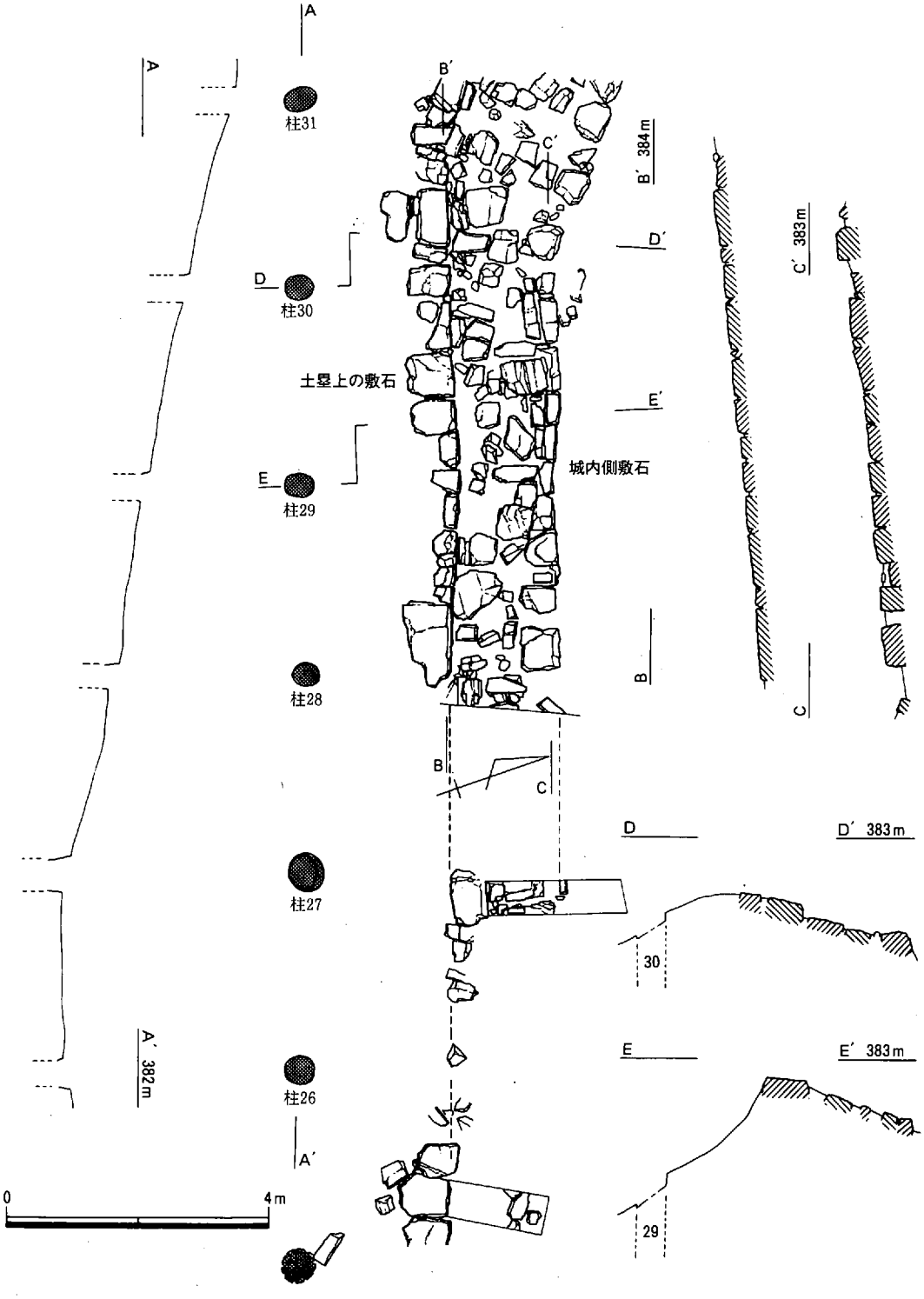
城内側敷石と土塁上の敷石

柱穴列の城門側への追跡調査から，その延長線上で新たに柱穴列が検出されたことにより，内側列石の項で報告した，内側列石が一段低くなる屈折部からの列石は，実は土塁上の敷石の



第53図　西門跡左側の内側列石と敷石
（S＝1/80）

第33図版　内側列石と敷石



第54図　敷石と土塁中の柱穴列（S＝1/100）

端面ではないかと考えるにいたった。というのは，同種例として南門跡で同様の状況がみられるからである。南門跡では，土塁上の敷石と城内側敷石は同レベルであったが，西門跡では10～15cmほどの段差があるものの，工法としては同じものといえる。そのように考えると，この土塁上の敷石の城内側の端面は，高石垣背後の城内側敷石のそれと見事に符節する。ただ気になるのは，そのように考えると通常城内側敷石とよんでいる敷石が，高石垣背面のそれとうまく符節するかということである。

それについては平成８年度の調査で，高石垣背面の城内側敷石を調査した際，一部拡張したところで，10cmほどの段差をもって敷石と同種のものを検出している。一部に欠失があるためあまり整然としたものではなかったので，捨石的なものとして報告していた。

また第８塁状区間でも城内側に二重の敷石があり，第４塁状区間の頭部は整然とした二重構造であることをこれまでに報告している。

このようなことから，内側列石の屈折部から一段低く据え置かれていて，現状では列石状にみえるものは，土塁上の敷石と考えておきたい。それがどのあたりまで続いているかは，これまでの調査では高石垣背面までは確実ということになる。これより先は，次区間となる第４塁状区間の手前では小さな谷状部になることから，敷石は存在せず内側列石保護のためか，内壁に多くの石材を捨石的に乱雑に積上げている。したがって，この部分で敷石は一旦途切れるが，次の第４塁状区間では土塁上の敷石は流失がひどく不明だが，内側列石前面の城内側に二重に敷設されている。

おそらく第６塁状区間のあたりで一重になり，再び二重になって第８塁状区間にいたるものと推定される。

土塁中の柱穴列

内側列石が城門部から内折するあたりは，土塁の流失が著るしく近代になって幾段もの砂防土段が築かれ流土の防備が図られている。しかし高石垣に近づくあたりは流失が少ない。

この土塁中で，高石垣背面の内側列石に沿うような位置で検出された柱穴列の追跡を行い，８穴を検出した。最も城内寄りの１穴は，内側列石の屈折部よりわずかに城門側で，これより城門側への追跡はできていない。各柱穴は検出のみで，掘下げは深いであろうと予測し行っていない。柱径および柱間距

第34図版　土塁中の柱穴列

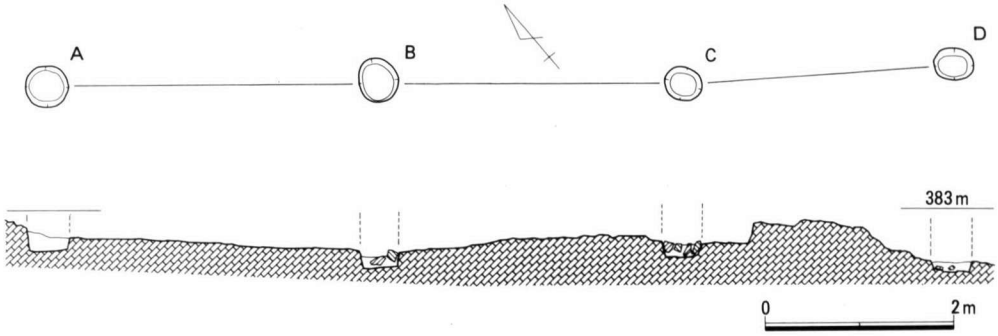
離は102頁を参照されたいが，注目すべきはこのうちの４穴（30～27）が外側列石前面の柱穴（７～10）と対応する。他については未掘であったり，敷石が存在するため未調査である。今回の調査地全体でみても，対応するのはこの前後の８穴のみである。前面と背面の各々の柱穴の心心距離はほぼ7.5ｍ前後である。これは鬼ノ城の城塁の平均的な下底幅７ｍに近い数値を示しており，内側列石に沿う状況の柱穴の役割を考える手掛かりを与えてくれているようである。このことは，まとめの項でふれたい。なお柱19からは未検出だが，柱間距離から３穴だとすれば，23穴がほぼ直線上に並ぶことになる。

４．城内の遺構

城内ついては排土置場を残し，城門開口部の城内を中心に反時計回りとなる遊歩道のあたりまでを対象とした。

柱穴列

城門は，標高400ｍの鬼城山が南西へ下降する舌状小尾根の小さな平坦部を選地し所在している。開口部奥の城内は比較的平坦だが，城門を構築している手前あたりから少し下りはじめるところで柱穴が検出された。位置は開口部の石段の最上段の端から，約2.2ｍ城内に入った



第55図　城門奥の柱穴列
（Ｓ＝1/80）

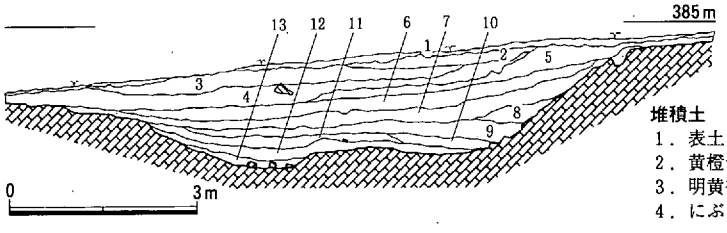
第35図版
城門奥の柱穴列

ところで４穴が城門間口と平行に穿たれていた。柱穴は径40～46cm，深さは傾斜面となることもあって残りは浅く，傾斜の高い側で測っても10～24cmである。柱間は柱Ａ～Ｂが360cm，柱Ｂ～Ｃが320cm，柱Ｃ～Ｄが288cmである。柱ＢとＣは開口部両側の門柱列のほぼ延長線上にあり，両端の２穴は外側門柱列よりやや内側の位置である。

土壙状遺構

開口部の端から城内へ10ｍほどはいったところにある。鬼城山からの斜面が小平坦部に変わるあたりで，遊歩道があるため中央を残しているので，形状がはっきりしないが不整形である。未掘部分を含めると８×８ｍほどの範囲が掘下げられており，最も深いところは1.6ｍになる。最下層にはシルト状の粘質土の薄い層がある。

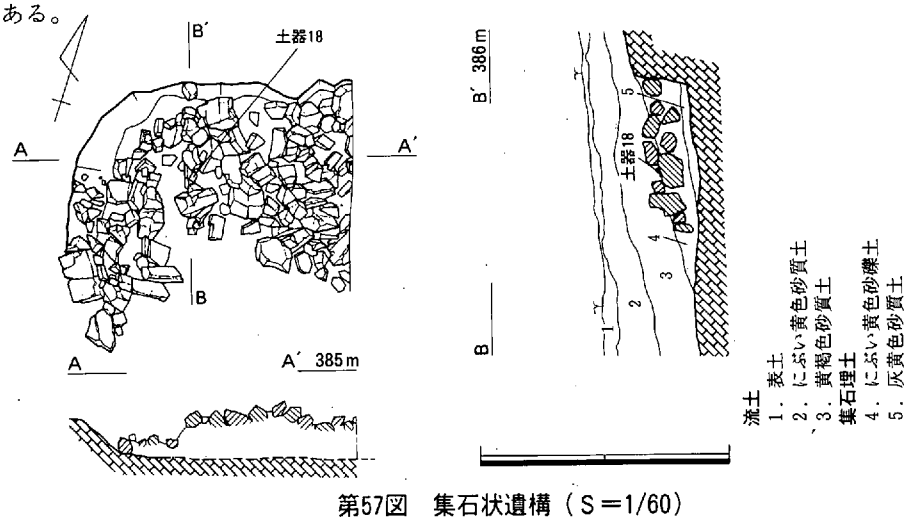
この遺構の性格については不明だが，西南方向から幅広い溝状の流路がこの遺構へ向かっている。下方が未掘だが，たとえ排水を意図したにしてもやや大きすぎるきらいもある。現状でも雨水は４本の柱穴列の前面をとおり，かなりの量が城門開口部へ流れ入っている。



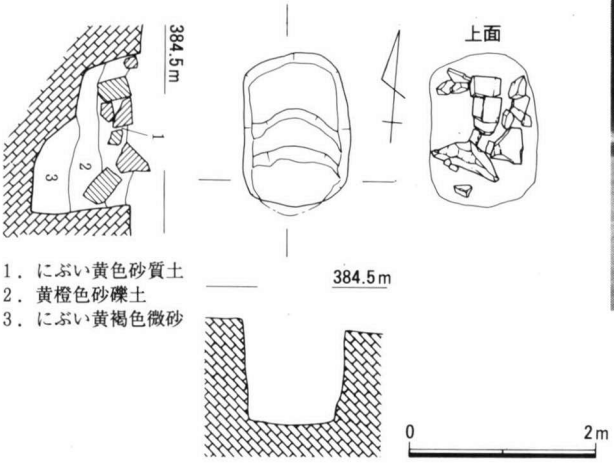
第56図　Ｔ14土壙状遺構断面図（Ｓ＝1/120）

集石状遺構

城門開口部の北北西約20ｍにある。地山を30cmほど掘り込んで段状小平坦面をつくっている。上層にはアプライトの小石材がぎっしりと詰まった状態であるが，どのような性格の遺構になるのか不明である。



第57図　集石状遺構（Ｓ＝1/60）



第58図　土壙（S＝1/60）

第36図版　土壙状遺構

土　壙

集石状遺構の５ｍほど手前にある120×85cmの隅丸長方形状の土壙で，深さ80cmの底面は二段掘りである。ここにも上層にアプライトの石材が入っているが，どのような性格の遺構か不明である。

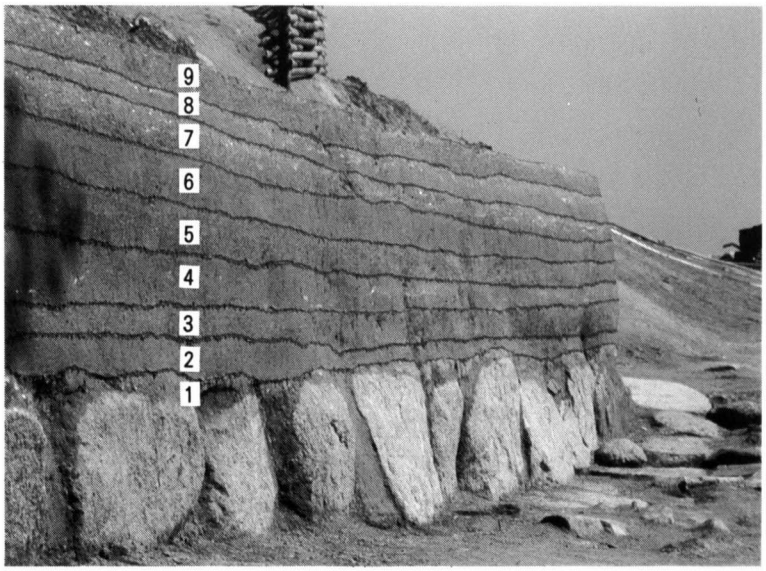
実験的版築

埋め戻し作業を利用して，実験的に版築を試みた。

場所は西門跡右側の屈折部で，外側列石がおよそ７ｍ強ほど残っているところである。ここには調査前には，この列石を利用し数段の砂防石段のあったところである。盛土のみでは勾配がきつく，流失するおそれもあり，また版築を考えるうえでも何らかの手掛かりが得られるのではないかと考えた。その様子を簡略に述べておきたい。（各層の使用土は102頁を参照）

・使用した土は付近に置いてあった排土で，これを１分目と２分目の「ふるい」でわけて使用した。土質は砂粒のごく小さい微砂で，花崗岩の風化土の目の粗い真砂土とは異なる。

・色調は１分目のふるいを用いたものは黄褐色系となり，２分目のものは暗褐色系を呈している。

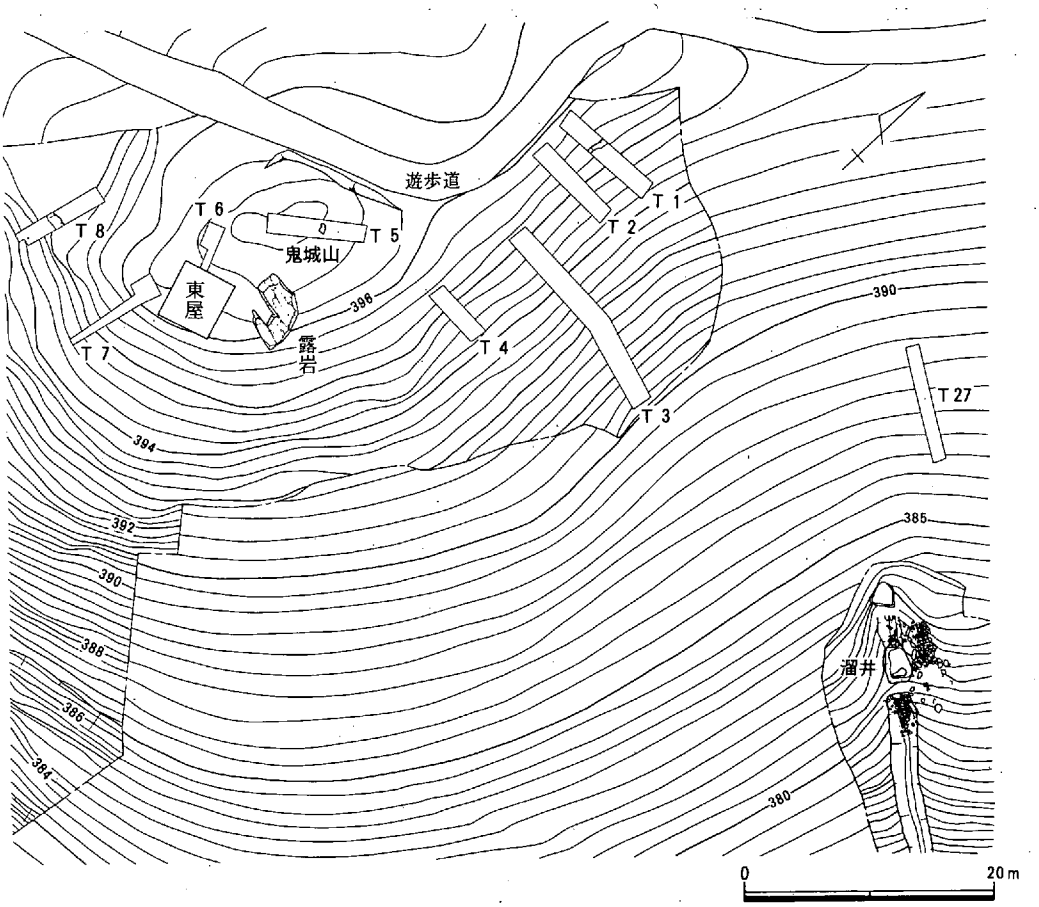


第37図版　実験的版築

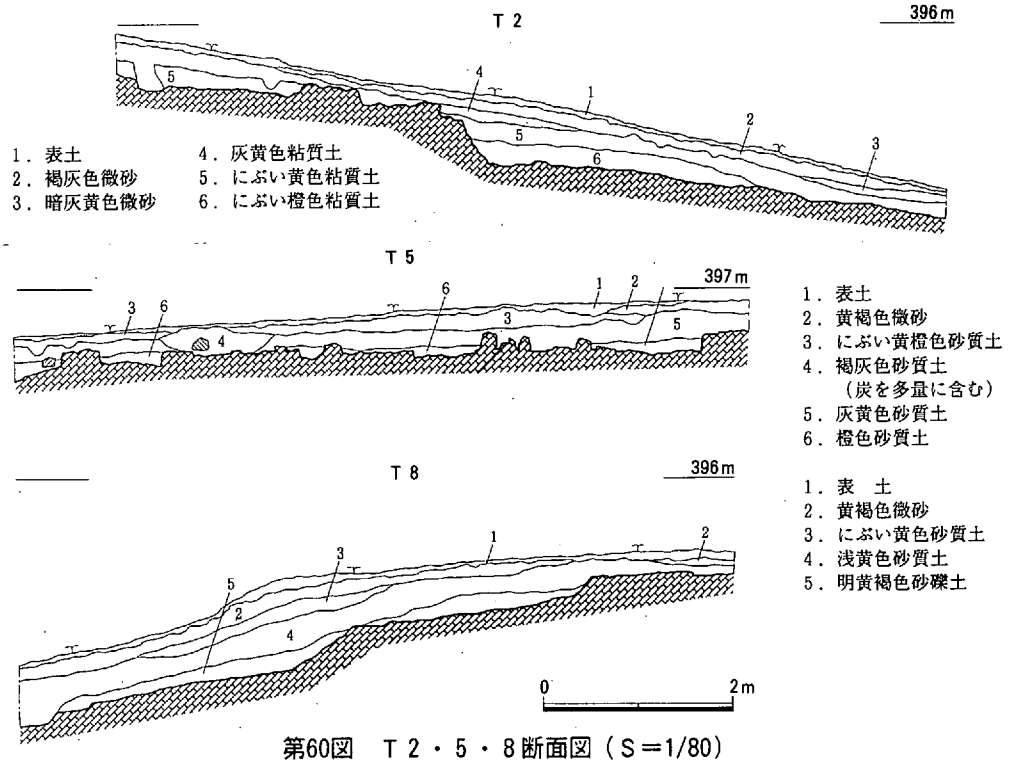
・合計９層を築成した。各層は10cmの厚みを目標としたが，実際には12，３～15cm前後の層となり，これをつき固めた。
・堰板には厚さ３cm長さ４ｍの歩み板を用い，径10cm前後の雑木を柱として立て，杭を背面に打ち支柱として柱と結んだ。
・１分目のふるいにかけた黄褐色土は，それのみだとやや軟質ぎみだが，２分目の暗褐色土は，１分目のものよりやや堅く締まるようである。
・層により石灰を混入したものと，混入しないものの２種に使い分けた。
・完成時のものをみると，各層は当初の大体半分位の厚さになっている。最初に土を入れた段階で，充分に踏み固めができなかったが，全般的に堅くよく締まっている。

鬼城山

鬼城山の標高については，399.9～396.3ｍといくつか表示されている。最新の測量では396.3ｍであるが，おおまかに示す場合は400ｍと表示している。いずれにしても「鬼ノ城」の最高



第59図　鬼城山周辺トレンチ配置図（Ｓ＝1/600）



第60図　Ｔ２・５・８断面図（Ｓ＝1/80）

所であることに変わりはない。城跡全体からみると南西端にあたり，これまでの調査で直下西方約50ｍに角楼跡，南西約60ｍに西門跡が所在していることが確認された。角楼跡という特殊な遺構，南門跡と並ぶ規模の大きな城門跡の存在を併せ考えると，最高所の鬼城山一帯に何らかの遺構が存在すると考えてもあながち不思議ではあるまい。そうしたことから，まず最初に想定したのは望楼跡をはじめとする監視や連絡機能をもつ遺構の存在である。確かに城内には展望にすぐれたところが何箇所もあり，またそれらの地は麓下の城外からさえも望見可能なところである。しかしそうだとしても，先の鬼城山一帯に遺構が存在しないとすることにはならないと考え，この地を調査対象とした。

とはいいながら，最高所近くに建っている東屋のまわりには多くの露岩（アプライト）があるため，事前にピンポールで探査して露岩の間を縫うようにしてトレンチを設定した。最高所の少し北側は露岩が殆どなく，昭和49年までタバコ葉を栽培していたところであり，地形を勘案しつつ，そこには建物跡を想定して４ケ所にトレンチ（Ｔ１～４）を，また東屋周辺にもトレンチ（Ｔ５～８）を設定した。

しかし当初予想した望楼跡等は検出できず，Ｔ５で狼煙場らしい焼土面をもつ遺構を検出したにとどまった。なお，この調査の過程で偶然に溜井と土取場と考えられる大きな掘削地をみつけることができたので，それを含めて報告する。

Ｔ１～４　トレンチはほぼ分水界となる遊歩道下から等高線に直交する方向に幅２ｍ，長さ５～17ｍの４本を設定し掘下げた。各トレンチの上方では30～50㎝前後，下方ではやや堆積が厚く60～80㎝で地山となる。土質は明茶褐色系の粘性の強い土質で，地山は風化のすすんだアプライトであり，拳大位に剥落しやすい岩質である。これらのトレンチでは，Ｔ２で削平によるらしい平坦部らしきものを確認したが，他では何も検出できなかった。しかし数片の須恵器片が出土した。

Ｔ５～８　標高約400ｍの鬼城山の周囲は露岩が多く，また５×５ｍの大きさで東屋の基礎があるため，露岩を避けつつ幅２ｍ，長さ3.5～８ｍのトレンチを設定し掘下げた。頂部のため地山層はＴ１～４よりやや浅く，土質は淡褐色系の砂質土となっている。Ｔ６，７では遺構は検出されなかったが，Ｔ８では人為的な削平痕と考えられる小平坦面が認められた。通路状の遺構となる可能性が考えられるが，現況地形の制約もありトレンチの拡張を行っていないので，どの方向にどの程度のびるのかはわからない。ただ，現況の周囲の起伏からみると，あまり長く接続しているとは思えない。

鬼城山頂部一帯のトレンチによる試掘状況は以上のとおりであり，当初想定した遺構は検出できなかった。しかし，周辺部の斜面は緩やかな傾斜面をなしているから，試掘区以外に建物等をはじめとする遺構の存在する可能性は充分考えられるところである。今後の課題として対応したい。

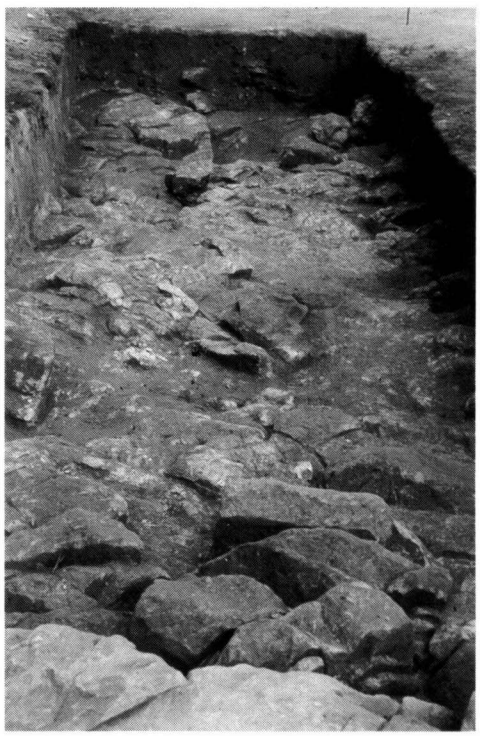
狼煙場跡？

再三ふれているように，鬼城山は城内最高所であり，眺望絶佳の地である。分水界は背面側の外郭線近くにあるため，城内は東から南にかけては下降しつつ平坦部が拡がっている。

こうした地形状況および直下に西門跡，角楼跡が所在することから，当初望楼のような監視施設の存在を鬼城山頂部付近に想定した。

しかし，頂部一帯には多くのアプライトの露岩があるため，事前にピンポールで探査を行い，若干窪み状の地形が推定される位置にＴ５を設定した。

トレンチは地山までが25～45㎝前後と浅いため，一気に地山面まで掘下げた。地山はアプラ



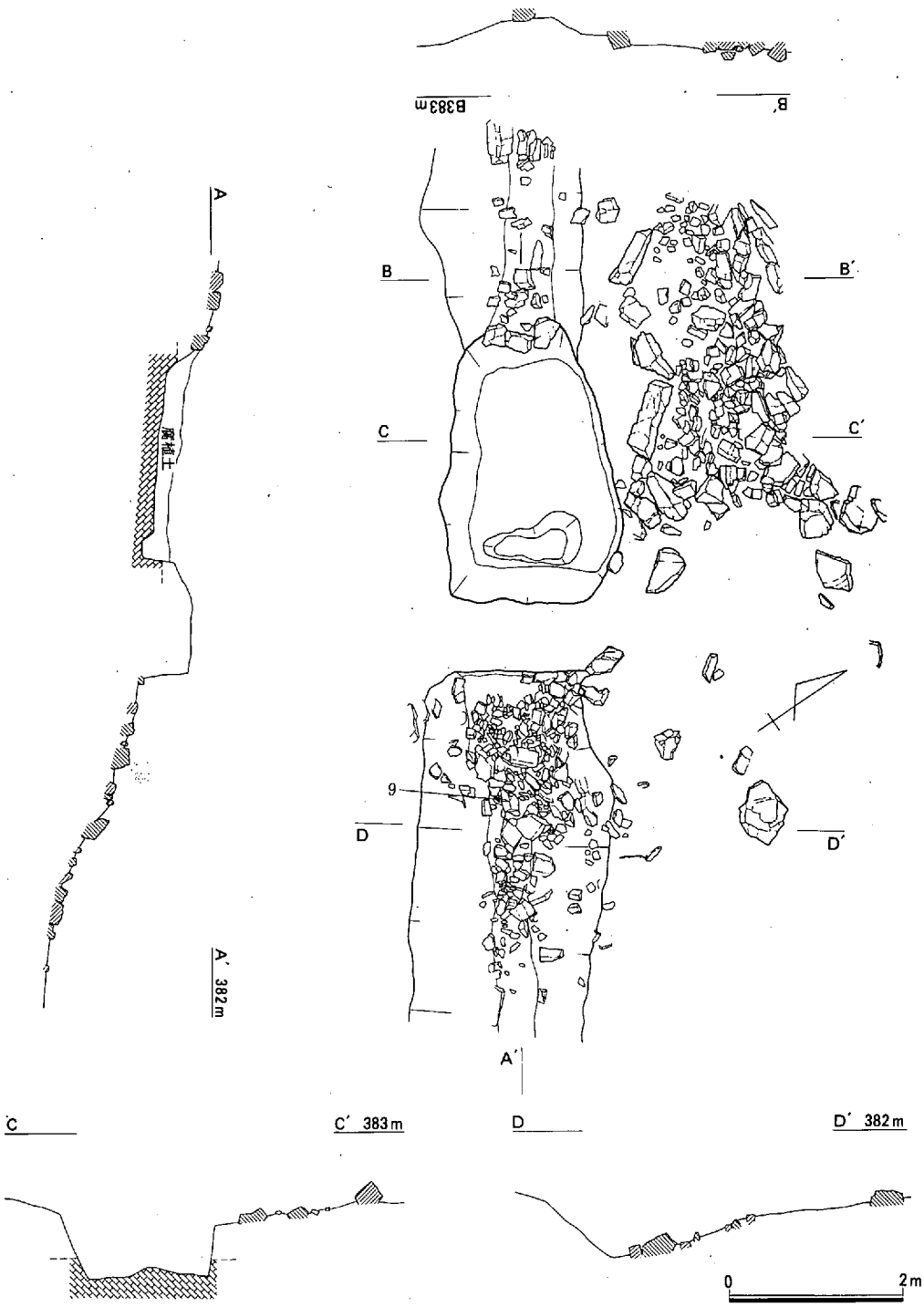
第38図版　狼煙場跡？

イトの風化岩で，縦横に節理の走った剥落しやすいものである。ところが，このトレンチのほぼ中央部で被熱赤化した拡がりが検出された。剥落しやすい岩質のため，きれいに残っているわけではないが，90×50cmの範囲が赤化していた。さらに仔細にみると，小部分ながら赤化したところがあり，それらを含めると復元的には径１ｍほどの被熱赤化の拡がりと考えられた。この被熱赤化したのがいつの時期の，どのような性格の遺構なのかは，出土遺物もなく，穴の形状も不明だが，位置などからみて狼煙穴の底面と推察したい。通信連絡は単に城外とだけでなく，広い城内間でも必要であろうし，こうした施設が城内の各所に設けられていたであろうことは想像に難くなく，本例もそうしたものの一つである可能性がたかい。

溜　井

鬼城山頂部一帯のトレンチ調査で，用水の必要を感じていたところ，かってこの周辺一帯の地権者であり，発掘調査にも携わっている横田武夫氏から，Ｔ１～４のあたりで昭和49年までタバコ葉を栽培していた折りに掘った水溜めがあるという話を聞いた。現場に案内してもらったところ，Ｔ１の下方約43ｍのあたりに80×70cmほどの穴が掘ってあり，水もかなりあるのでこの利用を思いついた。そこで清掃前に周辺を見回してみると，この水溜めの２ｍほど下方が窪んでいるらしい状況が観察された。しかし，シダが密生しているため，それ以上の観察は困難だったので下刈りを行った。すると隅丸長方形状で下流側に土手状のたかまりをもつ溜りを確認した。横田氏によると，はじめて見るものでその存在はこれまで全く知らなかったという。そこでこの溜りの底ざらえと周辺の清掃を行うこと

第39図版　溜井



第61図　溜井平・断面図（S＝1/80）

とした。

溜りは灰白色系の地山を掘り込んだもので，大きさは3.2×1.8m，深さ40～50cmだが，土手状の直下は部分的にやや深く60cmである。土手状部の下半部は地山を掘り込んだもので，上部40cmほどを穴の掘削土で盛って高くしている。この遺構の上方には浅く掘り込んだ溝状を呈し，乱雑だが捨石をして流路を保護している。下方は上方より深く掘り込んで流路とし，30cm大以下の石を捨石とし，底面と斜面を保護している。この溜井の上方からみた左側には捨石に用いた石材よりやや大きい石が4×2mの範囲にみられる。一部に崩れたらしい形跡があるものの，溜井側には長さ1m大の長方形石材が並び置かれた旧状を推定できる。他の石材は，この長方形材を土留めに捨石的に用いたものかと思われる。一方，右側にはこのような石材は全くないことから，左側のそれは地表面がぬかることを考慮した措置かと推定される。そうだとすると，水汲は左側を利用していたことにもなろうか。

期待した遺物は溜井内からは何も出土しなかったが，土手状部の外側の直下流路底面で須恵器8の口縁部1片が出土した。8世紀初めごろかと考えられるから，この溜井が鬼ノ城存続期中に利用されたことをうかがわせる。

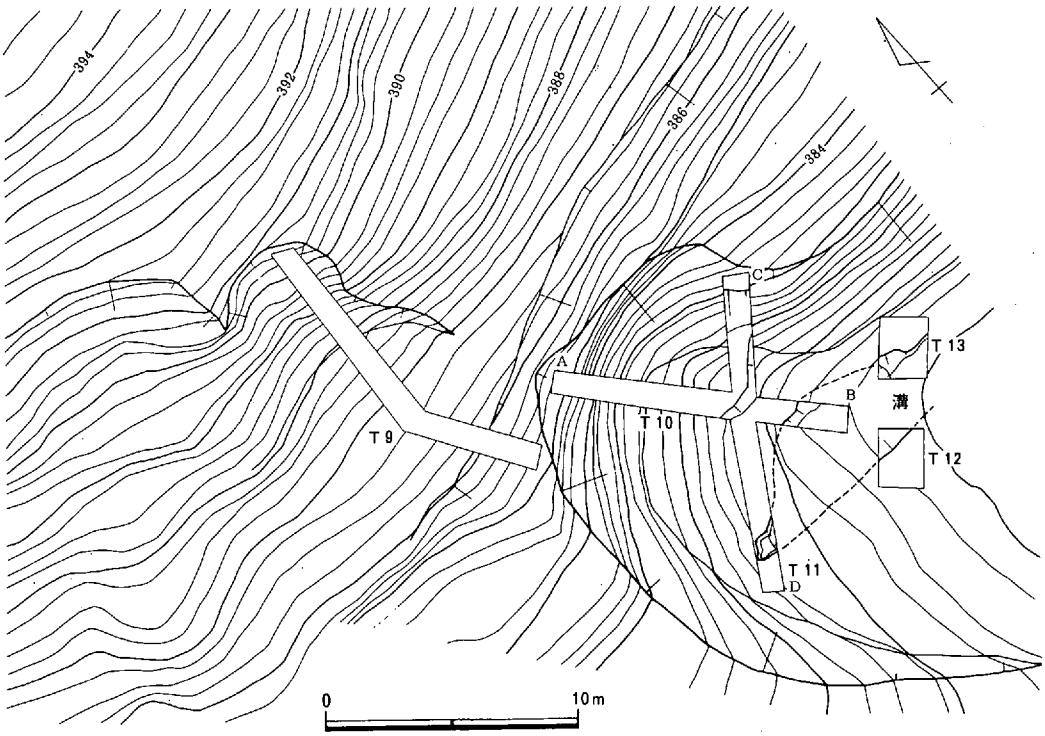
この溜井は，第1水門跡付近で合流する一方の谷筋の谷頭にあたり，分水界からは僅かに40mほど下ったところだが，渇水期にも不思議と水が枯れることはない。

土取場

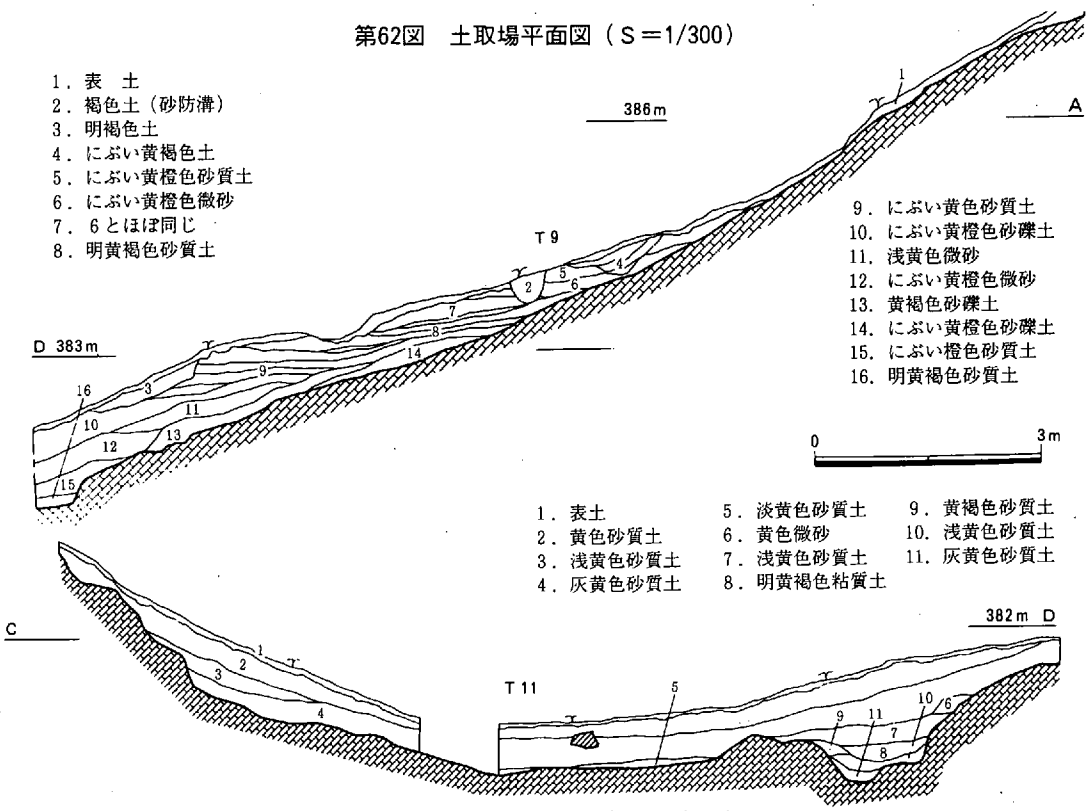
西門跡の調査の際，排土置場を摸索していたところ，門跡より30mほど東側の城内に大きな窪地状をなす場所があることを確認した。地形的にみると，その地は谷筋となる地形ではなく，鬼城山から東側へのびる尾根上にあたる位置であり，窪地状部が自然地形的に形成されたものではなく，何らかの人為的改変を受けた結果によるものと思われた。さらに観察すると，この窪地状部の上方にも小さな改変箇所が認められたので，T9～11のトレンチを設定して掘下げ，さらに地山面にも掘り込み痕跡を確認したので，さらにT12，13を設け調査した。

T9では上方の堆積土は薄いが，下方になるにつれ厚く1mを超えるほどになる。トレンチの両側は改変が小さく，4～5m幅しかない。地山は小塊状のアプライトがみられるものの，全体的には風化土面となる。

T10では窪地面は大きく深い。窪地状の改変部は不整形の馬蹄形状となり，長さ約20m幅約15mが掘削改変されている。地山面は部分的に凹凸をもつものの，比較的緩やかな平坦部状をなす。このトレンチの縦断側の下半から横断側の南端近くにかけて，地山面をさらに掘下げた部分があるため，T12，13を設定して掘下げた。掘り込みは，西から東へ下降する不整形のやや幅広の溝状を呈している。復元的にみると，この窪地状部は3m近く掘下げられているよう



第62図　土取場平面図（S＝1/300）



第63図　土取場断面図（S＝1/100）

である。地山面には岩石はないから，石材採取が目的であったとは考え難く，土砂採取が主目的であったと推定される。だとすれば，どの位の土砂が採取されたのであろうか。単純に計算すれば，長さ，幅，深さから900㎡となるが，地形や形状からみて，Ｔ９，10の部分で少なくとも500㎡にちかい土砂が得られたのではなかろうか。土質はアプライトの風化土とみられる灰白色系土である。地山面を掘り込んだ溝状部は，土砂採取後，滞水した水の排水を目的に掘られたと考えられ，その方向は第１水門の谷を指向している。

鬼ノ城の城塁は全周で2.8kmあり，そのうち90％は版築による土塁である。その材料は版築土の土質からみても，また全体的な数量からみても，たとえ一部が城外から搬入されたとしても，基本的には現地調達であったと推定される。城内域の調査が不十分なため，このような土砂採取痕と思われる場所は，いまだ不明であるが，この窪地状部はそうした課題に応えるものの一つと思われる。

出土遺物

平成10年度の発掘調査は西門を中心とした城内外の状況を明らかにしつつ，角楼から第３塁状区間までの城壁線を把握し，その他の関連調査として鬼城山周辺における遺構の確認と，新たに発見された溜井跡の発掘調査を実施した。その結果，西門城内側の敷石や地山整形痕等の遺構群を初め，Ｔ10～13で検出された溝の埋土や，鬼城山に設定したＴ７，溜井跡等よりコンテナ約２箱分の遺物が出土した。遺物は須恵器杯Ｂ・杯・甕，土師器杯・甕・高台付き椀等が出土しているが，その大半は須恵器甕の小片が大半を占めている。

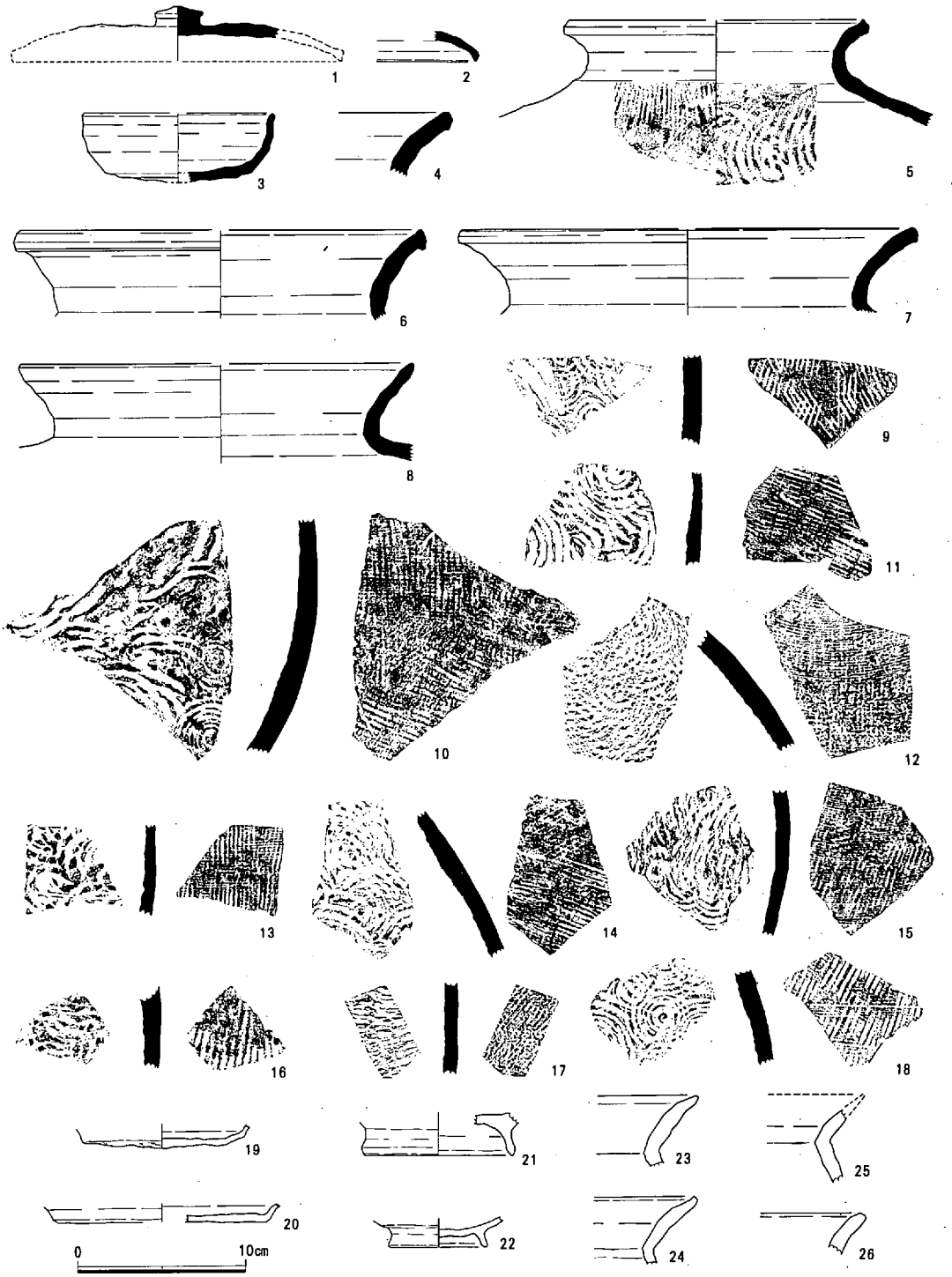
出土状況

西門調査区の城内側では，ほぼ全域から少量の遺物が出土している。西門の背面側に地山を整形した窪みが確認され，地山直上から須恵器杯Ｂ１・土師器皿20が出土し，さらに西門を境として内側敷石の北半からは須恵器甕11・12，南半の敷石から須恵器甕２・３・土師器26を検出した。また，第１塁状区間の敷石状小石群に混入した状態で須恵器甕５が出土しており，捨石よりも城内側には溝の底部より土師器甕23・24を検出している。

溝の東約２ｍには地山をＬ字形に削平して，小石材を充填した集石状遺構を確認しているが，集石内部に混入した状態で須恵器甕18が出土している。また城内側では掘り込みの浅い炭痕跡が２ヶ所明らかとなり，炭痕１の検出時に上面から須恵器甕17が出土している。

西門から東へ約40ｍ離れた大規模な土取場跡に，Ｔ10～13のトレンチを設定した結果，西から東へ延びる溝を検出した。溝の埋土より須恵器甕４・６・14・15が出土し，上層より土師器椀21が出土している。

鬼城山周辺で設定したＴ１～８の中で，遺物が確認されたトレンチはＴ７のみであった。出



第64図　出土遺物（S＝1/4）

土した須恵器甕はＴ７の北端に位置し，表土から32cmの深さで出土しているが，その他には鬼城山周辺で須恵器甕16の小片を１点表採しているにすぎない。

溜井跡からは土堤の下方に集石を検出した。この集石は溜井より溢れた水が溝底をあらう位置にあり，集石上面より須恵器甕８，９，土師器甕25，吉備系土師器椀22が出土している。なお，溜井埋土からは遺物は出土していない。

遺　物

１～２は須恵器杯Ｂの蓋で，両個体とも焼成が不良である。１は口縁部を欠損し，扁平な天井部にボタン状のつまみを貼付している。２は蓋の口縁部で端部をつまみ出し，丸みを帯びながら天井部へと続く。３は須恵器杯で復元径11.5cm，器高4.1cmを測り，体部は丸みを帯びながら立ち上がり口縁部はやや外反する。内外面共に回転ナデを行い，底部はヘラ切りの後ナデている。４～８は須恵器甕の口縁部で，その形態から外反するものと直線的なものに分けられる。

５～７は外反しており，程度の差はあれ端部の下端をつまみ出すことに特徴があり，焼成は総じて不良である。８は直線的に立ち上がり端部は尖り気味におさめている。さらに端部の形態を観察すると，５は他の甕に較べて短く立ち上がり，端部の上下をつまみ上げている。６は端部の上下を拡張しており，平成８年度に調査した角楼出土の須恵器甕と類似するであろう。

９～18は須恵器甕片で外面に平行タタキ目，内面には同心円状の当て具痕が顕著に認められる。拓影にあげたこれらの甕片の焼成を観察すると９・12・15・17は堅致に焼きしまり，10・11・13・14・16・18は焼成が不良で軟質である。

23～26は土師器甕で，口縁部は外反するものがほとんどである。19は土師器杯で底径9.6cmを測り，平坦な底部には外縁にヘラ切りを行った後に押圧を加えて成形している。21は土師器椀で底径約９cm，高台高1.8cmを測り，高い高台をもつ。22は吉備系土師器椀で底径5.8cm，高台高は８mmを測り，高台はハの字状に貼り付けられている。

時　期

今回出土した若干の遺物は奈良時代～平安時代にかけての遺物が認められ，このうち時期の明らかなものについて以下に述べておきたい。

まず１～18の遺物は奈良時代に属する。１の杯蓋は，つまみの形状を観察すると，つまみ頂部が盛り上がり，接合部を厚く接合していることから８ｃ初頭と考えられる。２の杯蓋は口縁部が丸みを帯び，天井部へと続くことから８ｃ初頭である。３は津寺遺跡，菅生小学校裏山遺跡等でも多数出土している「椀型」の杯で，７ｃ末に比定される。４～８の甕は多数の形態が認められ時期を特定することは困難であるが，おおむね７ｃ後半～８ｃと考えられる。

19～22の遺物は平安時代に属する。20の皿は口縁部が短く立ち上がり外反することから９ｃ

である。21の椀は足高の高台をもつため11ｃ，22の吉備系土師器椀は高台の形状から12ｃと考えられ，これらは山岳寺院である新山寺関連の遺物であろう。

調査で出土した遺物からは，鬼ノ城が機能していたと考えられる７～８ｃ代の中でも，特に７ｃ末から８ｃ初頭の遺物が認められた。遺物の年代観からすれば過去の調査で得られた出土遺物の時期とほぼ重なり，城壁線の場所によって時期が隔たる状況は見られなかった。

今後の調査により，さらに具体的な様相が明らかになることを期待したい。

また，調査を実施した角楼・西門・南門・東門を包含する城壁線からの出土傾向を見てみると須恵器甕の出土が目立ち，供膳具の出土は少ない傾向にある。これら以外の塁状区間においても表採等でたびたび甕片が採集されており，城壁線と貯蔵具との何らかな関連が窺えるのではなかろうか。今後とも遺構と出土遺物の関係は注意していく必要があろう。

参考文献　1．『古代の土器１　都城の土器集成』古代の土器研究会　1992年
2．「林崎遺跡出土の古代土器について」『総社市埋蔵文化財報告』15　1999年

東門跡

東門跡は，総社市教育委員会が「鬼ノ城」で最初に発掘調査した遺構である。

平成６年度には，丸柱に門礎を添わせた４本柱の掘立柱城門で，床面は石敷，柱と柱の間は板壁という状況も確認された。さらに城門開口部左右の土塁中に計５本の板塀または柵列ではないかと推定される柱穴列も検出された。調査後，柱穴の位置に径20㎝前後の丸太を立て，版築土塁の残存状況のよい片側の柱間を歩み板で板壁状とし，遺構の保護を図りつつ公開してい

第40図版
東門跡

た。しかし，歩み板が一枚であったため土圧によりはらみが大きくなったことから，今回歩み板の取り替えを行った。

併せて調査時より指摘されており，さらにその後の西門・南門跡の調査事例を勘案し，６本柱城門であるかどうかを確認するため，残存する石敷前面と外側列石間を清掃した。

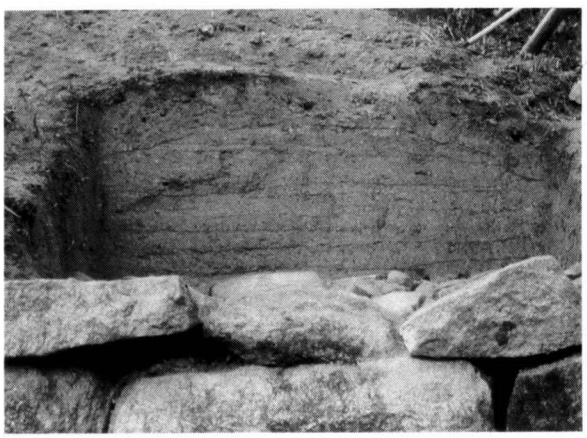
調査の結果，城内からみて右側の本柱の前面で柱穴を検出した。掘り方は70㎝大の方形で，柱径は35㎝であるが，深さは現状では18㎝しかない。ただ，この柱底の絶対高は本柱のそれとほぼ同高であり，辛うじて残っていたことになる。もう一方の予想される柱穴位置は，流失の著るしい側であり，すでにこの柱底にあたる高さ以上に流水のため欠失していて確認するにいたらなかった。

とはいえ，これで東門跡が６本柱の掘立柱城門であることが確認された。ただ，西門・南門跡は12本柱の掘立柱城門であることから，同様の構造となるかどうか検討しておかねばならない。板塀または柵列と推定した柱穴列は，後柱列上に位置しているが，本柱列上の土塁区間では，前回の調査で精査したにもかかわらず検出されていない。

とすれば，東門跡が西門・南門跡と同様に12本柱の掘立柱城門になるとは考えられない。

以上のことから，東門跡は１×２間の６本柱からなる掘立柱城門で，間口3.3ｍ奥行5.6ｍとなる。この規模は，西門・南門跡より小さく，未調査ではあるが北門跡よりもわずかに開口部間口の小さい，城内４門のうち最小規模となる。ただし，構造的には床面を石敷，門礎を添わせた掘立柱城門であることは４門に共通している。しかし，本柱に丸柱を用いていることや，門礎に刻まれた方立の形状は長方形で，他の３門と異なっている。この差異が城門の着工時期の差異としてとらえられるのか，城門の性格や受託集団の反映なのか，残る課題は多く複雑である。

第１水門跡



第41図版
第１水門跡

第１水門跡は，背後の谷筋の大きさからみても，当初は最小規模の水門跡と考えられていたが，平成８年度の調査で，隣接する第２水門跡と遜色のない規模であることが確認された。現況は石垣はよく残っているものの，通水溝はみあたらない。しかし，石垣上端に１ｍ大の一石があり，その形状は第３水門跡の通水溝と類似していることから，それが第１水門跡通水溝の蓋石であり，側壁が倒壊したものと考えていた。

このたび修復を試み，この石を除去したところ，あらたな事実が判明したので報告する。

蓋石と想定した石を移動，仮置しおよそ２×１ｍの範囲を清掃した。土塁の壁面をみると版築層であり，石垣最上面はやや胴長の石材を使用し，その端部からは板状の石材を置き，隙間は小石材で丁寧に充填していた。これは上部に版築土塁が積まれるのであるから，当然の措置といえよう。しかしいくら観察しても，この部分には通水溝を構成する石材はなく，また版築層中にもその痕跡はみいだせなかった。したがって，除去した石は当初想定した通水溝の蓋石ではなく，また通水溝も調査した範囲には存在していないことになる。そこで念のため，ピンポールで清掃した範囲以外の石垣上面を探査してみたが，それらしい感触は得られなかった。ただ，第２水門跡方向の次区間に近いあたりは流土量が多く，探査を行うことができなかった。一方，背面側は未調査であり，また土砂も堆積しているため集水口らしいところも確認していない。

こうした制約された状況からではあるが，この第１水門跡には通水溝は存在しない可能性がたかいと考えざるをえない。とはいいながら，小さいが背後に谷筋をもち，いまも石垣最下底部からは第２水門跡に劣らないほどの流出量があるから，なんらかの形で排水処理が必要なことはいうまでもない。

他の四つの水門跡（第４水門跡では破壊，欠失）では，明確な通水溝を有するが，第１水門跡では石材の間を自然浸透して流水を処理した可能性がたかいようであるが，次区間寄りに未探査区を残しているのは気掛かりである。それというのも，第２水門跡でも通水溝は中央寄りではなく，次区間寄りの石垣端部近くに位置しているからである。あたかも第１水門跡のいまのみず道も，この未探査区の背面にあたるからである。

なお，当初蓋石と想定した石は，除去後の観察では隣り合っている２石の間に石の一辺がくいこんでいるような状況であり，単純に上方からの転落材とは考えられない。何らかの指標的なものとしたのであろうか。

第４水門跡

第４水門跡は，五ケ所ある水門跡の一つで，東門跡に近接している。構造的には他の水門跡と同工で，現在確認できる規模は上端長約12ｍ，高さ約３ｍの石垣積みが残っている。大型の

石材を用いて重箱積みにしているが，通水溝を含め中央部が長さ4.5ｍほどにわたって欠失している。

第４水門跡のある谷筋は，城内四つの谷筋の中では最大規模のもので，谷頭は北門跡近くにまで達している。このため流水量も最多であり，梅雨の長雨の時には滝のごとく流下している。こうした多量の流水が，長年にわたって水門石垣を破壊したことはいうまでもなく，当然のことながら石垣上の版築土塁の残存状況もよくない。

このたび，東門跡の板壁材の取り替え時に併行して行った観察で，石垣材の一石が欠失し，放置すればその上部の石積みが崩落する危険性が察知されたので，補修を行った。補修箇所は第42図版に示す位置で，欠失箇所は土砂に覆われており，右上方の50×20㎝大の石材が隣の石材とわずかに噛み合うことで，辛うじて上部の石積みの崩落を免れているような状況であった。石材を補充するため，土砂を取りのぞいたところ内側には小石材などによる裏込石はきわめて少なく，大人が入れるほどの大きな空洞となっていた。周囲を観察したところ，大型石材を用いて構築しているためか全般的に裏込石は少なく，土砂で代用しているような状況であった。しかも土砂は流水のため流失しており，このため大きな空洞が生じたものと考えられる。

一方，現出の石垣最上面を観察すると，石垣前面列に平行し2.6ｍ内側に一列，さらにそれより3.5ｍ内側に一列の石材列が認められた。ただこれらは現状での観察によるものであり，石列が下部からそうなっているかどうかは不明である。裏込石は石垣の上部に近いためか，先述の箇所より多いものの，空洞部もかなりみられる。

これらの観察から，第４水門跡の石垣は前面の石積みに平行するかのように，石列状に築き

第42図版
第４水門跡

つつ高さを増し，最終的には背面石列を含めて４列の石列状に構築したのではないかと推定される。ただし，以上は部分的な観察によるものであり，将来的には調査等によって修正を要すことになるかもしれない。

５．西門跡調査のまとめ

西門跡は，平成８年度の発見，調査から，期間の長短はあったが３年継続の調査となった。第１展望台と称されている鬼城山直下にあり，多くの人々が訪れているところで，角楼跡とともに将来の整備計画の中核をなす遺構である。いまだいくつもの課題を残しているが，鬼ノ城の城門では最も広範囲に調査した遺構であり，内容もかなり具体的に判明しているので，以下にまとめておきたい。

(1) 城塁線の接続状況

角楼跡は，正面側約13ｍ奥行約４ｍが前面へ張りだす特殊な遺構で，下部を石垣積みとし，石垣の間には計６本の，一辺約50㎝の角柱が立つ。石垣の上部は柱を利用した胸壁と推定している。

この張り出し部の両側も石垣で，西門跡側となる左側の石垣は高さ2.7ｍ，長さ4.9ｍが残っている。この石垣からは10度内折して外側列石を基礎石とした版築土塁となる。遊歩道が土塁を横切っているため未掘部分があるが，Ｔ15を経て約20ｍの区間が直線的に続くとみてよい。これから西門跡にかけては，城門近くに外側列石が残存しているものの，その間は列石を欠いているため，前面の柱穴列から推定するほかない。Ｔ19周辺の外側列石と城門寄りの列石およびその前面の柱穴列の配置から，この間に二つの屈折点を次のように推定できる。（第41図参照）Ｔ15の残存する外側列石から2.7ｍ先に屈折点（Ａ点と仮称）があり，そこで12度内折して12ｍ先に次の屈折点（Ｂ点と仮称）が考えられる。この屈折点で10度外折して14.5ｍ続き，24度内折（Ｃ点と仮称）して城門前面へ直線的にのびる。

これに対応する内側列石については，列石も敷石も欠失しているから，土塁中の４穴の柱穴から推定するほかない。そのうち柱34で前後の柱が屈折しているから，ここに屈折部があり，これは外側のもの（Ａ点）と対応している。問題は次の屈折点（Ｂ点）である。内側列石にこれを対応させることは，残存する開口部からの内側列石の状況からみてやや疑問である。

むしろ外側のＢ点のように屈折せず，20.4ｍの直線区間と考えた方がよいのか，あるいは外側線と同様に屈折するのかは，柱穴列が未検出のこともあってにわかには決められない。

一方，西門跡から高石垣間は，城門部門柱１から10の次の屈折点が明瞭ではない。ここを留

保して考えると，次の屈折点からは高石垣を経て第４塁状区間と称されている屈折点までの約70ｍが直線となることはいうまでもない。また推定される内側列石線も外側線と見事に対応している。

(2) 城内外の敷石と土塁上敷石および敷石状小石群

敷石は，平成８年度の調査で角楼跡前面で最初に発見された。その後，西門跡や南門跡あるいは城塁の一部の区間でも発見され，少なくとも城内側では正面側のほぼ全面に，城外側は城内側よりもすくないものの急峻な地形となる区間や水門跡前面を除けば，かなりの区間で敷設されているのではないかと推定していた。

今回の調査の中心となった西門跡でも，城塁の内外で検出された。その状況は先述しているので省くが，城外側では未掘地や流失している区間があるものの，築成当初においては角楼跡

第43図版　西門跡全景（東南から）

から第4塁状区間にかけての前面にはほぼ全面に敷設されていたと考えてもあながち無謀でもあるまい。とくに城門左側最前面の敷石は，麓下からの進入ルートの最終地点の状況を表しているようである。また高石垣前面の敷石は予想だにしなかったもので，敷石が通路的機能のみに限定されないことを暗示しているかのようである。城内側についても流失している区間はあるものの，築成当初は調査区の全面に敷設されていたであろうことをうかがわせる状況である。

角楼跡背面の石段前面から城門跡の右側にかけての敷石状小石群の存在は，上面に多少とも土を盛れば通路としての機能は充分に果たせるであろうが，その状況はむしろ城塁内側基底部の保護のために必要不可欠なものであった色彩が強く感じられる。

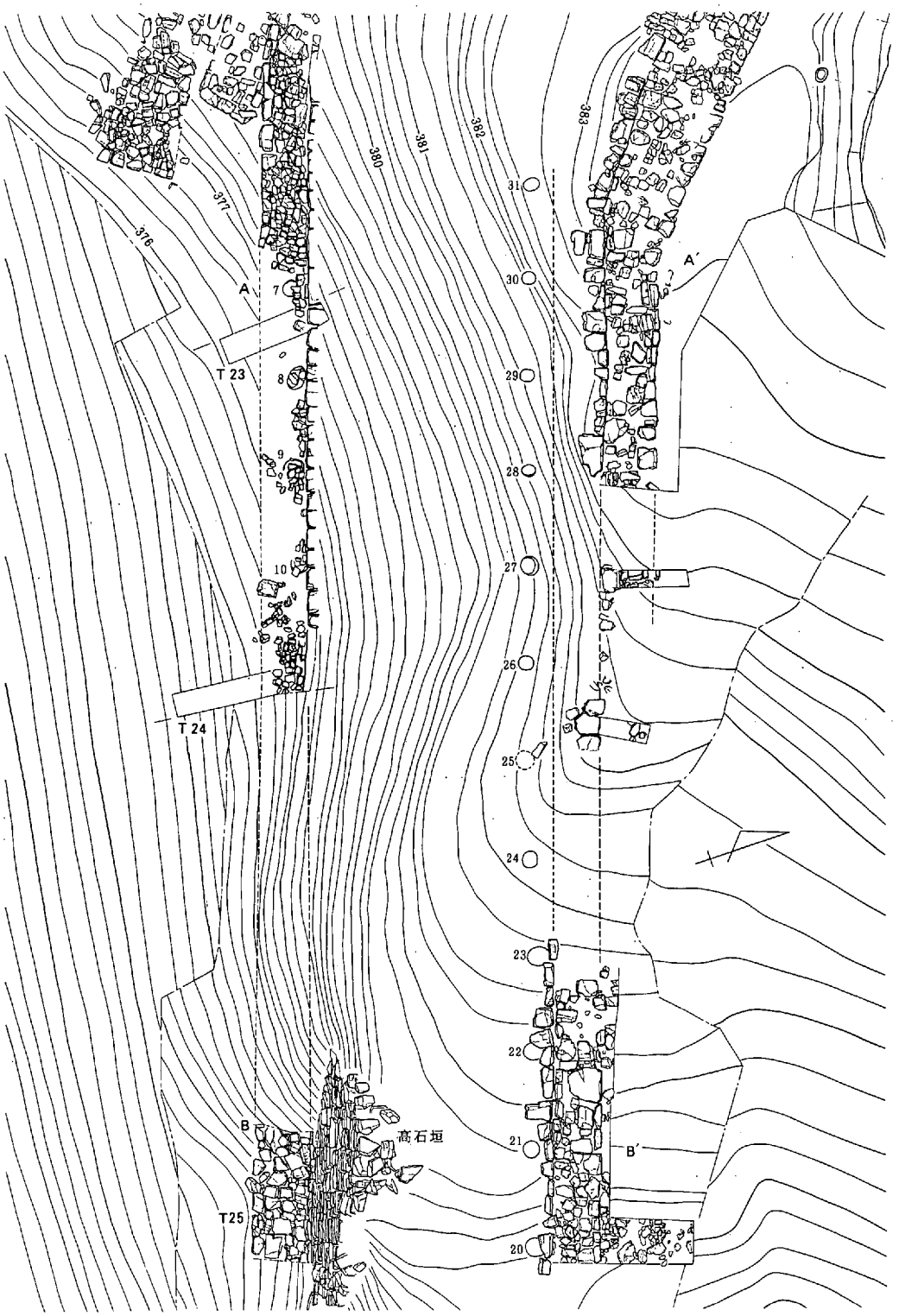
城塁が頂部平坦面から斜面にかけての傾斜変換点に位置していることを考えれば，基礎部の強化安定を図ると共にうまく排水処理することが城塁の保全上不可避のことであり，それ故に敷石が敷設されたのであろうと推定される。城塁内外の敷石の敷設は，そうした意味で全区間的に拡大して見直すことが求められるのではあるまいか。

また土塁上の敷石については，すでに南門跡でも検出されているが，それが城門部の片側のみに存在するのか，それとも両側にあるのかということも追求しなければならないが，一方では城門上階への昇降をも考えさせるようである。

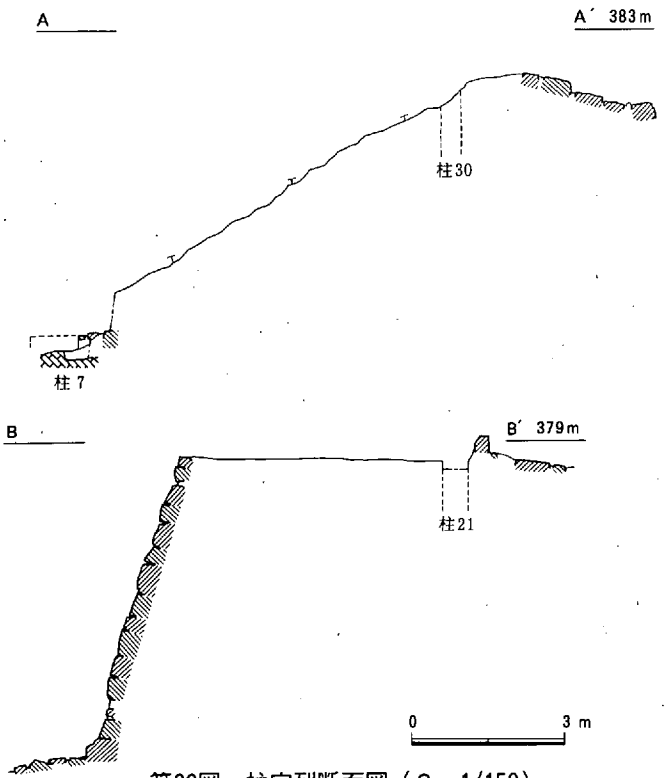
(3) 城塁前面および城塁中の柱穴

鬼ノ城の城塁は，頂部平坦面から斜面となる傾斜変換点のあたりに構築されている。全周約2.8kmで，90%が版築土塁である。土塁壁面の立ち上がりは，残存する基底部から1mほどの高さのところでは，ほぼ垂直であり，それから上部も築成当初はほぼ同じ立ち上がりであったと思われる。こうしたことから土塁築成にあたっては，堰板を支える柱の存在が当然考えられるところであるが，これまでの調査ではそれらしい2，3のものを除いては検出できなかった。

今回の調査では，幸いにも城外側では外側列石の直前面で，また土塁中では内壁となる内側列石に沿うような状態で多数の柱穴が検出された。このうち外側列石の前面では計10本が検出された。それらはたまたま敷石の欠失しているところであり，敷石の残存しているところにも存在することは疑いなかろう。検出された柱穴の位置，大きさ，深さなどからみて，これらが版築用の堰板を支えたであろう柱であることはいうまでもなかろう。問題なのは土塁中で内側列石に沿うような位置で検出された柱穴列である。土塁中で検出された柱穴列は，東門跡，南門跡でも確認されているが，それらは位置からみて版築用の柱とは考え難く，土塁上の板塀または柵列の柱と考えている。内側列石に沿う状態で検出された柱穴は，その位置からみて堰板を支えた柱であろうことは充分納得できるであろう。ただ気になるのは内側列石の外側，つまり城内側にあるのではなく，土塁の短軸側の端部ちかくとはいえ，土塁中に存在することであ



第65図　西門跡左側の柱列穴（S＝1/200）



第66図　柱穴列断面図（S＝1/150）

る。

一般に鬼ノ城の土塁は，両側に壁面をもつ夾築構造といわれており，それならば柱は土塁の外にあるものと考えられる。しかしここで注意しておかなければならないのは，鬼ノ城の城塁は頂部平坦面から斜面にかかる傾斜変換点に位置しているということである。というのも傾斜変換点とはいいながら，実際は多くの区間で斜面に位置していることが確認されている。このため城塁は夾築とはいいながらも，むしろ内托に近い構造をもっている。内外の柱間の土塁を構築し，城内側を盛土整地し，その最終面を掘り込んで内側列石を据えていることが，平成８年度の調査で一部区間ではあるが確認されている。このため土塁の外側の高さに対し，内側の高さはきわめて低い，そうした土塁である。

こうした内外の柱穴列のうち，４対（７と30，８と29，９と28，10と27）は対応している。他は一方が未検出のため不明だが，各々の柱間距離などを勘案すれば，同様に対応するものと考えてよい。対応する４対のそれぞれの柱間距離は6.8～7.3ｍである。この長さならば，内外の柱を結ぶ横木は１本でも可能だが，内外の土塁の高低差を考えれば，土塁構築の下半部の段階では，中間にもう１ないし２本の柱，または柱の代わりになる杭などを考慮したほうがよいのかもしれない。

このようにみてくると，内側列石に沿う状態で検出された柱穴は，版築構築用の柱であり，また外側の柱の支持柱でもあったといえよう。ただ，27～31は内側列石に接して土塁上に敷石があり，城門上階への昇降に関わる地点でもあるから，一部は永定柱として板塀用の柱に二次的に利用された可能性も考えておきたい。

(4)　城門前面の整地

このことについては，城門の残存状況がよいため，城内から城門前面へかけての断ち割り調

査はできていない。しかし進入路最終地点と考えられる敷石(C)やＴ20の状況から，ある程度の推定ができよう。

西門跡は，鬼城山から南西に張りだす舌状小尾根に占地しており，城門もそれをベースに造成整地していることはいうまでもない。そのことは第46・48図にも読みとれようが，Ｔ20の状況から門柱10の前面11ｍほどまで行われていたらしく，また進入路敷石の端部あたりにかけてまでもその範囲がおよんでいたらしい様子をうかがえる。これと対になる城門右側前面については，調査ができていないが，地形的には左側と同様に考えてよさそうである。さらに外側列石前面もＴ23，24の断面からも観察されるとおり，その前面2.5ｍぐらいまでを造成しているらしい。そうでなければ，幅1.5ｍの城外側敷石の敷設はできないであろう。外側列石を据える範囲だけを整地するのではなく，その前面までを広く造成整地し，敷石を敷設することにより，土塁の，とくに基底石となる列石の崩落を防止しているようである。こうしたことからみ

第44図版　西門跡全景（西南から）

ると，敷石は通路的機能だけでなく，というよりむしろ土塁の保全のために必要な土木的な手段だったのではないかと考えられる。そうした配慮をしながらも長年月の経過は，版築土塁を殆どの区間で流失し，基底石となった外側列石は敷石を流失しつつも埋没残存しているものが多い。そうした意味では彼らの所期の目的は充分に達成できたといえようか。

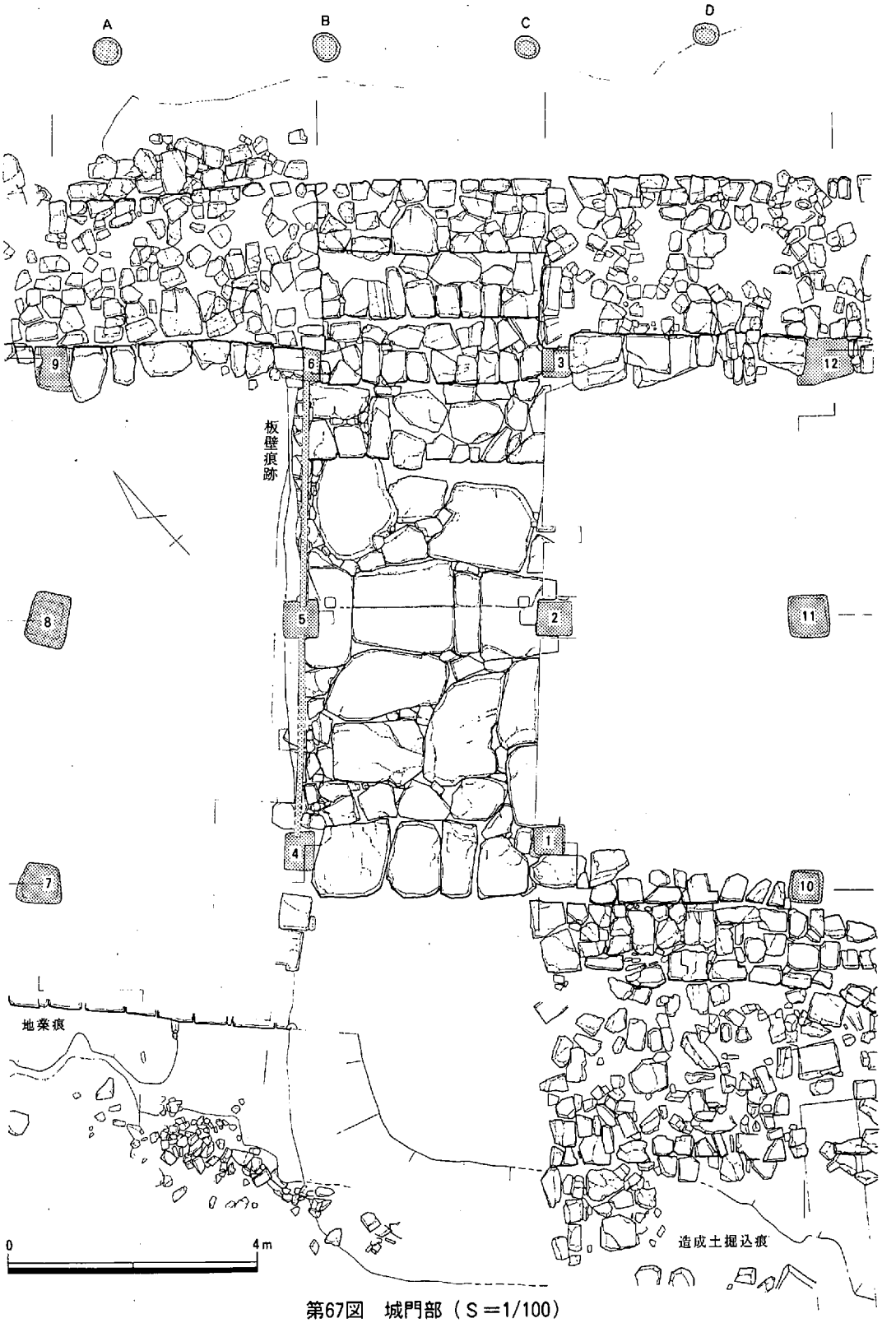
このように考えると，水門前面や急峻な区間を除き，こうした作業が行われている区間が，城外側にも予想する以上にあるのではなかろうか。

(5) 城門奥の柱穴列

西門跡を入ったすぐ奥の城内で，4穴の柱穴列（A～D）が1列上に並んで検出された。鬼城山から西南に張りだす小尾根の斜面から小平坦部となり，それが下降するあたりである。数値等については，3城内の遺構　柱穴列の項でふれたとおりである。こうした例は，大野城大宰府口城門で，掘立柱穴列が2条検出されており，「城内部への目隠し的なもの」[註]と考えられている。鬼ノ城例も大宰府口城門例と同様な位置にあり，配列も酷似している。したがって，この西門跡例は城内の目隠し塀の柱と考えられる。

鬼ノ城では，城門を3門発掘調査している。東門跡では城門から城内にかけて20×15m大の一枚岩の巨岩が，城内を遮断するとともに立ち入りを拒んでいる。南門跡では高さ5m余の尾根があり，同様の機能を果たしている。北門跡は所在を確認したのみで，発掘調査を行ってい

第45図版　城門部全景



第67図　城門部（S＝1/100）

ないが，東門跡や南門跡のように自然を利した遮蔽物はなく，城内は西門跡と同じように平坦部が拡がっている。あるいはここにも西門跡とおなじような目隠し塀が存在するのであろうか。いずれにしても，設計者のすぐれた戦術意識をうかがうことができる。

註

福岡市教育委員会『特別史跡　大野城跡Ⅶ』1991

参考文献

坪井清足ほか『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会　1980

総社市教育委員会「鬼ノ城　角楼および西門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報７』1997

総社市教育委員会「鬼ノ城　南門跡ほかの調査」『総社市埋蔵文化財調査年報８』1998

村上幸雄・乗岡　実『鬼ノ城と大廻り小廻り』　吉備人出版　1999

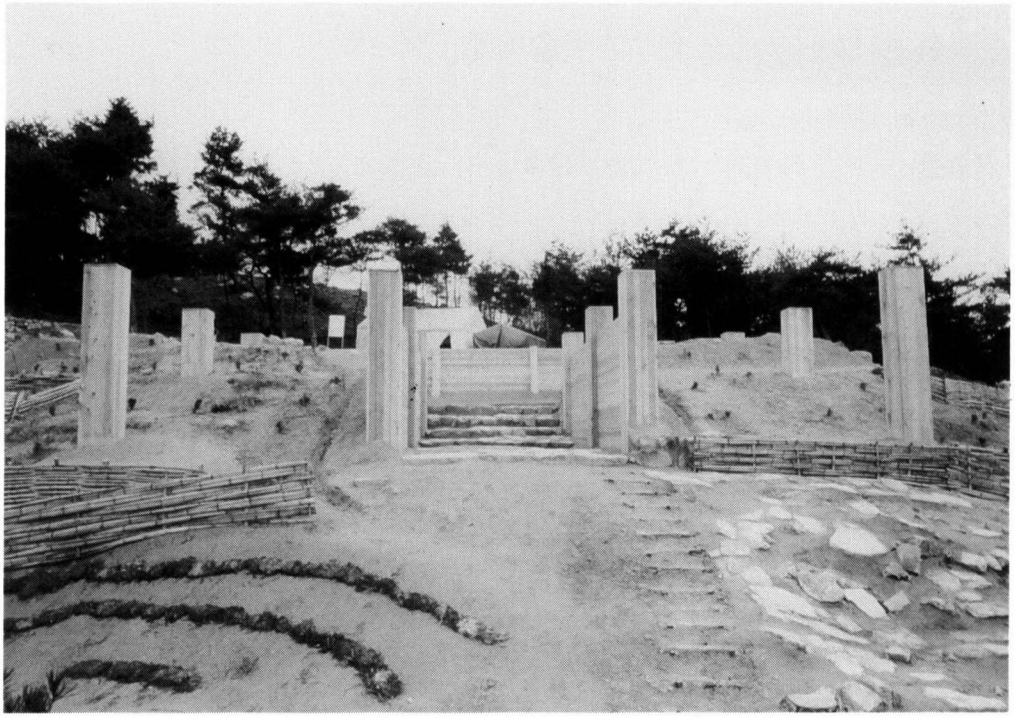
実験版築の土層

1層　2分目　10cm＋石灰1俵（20kg）
2層　1分目　10cm
3層　2分目　10～15cm
4層　1分目　10～12，3cm＋石灰10kg
5層　2分目　15cm
6層　1分目　10～12，3cm
7層　2分目　10～13cm＋石灰10kg
8層　1分目　13cm＋石灰10kg
9層　2分目　10～12，3cm＋石灰10kg

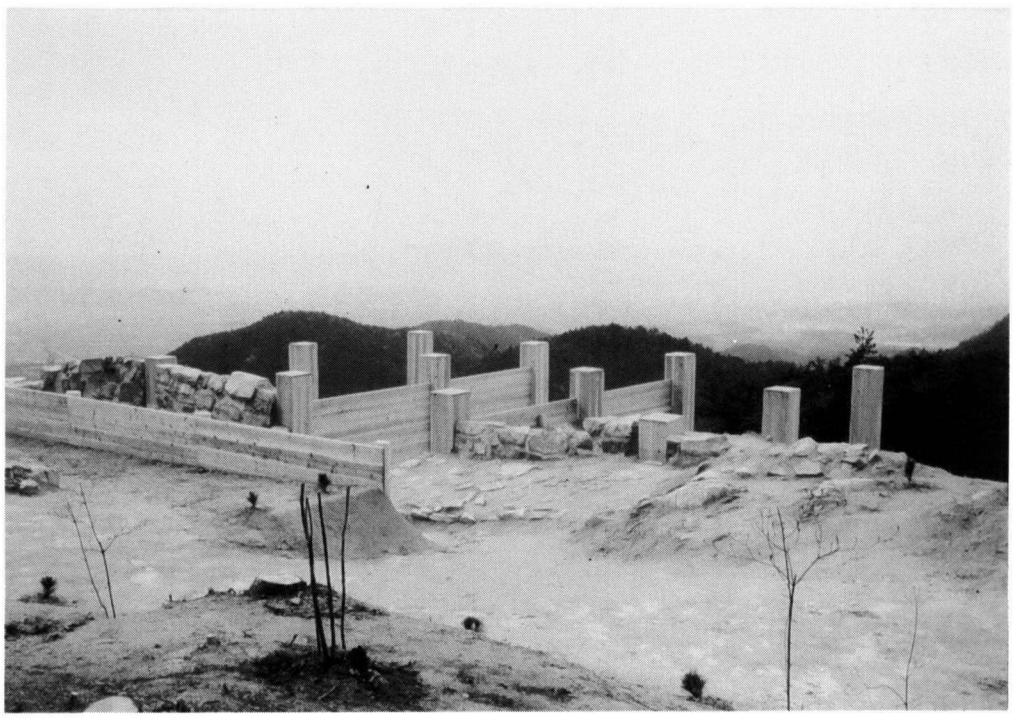
年報８で，コの字状の刳り込みをもつ門礎の考察で，讃岐城山城について，一本松西南所在のもののみに蹴放し加工があるとしたが，向井一雄氏により割れ目であるとのご指摘を受けたので，訂正するとともに氏のご教示に謝意を表したい。

表３　外側列石前面および土塁中の柱穴一覧表　単位　cm

番号	柱　径	柱間距離	番号	柱　径	柱間距離
1	30	※1～2 330	21	38	300
2	38	290	22	32	289
3	47	270	23	35	290
4	30	287	24	42	305
5	22	270	25	43	300
6	敷石のため，径不明	—	26	ピンポールで確認	300
7	掘形　50cm	270	27	54	290
8	21	290	28	57	290
9	22	300	29	51	303
10	22	—	30	50	295
11	54	310	31	42	280
12	54	320	32	ピンポールで確認	—
13	35	310	33	44	320
14	45	267	34	60	312
15		260	35	56	312
16	55	—	36	52	324
17	42	271	37	60	284
18	45	268	38	40	320
19	38	—	39	48	328
20	35	285	40	56	—



第46図版　調査後の西門跡（正面から）



第47図版　調査後の西門跡（城内から）

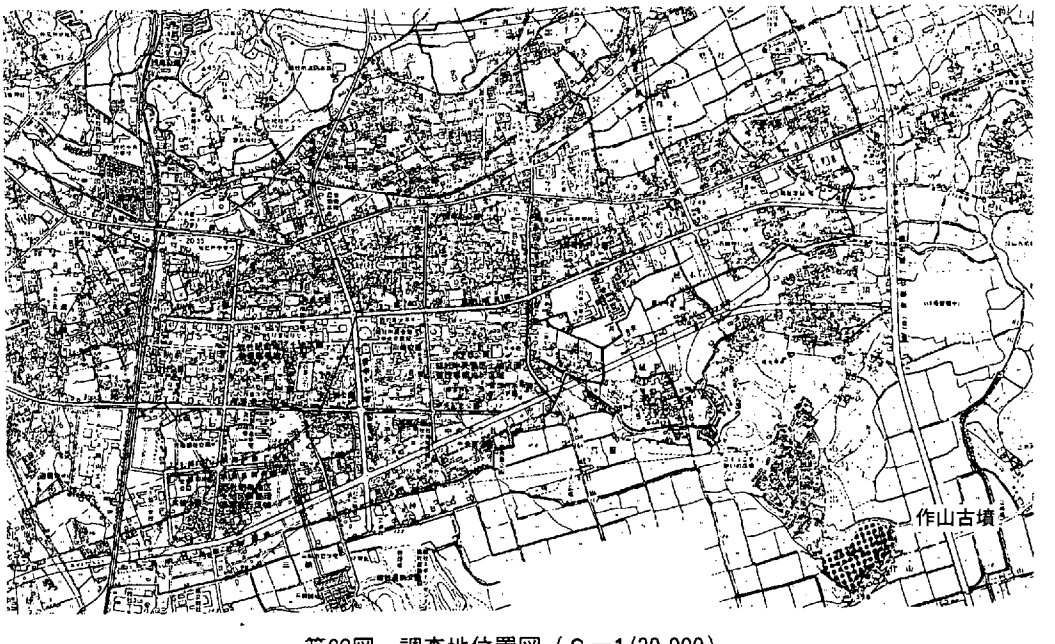
作山古墳の調査について

所 在 地　総社市三須200外

今年度は，後円部南東側に10m間隔で杭打ちを行い，昨年度分と併せて後円部全体にメッシュをかけることができたが，墳丘測量については発掘調査に追われ，また測量に必要な人員も確保できなかったため，ほとんど実施できなかった。しかし，崩落の著しい前方部の一部と，南東側くびれ部付近の一部は，今後の手当てのためにも早急に測量をしておく必要があったため，業者に委託し地形測量を実施した。

また，墳丘内の崩落箇所の位置と状況を正確に把握するために，数日間ではあるが踏査も実施した。その際に，作山古墳に隣接して居住されている小池隆氏から，埴輪列が露出している箇所を御教示いただいた。心ない人に埴輪が抜き取られていくので，枯葉等で覆い隠して保護されていたそうである。この他にも近隣の方から，埴輪を守るためにトタンを被せていたという話も聞かせていただき，地元の方々の作山古墳に対する思いを心強く感じた次第である。

ともあれ，今回御教示いただいた埴輪列の一部を，枯葉等を取り除いて検出した。場所は前方部南側のくびれ部付近で２段目の平坦面外側に位置する。調査した埴輪列の両端にはさらに連続して埴輪が並んでいたが，時間的な制約もあり14本を検出するにとどまった。一部抜き取られてはいたが，各埴輪は約10cmと密な間隔で立て並べられており，相当数の埴輪がこの古墳に使用されていたことが窺われる。なお，この14本の中には，形象埴輪は認められなかった。



第68図　調査地位置図（Ｓ＝1/30,000）

第48図版　埴輪列検出状況（西から）

第49図版　埴輪列検出状況（南西から）

第69図　埴輪出土状況
（S＝1/40）

これらの埴輪は記録保存の後，砂を入れその上に土を盛り，壊れないように埋め戻した。

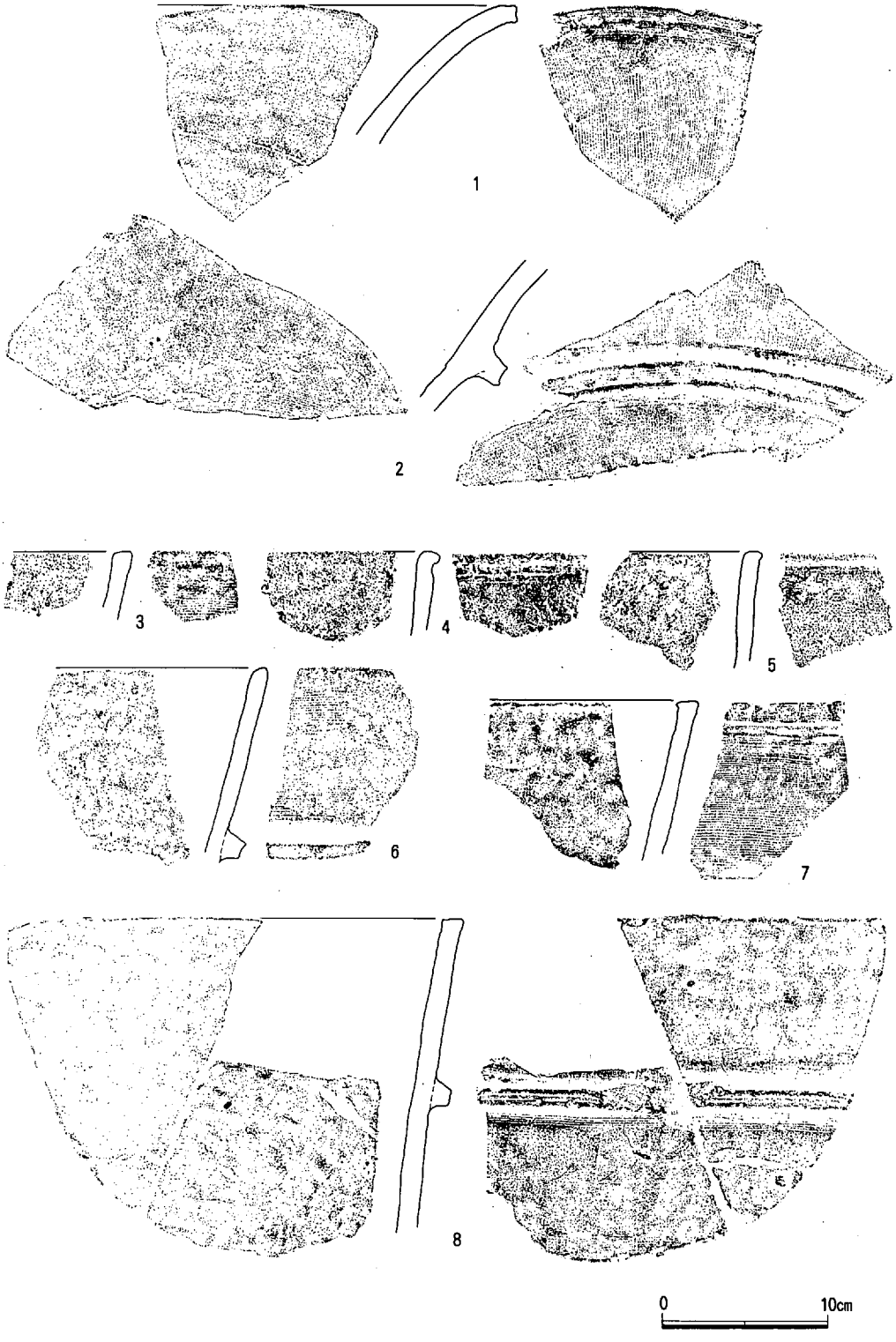
また踏査の際，地元の小池克己氏が作山古墳でこれまでに表面採集されていた埴輪の存在を知り，小池氏のご好意により寄贈していただいた。記して感謝します。埴輪はコンテナ3箱程度あり，実測に耐え得るものを以下に図示し，若干の説明を加える。

1，2は朝顔形埴輪の口縁部で，接合はしないが同一固体片と考えられる。暗灰橙色を呈し，硬質で須恵質に近い。外面には粗いタテハケが認められる。内面は頸部付近にやや粗い横方向のハケメ後，口縁部に細かく浅いハケメを施している。口縁部内面のハケメは上半が横方向，下半が斜め方向で，タガ付近は横方向にナデている。

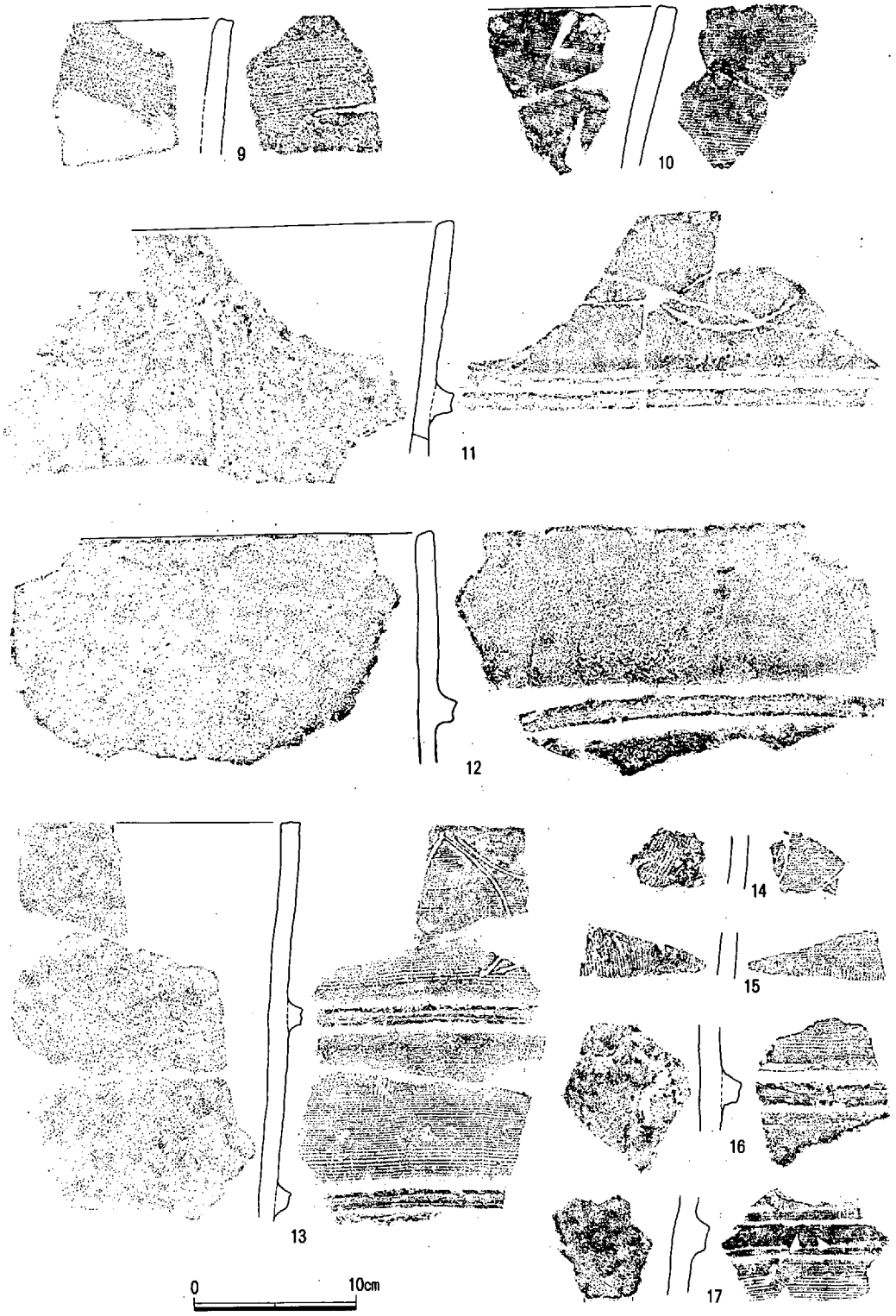
3～13は，円筒埴輪の口縁部を含む破片である。3は外面に粗いヨコハケが認められるが，内面は器面が荒れ調整は不明である。4は，内外面共に調整不明である。5は外面にヨコハケを施しているが，内面は器表が薄く剥落し調整は不明である。6も外面にはやや粗いヨコハケが認められるが，内面の調整は不明である。7は須恵質の埴輪で，灰褐色を呈する。外面に粗いタテハケ後，粗いB種ヨコハケを施し，内面にはナデ調整を行なっている。8の外面には細かなB種ヨコハケが認められ，内面には口縁付近に一部ヨコハケがみられる他は，工具によるナデ調整を行なっている。9は，外面にヨコハケ後線刻文を施す。内面には斜め方向にハケメがみられる。10は外面にタテハケ後ヨコハケを，内面にやや斜めぎみの横方向のハケメを施す。11は外面にB種ヨコハケを施し，「一〇」の線刻文が認められる。内面の調整は不明である。12は，器面が荒れ調整は不明瞭であるが，外面に工具の止め痕跡が認められ，B種ヨコハケを施したものと思われる。13は，外面に粗いタテハケ後B種ヨコハケを施しており，最上段には線刻文がみられる。内面には斜めのハケメを施した後，最上段のタガ付近をナデている。

14～31は，朝顔形埴輪あるいは円筒埴輪の胴部片である。14は外面にヨコハケ後線刻文が施され，内面には斜め方向のハケメがみられる。15は須恵質で，灰褐色を呈する。外面にタテハケ後B種ヨコハケを，内面にはタテハケを施す。16は外面にB種ヨコハケがみられ，内面は工具によるナデ調整を行なっている。17の外面にはヨコハケ，内面にはナデが認められる。18は灰褐色を呈する須恵質のもので，透し孔をもつ。外面には細かいB種ヨコハケを施す。内面にはナデおよびハケメがみられる。19は外面に細かなタテハケ後細かなB種ヨコハケを施し，内面はナデ調整を行なう。透し孔が認められる。20の外面には細かなB種ヨコハケが，内面にはナデがみられる。21は器面が荒れ，調整は不明である。22は，外面タガより上位が粗いB種ヨコハケ，下位が細かいヨコハケで，破片の幅が狭いためB種ヨコハケかどうかは不明である。23は透し孔をもち，外面に粗いヨコハケ後，線刻文を施している。内面の調整は不明である。24は外面にB種ヨコハケ，内面に工具によるナデを施す。25は外面に粗いタテハケ後やや細かいヨコハケを施しているが，内面の調整は不明である。26は透し孔が認められるが，調整は器面が荒れ不明である。27は外面に細かなB種ヨコハケ，内面にナデがみられる。28は色調が他のものと異なり，淡乳白色を呈する。透し孔が認められたが，調整の種類は器面が荒れ確認できなかった。29は硬質で暗灰橙色を呈し，外面に粗いB種ヨコハケ，内面に粗いタテハケ後ヨコハケを施す。30の外面には粗いヨコハケが認められるが，内面の調整は不明である。31は外面に細かなB種ヨコハケがみられ，内面にはナデを施している。

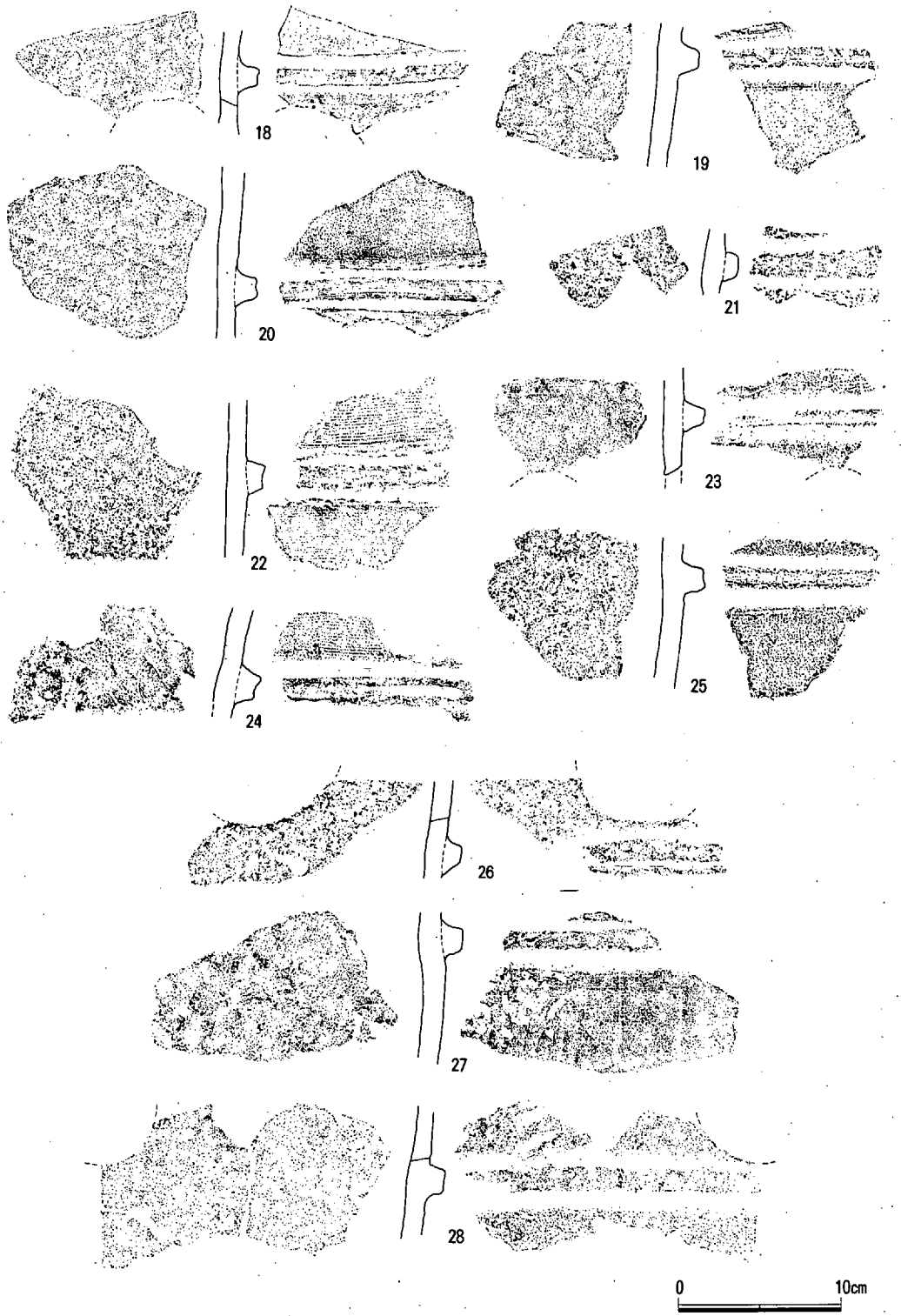
32～39は，朝顔形埴輪あるいは円筒埴輪の基部を含む破片である。32は器面が荒れ調整は不明瞭であるが，外面最下段にはタテハケがみられ，内面にはナデ調整が確認された。33も調整は不明瞭であるが，剥落したタガの下に粗いタテハケが認められる。また，外面最下段にはナ



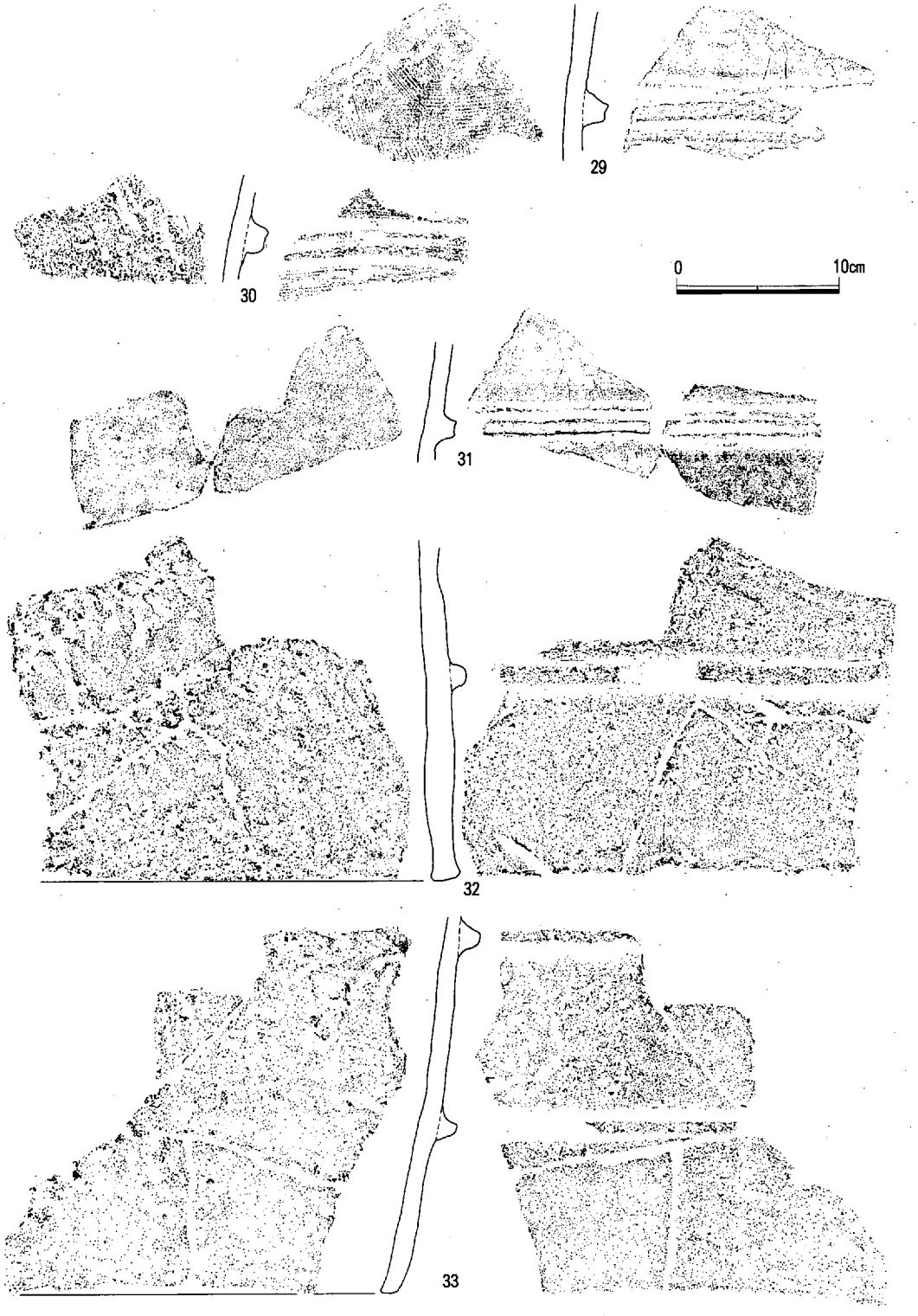
第70図　埴輪実測図１（Ｓ＝1/4）



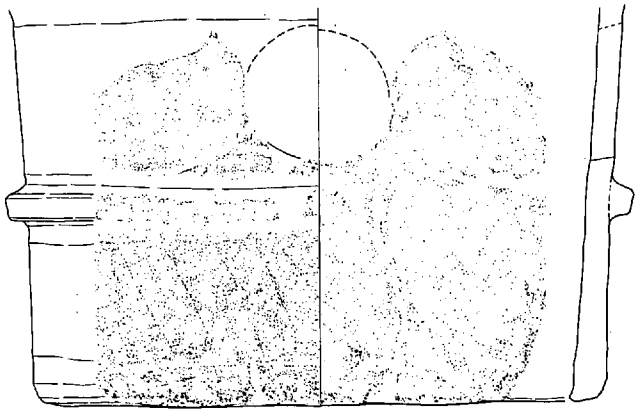
第71図　埴輪実測図２（Ｓ＝1/4）



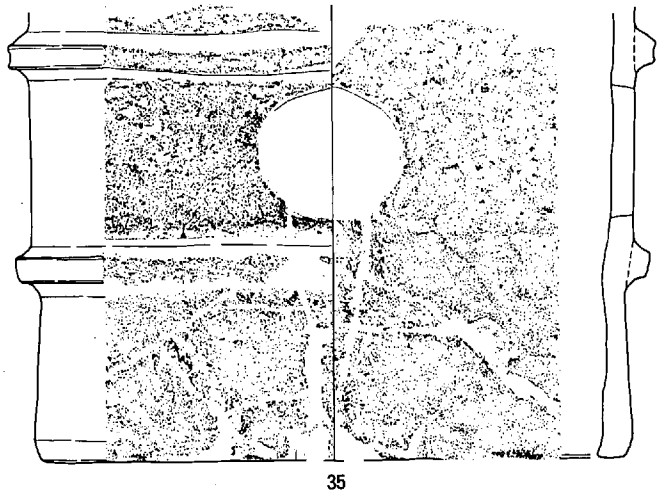
第72図　埴輪実測図３（Ｓ＝1/4）



第73図　埴輪実測図４（Ｓ＝1/4）



34

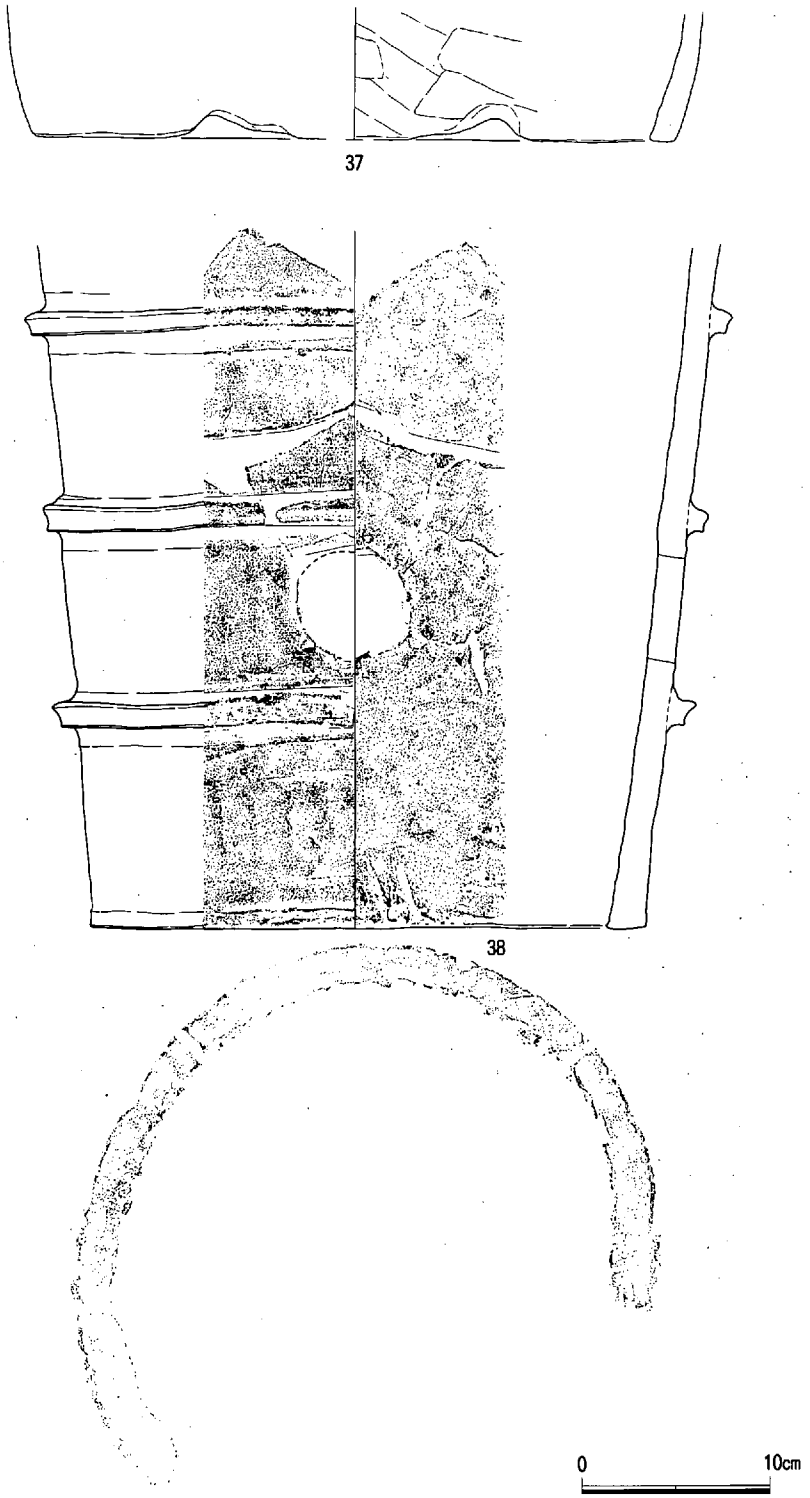


35

36

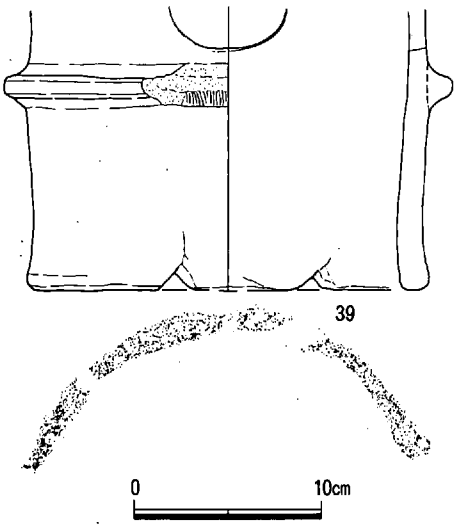
0　10cm

第74図　埴輪実測図５（Ｓ＝1/4）



第75図　埴輪実測図６（Ｓ＝1/4）

デによる縦方向の工具痕跡が僅かに確認できる。内面の調整は不明である。34は基部が約1/2強残存しており，2段目に相対する1対の透し孔が穿たれている。外面最下段は工具による斜め方向のナデ後，底部付近に工具によるヨコナデを施している。2段目には細かいB種ヨコハケがみられる。内面は工具による斜め方向のナデが認められる。35は基部が約1/2残存している。2段目には相対する一対の円形の透し孔が認められる。全体に器面が荒れ調整は不明瞭であるが，外面最下段に工具によるナデとおぼしき痕跡があり，2段目には，B種ヨコハケの止め痕跡と思われる工具痕が僅かに認められる。内面は工具によるナデと思われる。36は基部2/3強が残存する。透し孔は2段目に円形のものが相対して穿たれている。外面最下段は粗いタテハケを施し，底部付近にはナデが認められる。2段目はタテハケ後二次調整にヨコハケを施している。内面は工具によるナデがみられる。37は基部が約1/2強残存する。全体に器表が荒れており，外面の調整は不明である。内面は工具によるナデを施す。38は基部約2/3弱残存しており，4段目まで復元できた。やや楕円形を呈し，2段目には円形の透し孔が穿たれている。外面は一次調整のタテハケ後最下段に幅の狭い工具によるヨコハケを施す。2段目は二次調整にB種ヨコハケを，3段目以上はハケメが浅く，欠損部分が多いため，B種かC種か定かでないがヨコハケを施している。内面は最下段付近が工具によるナデ，2段目付近がタテハケ，3段目以上が斜め方向にハケメを施している。39は基部が約1/3強残存するが，他のものと比し径が異常に小さい。内外面共に器面が荒れ調整は不明であるが，タガの剥落箇所に一次調整の粗いタテハケが認められる。



第76図　埴輪実測図7（1/4）

なお，これらの埴輪の色調は，特に明記したもの以外は橙褐色を呈する。また図示し得なかったものも含め，黒斑を有するものは皆無である。

以上，図示した埴輪をみてきたが，概ね川西編年[註]のⅣ期に相当するものと考えられる。また，これらの中に，形象埴輪は1点も含まれておらず，今回検出した埴輪列と併せ，形象埴輪がみられないことが注意される。（平井）

註　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号　1978・1979

4．発掘調査の報告

舟山遺跡・舟山古墳

図　目　次

第77図　調査地周辺古墳群分布図（S=1/5,000）…… 118
第78図　調査範囲及び遺構配置図（S=1/1,000）…… 120
第79図　遺構配置図（S=1/200）…… 121
第80図　1号住居址平・断面図（S=1/50）…… 122
第81図　出土遺物1（S=1/4）…… 122
第82図　出土遺物2（S=1/1）…… 122
第83図　掘立柱建物平・断面図（S=1/50）…… 123
第84図　溝断面図（S=1/40）…… 123
第85図　周溝断面図（S=1/40）…… 124
第86図　出土遺物3（S=1/100, 1/4）…… 124

図版目次

第50図版　舟山3号墳調査前（北から）…… 126
第51図版　舟山3号墳調査後（北から）…… 126
第52図版　溝断面 …… 127
第53図版　掘立柱建物と溝（南から）…… 127

1．調査の経緯

(1) 調査にいたる経過

総社市は，岡山市・倉敷市など50万都市に隣接する田園都市として，長く自然環境と文化財が保存されてきた。しかし，市の発展と生活の変化により，企業の誘致，住宅地の造成，道路整備と少しづつではあるがその様相を変えてきた。

総社市西部では昭和61年に，久代長砂地区の丘陵部を含む25ヘクタールが約470戸の住宅用地などに造成された。また，昭和61～62年には久代藤原地区の丘陵地約80ヘクタールが工業団地として造成された。平成７～８年には工業団地の拡張区が隣接する10ヘクタールに造成された。この他にも，近隣の丘陵地では土砂採取事業は現在でも進行している。

かつて本市は古代吉備の中心地として栄え，多くの文化財が埋蔵されている。このため文化財の保護と開発との調整が大きな課題となった。

現在の日本は，少子化と高齢化が進んでいる。高齢者の福祉，保健，医療などを整備した介護保険制度が平成12年４月１日から開始される。社会福祉のための施設の拡充が，近年急速に進められた。そうした施設建設地の候補として，先の久代長砂地区が選定された。選定理由として，市街地から車で約10分と近いこと，丘陵地で景観にもすぐれていることなどが挙げられた。この地は，過去に土砂採取事業が進められていた丘陵で，そのため丘陵の約2/3が平地となっていた。文化財では，昭和50年に刊行された岡山県遺跡地図で舟山古墳群４基が掲載されている。しかし，実際の地図上では３基の古墳しか示されていない。また，住宅地造成時点においても，丘陵の土砂採取事業が進んでおり，古墳は現地で１基の古墳しか確認できなかった。

(2) 調査の体制

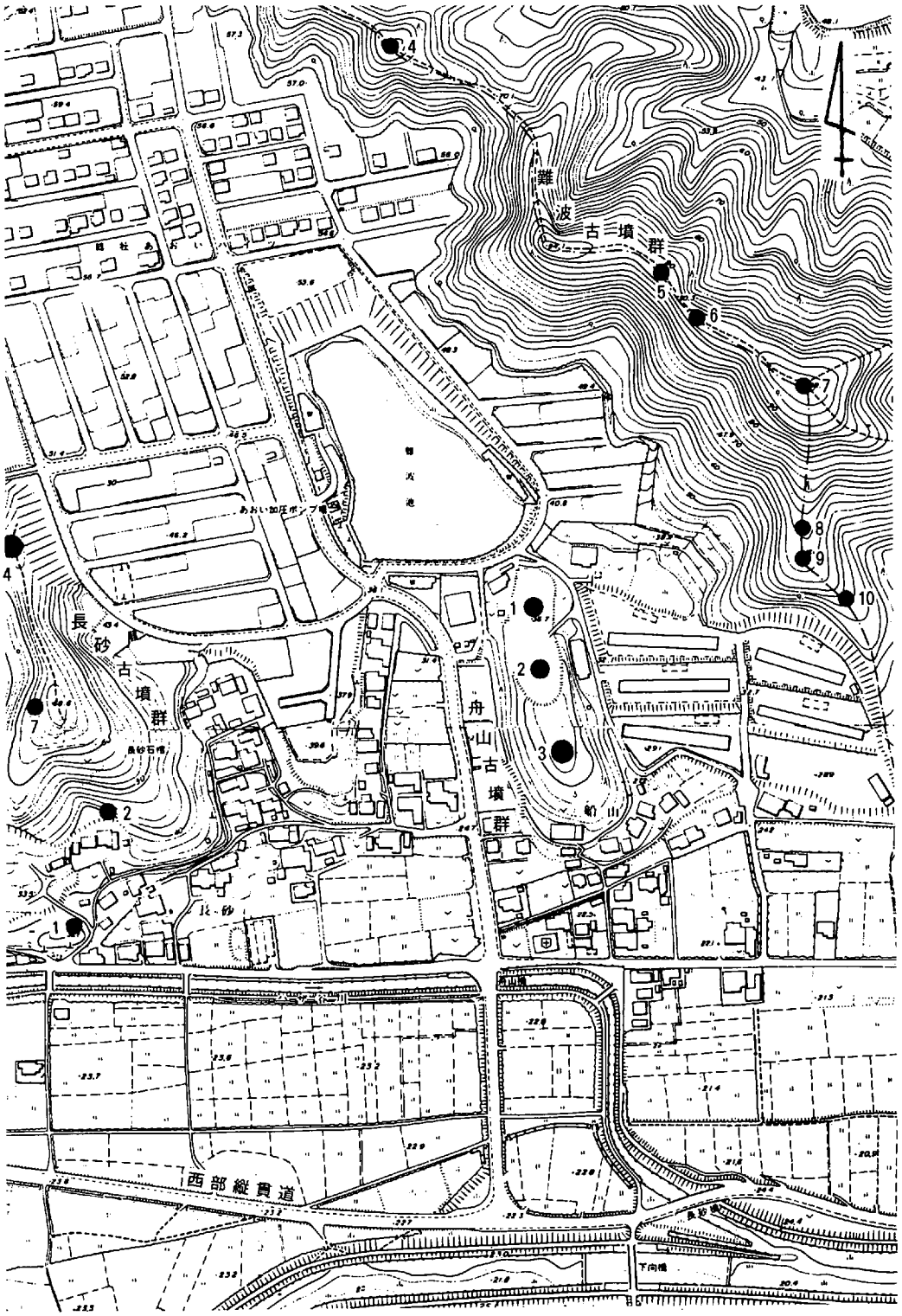
発掘調査は，総社市教育委員会が実施した。平成10年７月24日から27日まで古墳部分を調査し，集落部分を８月３日まで実施した。

なお調査にあたっては，社会福祉法人　雪舟福祉会や工事関係者の方々に各種の便宜をはかっていただいた。記して厚く謝意を表します。

調査組織

文化財室

室　長	加藤　信二（調整担当）	主　事	前角　和夫（調査担当）
主　査	谷山　雅彦（調査担当）	主　事	笹田　健一（庶務担当）



第77図　調査地周辺古墳群位置図（S＝1/5,000）

2．調査の概要

(1) 調査の経過

計画では古墳の墳丘部分は用地外であったが，古墳の周溝部分が工事対象部分に含まれる可能性が高いため，事業者と協議し古墳範囲の確認調査を実施することとした。

調査の結果，古墳の周溝部分が確認されたため記録保存のための発掘調査を実施した。調査範囲は工事により破壊される周溝の部分のみであるため，工事時に業者の協力で重機を利用して調査を行った。丘陵の大部分は過去に削平されていたが，古墳周辺で若干の丘陵頂部が残存していたので伐根時に立会いを実施した。この時，丘陵頂部近くの西斜面で遺物の散布が認められたため，調査範囲を拡張し継続して調査を行った。

(2) 位置と環境

舟山古墳群は，総社市久代5118番地ほかに所在する。総社市西部で最も広い平野部は新本川両岸で北方は山間部となる。船山は標高381.1ｍの正木山から南東方向に派生する低丘陵の一つであり，難波池の南に独立したかたちで存在する。本来は，北方に位置する標高90ｍ級の主尾根から南に舌状に派生する小尾根である。船山の主尾根上には難波古墳群が所在する。また，谷を挟んだ西の丘陵上には長砂古墳群が所在する。２号墳は，長砂の石棺とよばれている竜山石産の刳抜式石棺を主体とする横口式石棺である。古墳は方墳で一辺約９ｍを測る。８・10号墳は住宅団地造成時に発掘調査を実施し，出土した遺物などから５世紀前半の築造と考えられた。両古墳共に箱式石棺を主体部とし，10号墳では土器蓋墓が箱式石棺の東約２ｍで検出された。４号墳は他の古墳よりやや規模が大きく径22ｍの円墳で，主体部は竪穴式石室と考えられ，設計変更により現状保存が図られた。

舟山古墳群は４基の古墳からなる古墳群と考えられるが，昭和55年以降においては今回調査を行った，舟山３号墳しか確認できなかった。

(3) 舟山遺跡

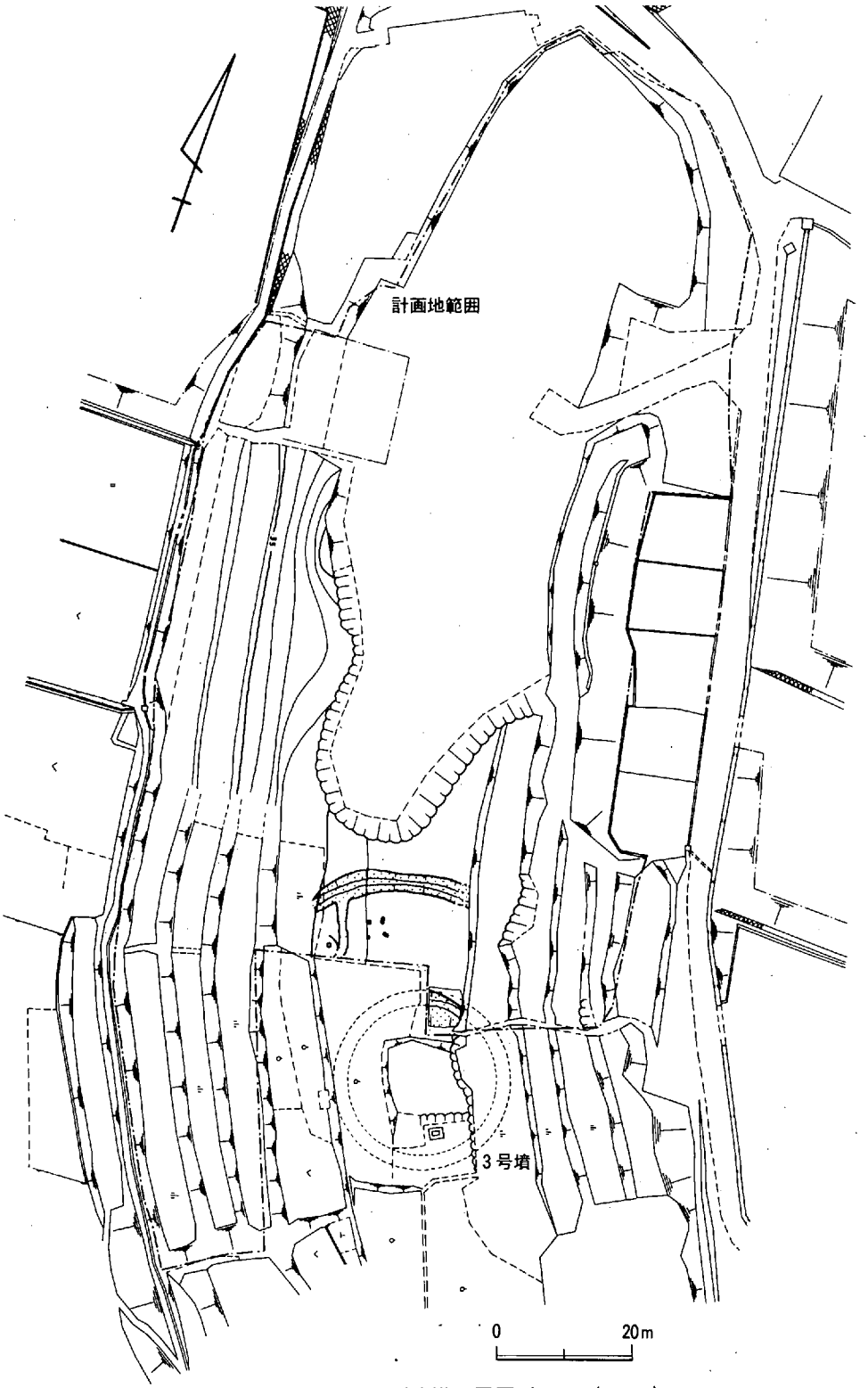
溝を除く遺構は全て丘陵西斜面で検出された。

１．住居址

円形を呈する竪穴住居址である。遺物の散布が最も顕著であった箇所で，住居址の一部が用地際で検出された。山側に壁体溝の一部と柱穴１が認められた。

出土遺物

土器片とサヌカイト片が，住居址の埋土上層から出土している。床面からは出土していない。土器は細片が主である。１は底部で内面は丁寧にナデで調整されている。外面は底部近くに横ナデが認められるが上部は調整不明である。



第78図　計画範囲及び遺構配置図（S＝1/1,000）

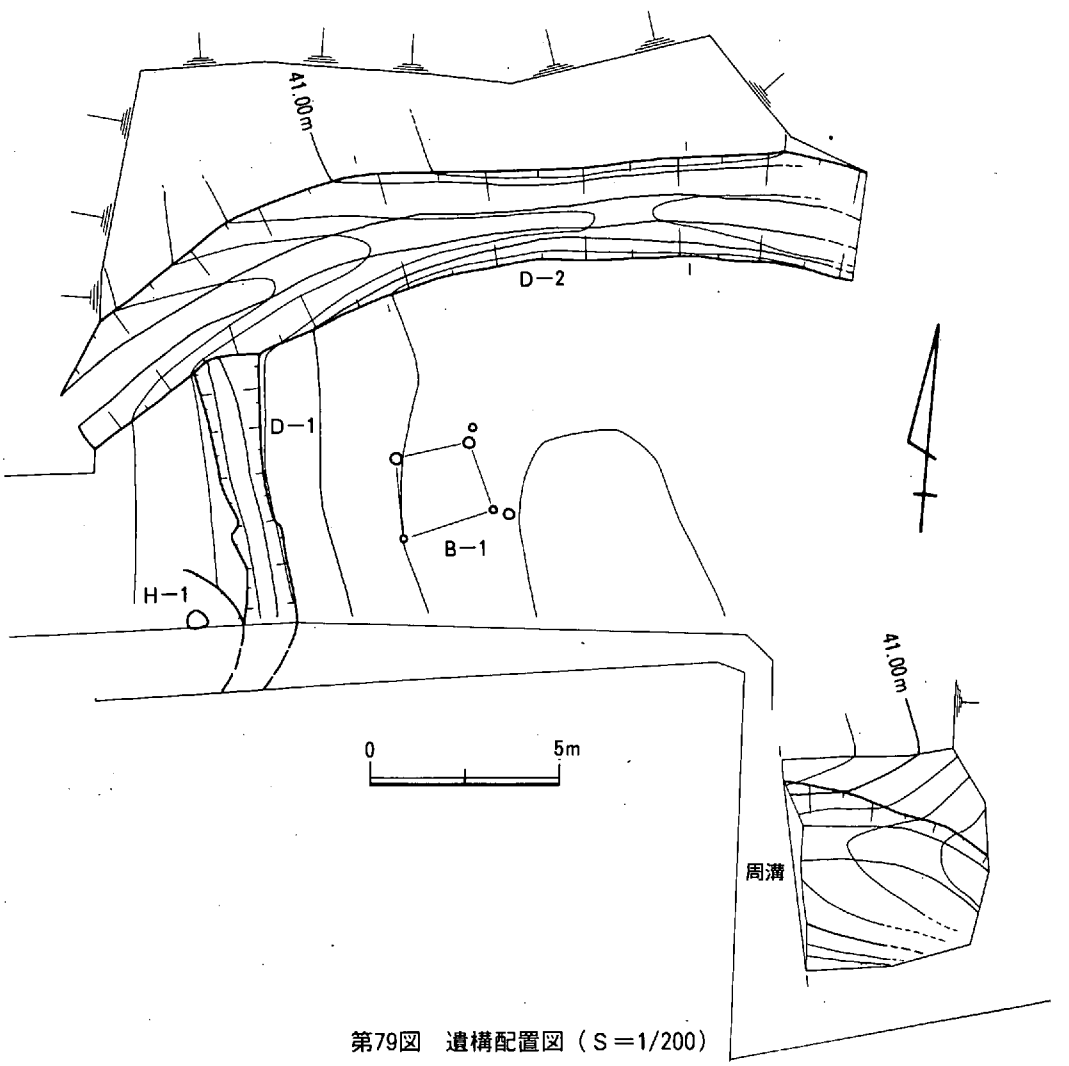
サヌカイト片は薄片が主であり，石器及び未製品は２点である。１は石錐で長さ25cm，幅1.4cm，厚さ0.3cm，を測る。２は石鏃の未製品で，基部は未調整で自然面が残る。長さ4.2cm，幅1.9cm，厚さ0.5cm，を測る。

２．掘立柱建物

尾根頂部からやや下がった部分に位置する。１×１間の掘立柱建物である。柱穴からは遺物は出土していないが，検出時に石器３が出土している。

３．溝

溝は調査区北端に位置する。これより北では遺構は検出されなかった。しかし，かって尾根がさらに北に延びていたので，この部分については不明である。規模は幅2.6～3.5m，長さ22



第79図　遺構配置図（S＝1/200）

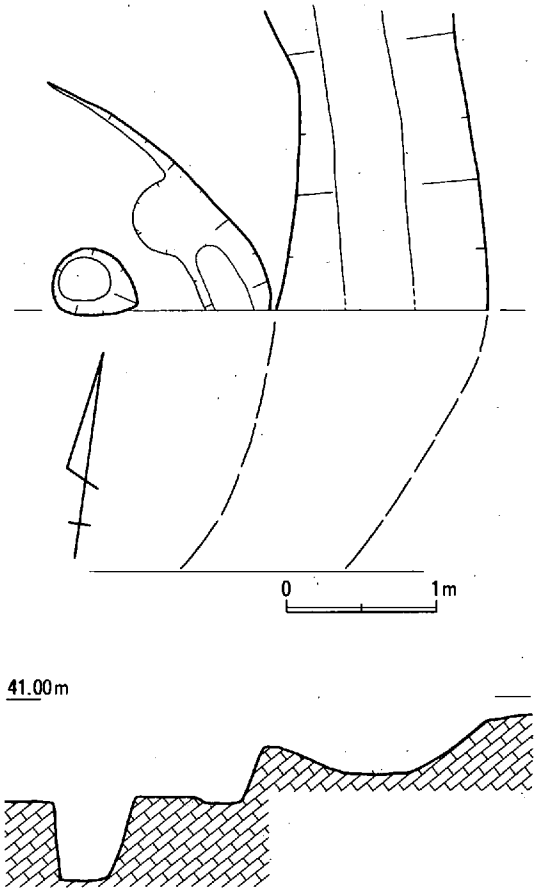
m，を測る。尾根を切断するように掘削され，断面は幅の広いU字形を呈する。

遺物は少ないが弥生時代後期前半と考えられる土器の底部がある。

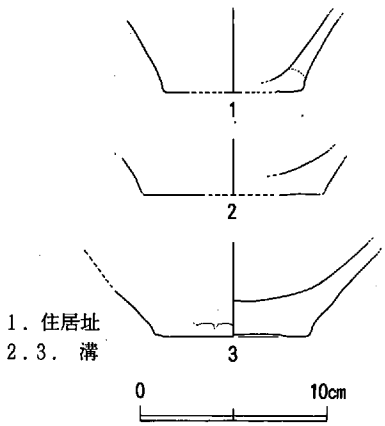
(4) 舟山3号墳

墳丘と周溝

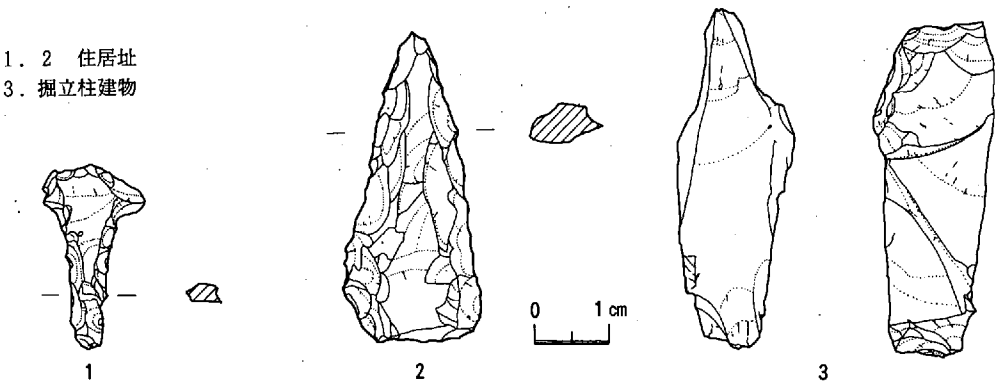
本墳は，船山丘陵の最も高所で，最南端に位置する古墳である。古墳の南は墳丘を削って平坦部を造成し，祠が祭られている。



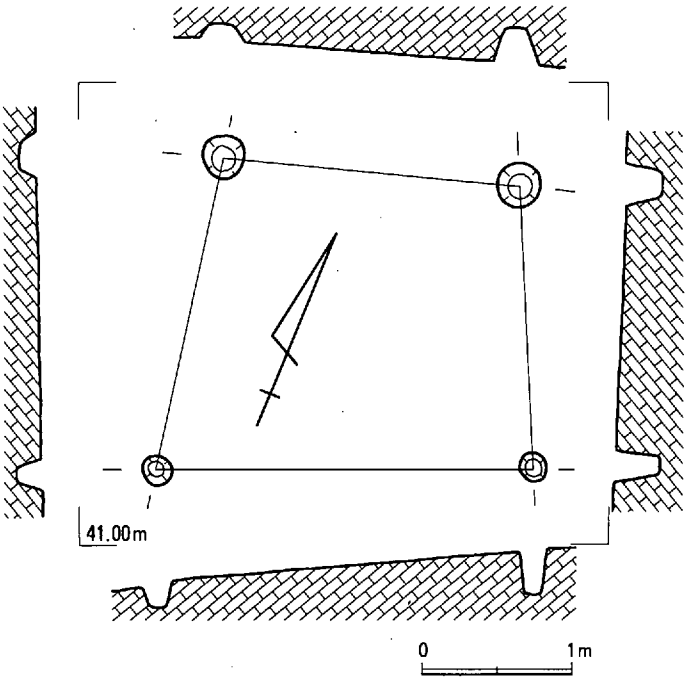
第80図　1号住居址　平・断面図（S＝1/50）



第81図　出土遺物1（S＝1/4）



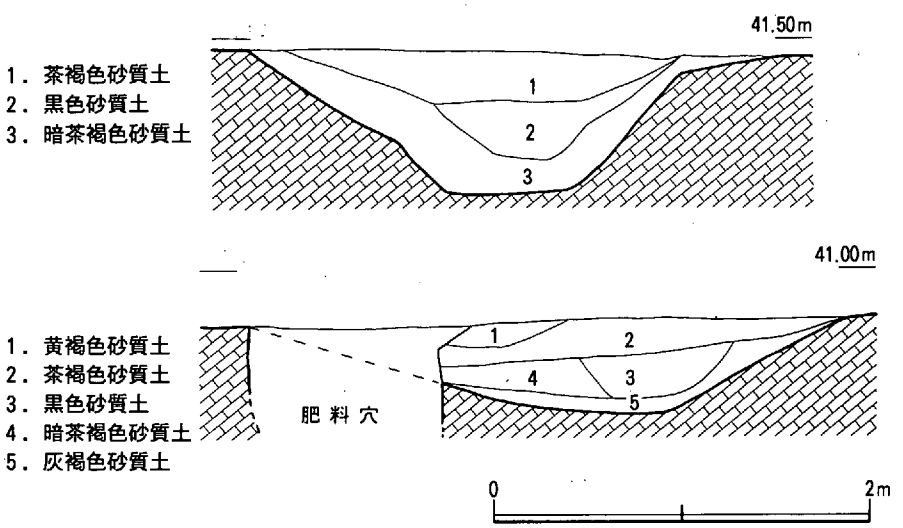
第82図　出土遺物2（S＝1/1）



第83図　掘立柱建物　平・断面図（S＝1/50）

西・北共に果樹園で現状では周溝などの痕跡は認められない。東は急斜面を畑地とするため段状に大きく地下げしている。

墳丘の大半は用地外であるので，調査は行っていない。墳丘の頂部は僅かに凹部があり，盗掘を受けている可能性もあるが，石材などが認められず内部主体は不明である。残存する墳丘の規模は，東西13m，南北16mで高さは約１mあり，周溝底からは約1.8mを測る。これらの



第84図　溝　断面図（S＝1/40）

状況から横穴式石室を主体部とする可能性は低いと考えられる。

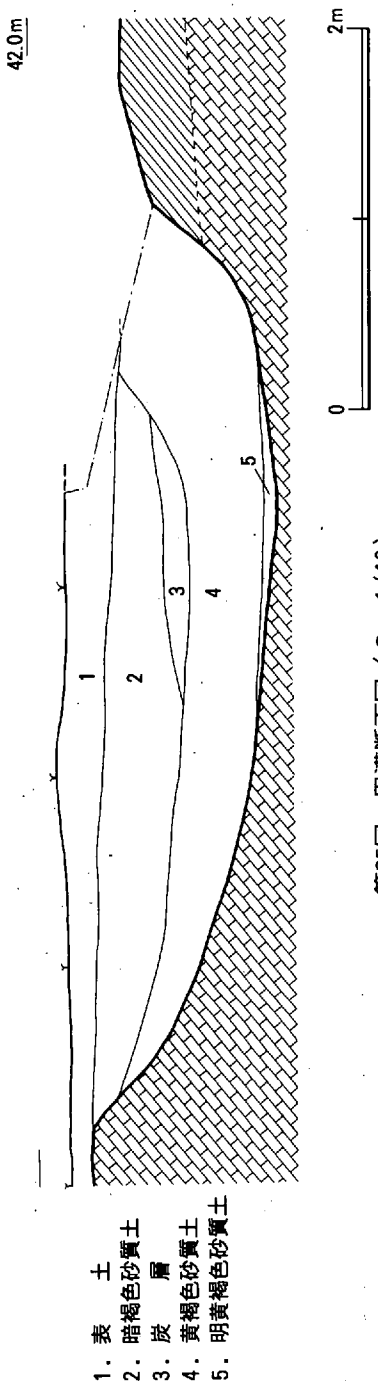
周溝は幅約4.7m，深さ0.8mを測る。尾根筋では，地山を幅広に掘削している。周溝の底から埴輪片が出土している。

調査は北東部分の周溝のみであるため，正確な規模ではないが，本墳は直径約22mの円墳と考えられる。

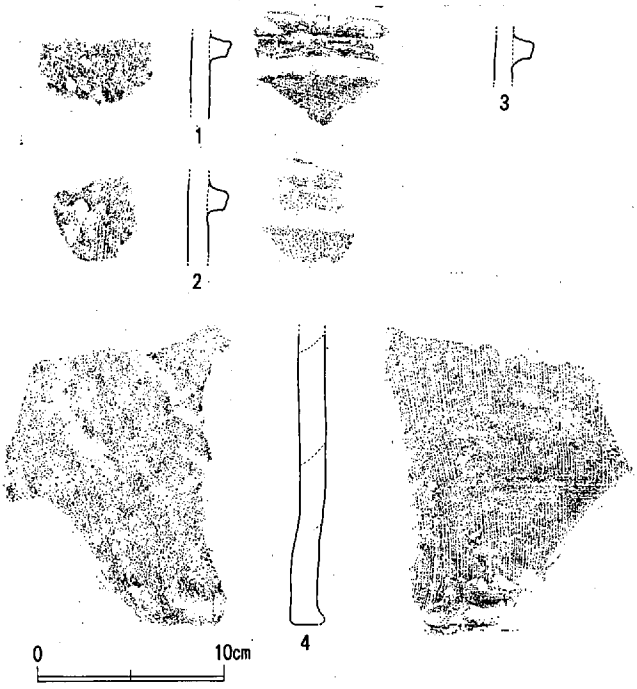
出土遺物

出土した遺物は全て埴輪片で，主に周溝底から出土した。1・2は淡泊褐色を呈するタガの部分である。外面は第一次調整の縦刷毛目だけが認められ，内面も縦方向の刷毛目が認められる。3もタガの部分だが剥離が進んでいて調整は不明。いずれも突出度が高く断面が長方形に近い。

4は基底部で外面は縦刷毛目で調整される。内部は指頭によるナデで仕上げられているが縦刷毛目も認められる部分がある。いずれも軟質である。



第85図　周溝断面図（S＝1/40）



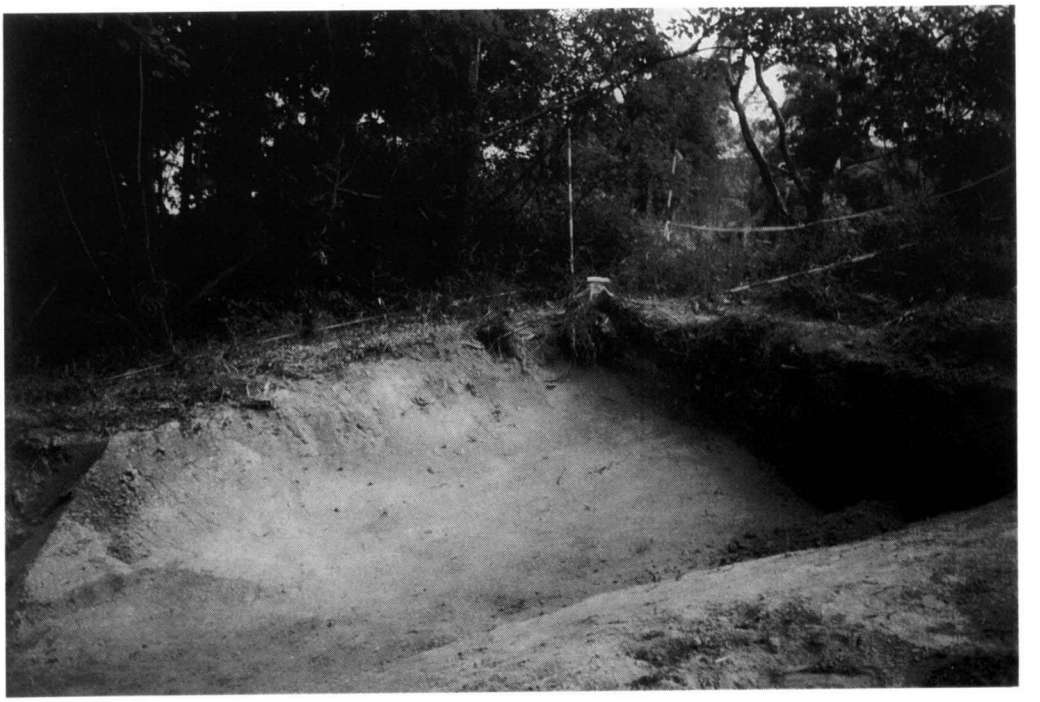
第86図　出土遺物3（S＝1/4）

3．まとめにかえて

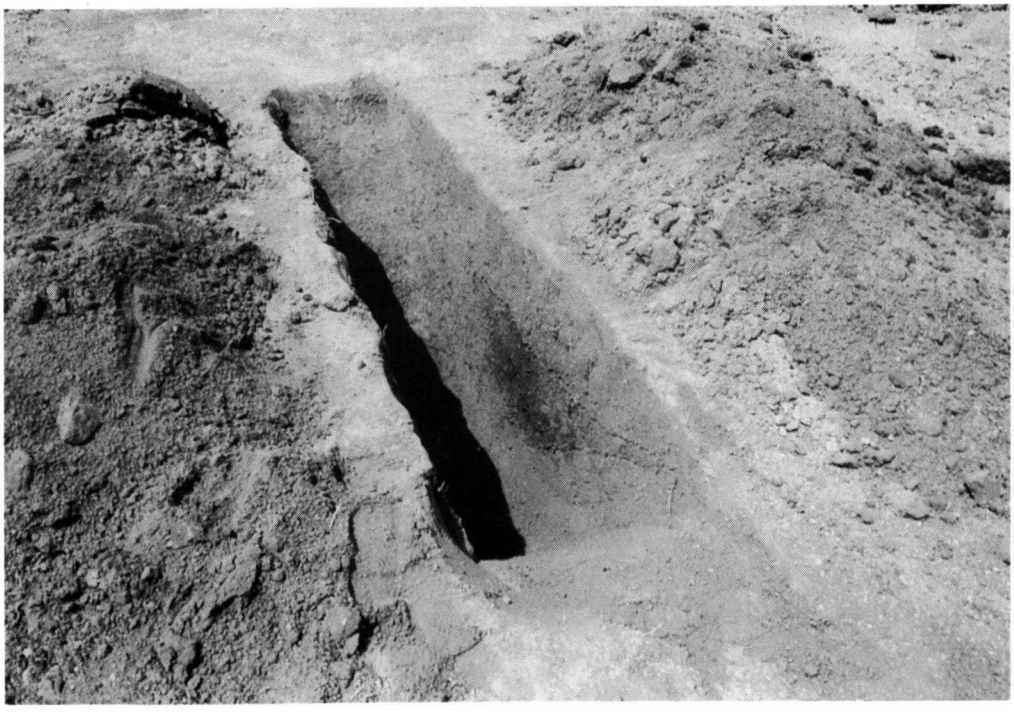
舟山遺跡は集落を画する溝と住居址，掘立建物が明らかになった。しかし，出土した遺物が少なく，時期は明確にできない。出土した土器で形の判明するものは底部しかなく，これから遺構はおおむね弥生時代後期前半と考えられた。集落は調査を実施した南部分にも広がっているものと考えられる。

舟山3号墳は，周溝のみの調査であったので，主体部などは不明である。出土した遺物は埴輪片のみであるが，その特徴から6世紀の古墳である可能性が考えられる。6世紀の中でも横穴式石室導入前の古墳と思われる。

第50図版　舟山３号墳調査前（北から）



第51図版　舟山３号墳調査後（北から）



第52図版　溝断面

第53図版　掘立柱建物と溝（南から）

イ キ 山 遺 跡

図　目　次

第87図　調査地周辺図（S＝1/5,000）…… 132
第88図　遺構配置図（S＝1/500）…… 133
第89図　溝及び南低位部断面（S＝1/40）…… 134
第90図　1号住居址趾平・断面図（S＝1/40）…… 134
第91図　2号住居址平・断面図（S＝1/40）…… 135
第92図　出土遺物（S＝1/4・1/2）…… 135

図　版　目　次

第54図版　昭和40年頃空撮…… 135
第55図版　調査区全景…… 136
第56図版　南の段（低位部）…… 136
第57図版　河川（大沼川）…… 137
第58図版　2号住居址（南から）…… 137

1．調査の経緯

(1) 調査にいたる経過

総社市では平成8年から第3次総社市総合計画を策定し，事業を進めている。そこでは将来都市像を「吉備路にひらく人とみどりの交流都市」と定め，将来都市像を実現するために6つの基本施策を定めている。その中に「水とみどりの心安ぐ快適環境のまちづくり」がある。下水道はこの施策の中にあり，市民の生活水準の向上等に伴ってその整備要望は年々高まっている。公共下水道と共に農村地域では，農業集落排水事業を行い，その他地域では合併処理浄化槽の設置を進めている。

長良地区においても農業集落排水事業を実施している。長良処理区には5つの集落で，143戸ある。今回の事業は，生活様式や農業生産様式の変化と農村を取り巻く状況の変化により，農業生産環境と農村生活環境に生じた問題を改善するため，汚水等を処理する施設を設置することとなった。

汚水処理場の計画地は，北から流れる砂川と西から流れる前川に挟まれる地域である。特に計画地は砂川に近く，遺跡の存在は知られていなかった。周辺では国道180号線北と長良山に接する部分で集落が想定されている。この地の古い記録では，服部郷図に記載の範囲であり，耕作地となっていることが分かる。その後，昭和38～42年にほ場整備が実施され，現在に至る。このため，旧地形が再三にわたり変貌していることから，埋蔵文化財の事前の試掘調査を実施することとした。その結果，建物が建設される部分は地形が下がり低地部分となるが，管を敷設する部分で微高地上の遺構を検出した。

(2) 調査の体制

発掘調査は，総社市教育委員会が実施した。調査は平成11年2月8日から2月12日まで実施した。

調査にあたっては，工事関係者の方々に各種の便宜をはかっていただいた。記して厚く謝意を表します。

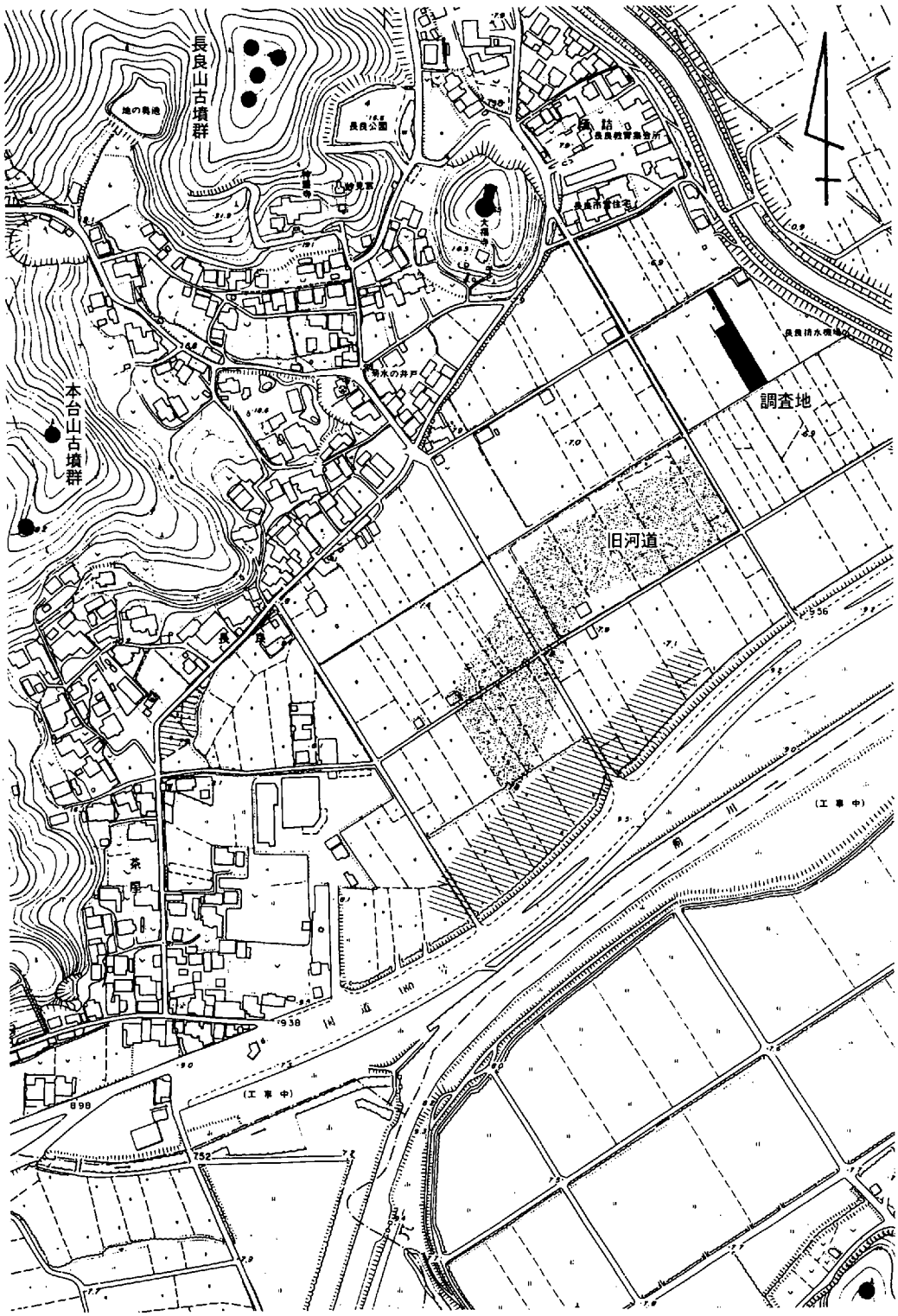
調査組織

文化財室

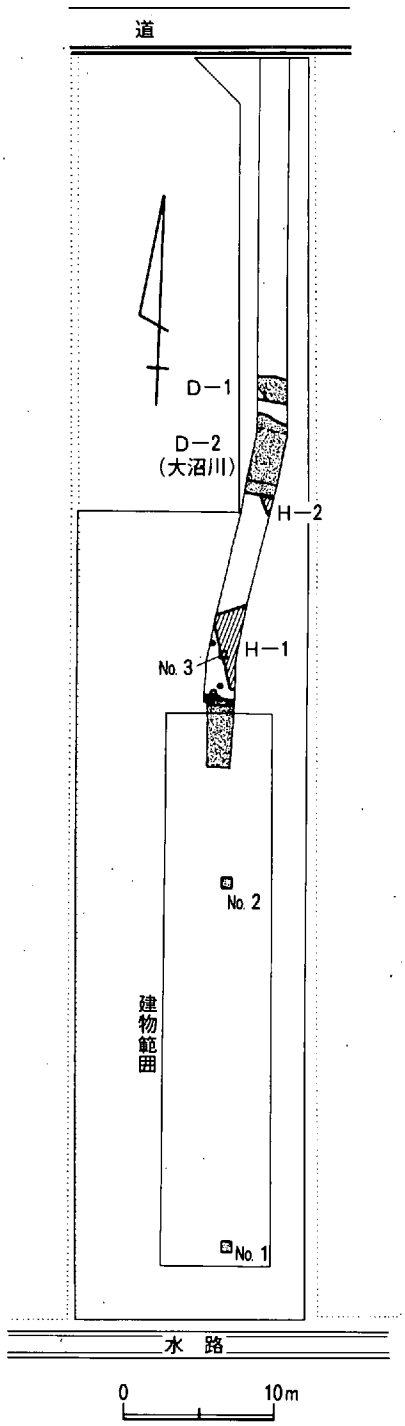
室　長　　加藤　信二（調整担当）

主　査　　谷山　雅彦（調査担当）　　主　事　　笹田　健一（庶務担当）

作業員　　前田　繁男　　前田　豊　　守谷　茂雄



第87図　調査地周辺図（S＝1/5,000）



第88図　遺構配置図（S＝1/500）

2．調査の概要

(1) 調査の経過

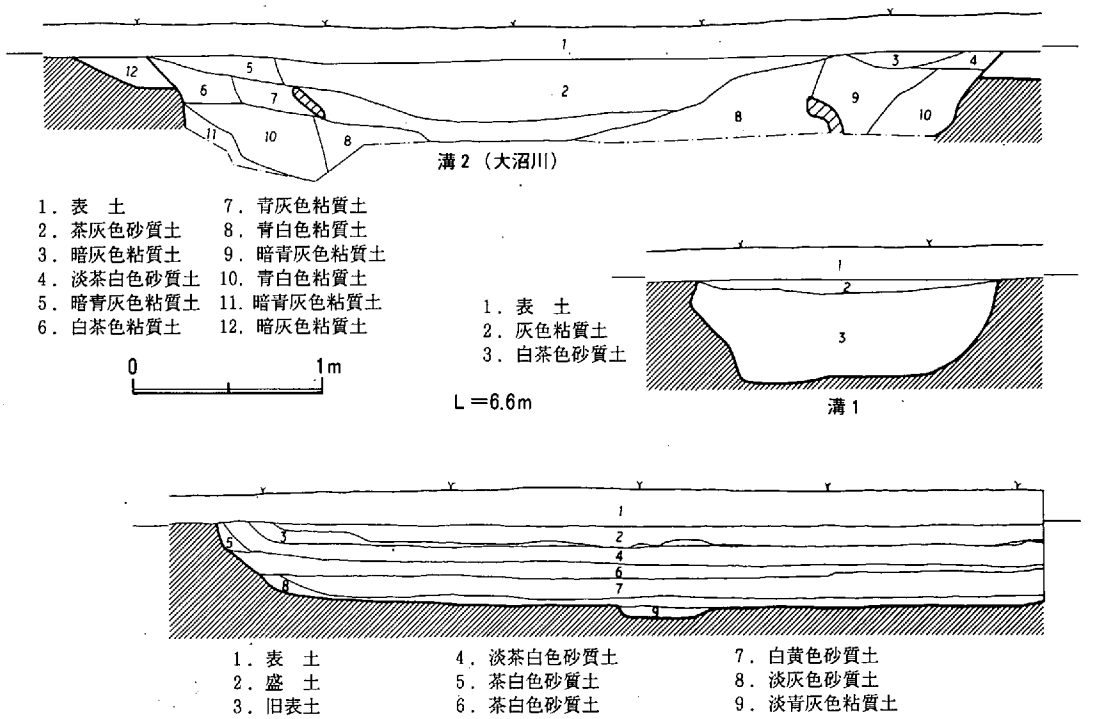
調査の微高地が確認された管埋設部分を対象として実施することとした。このため北の既存道に接する部分から南の建物部分に向けて表土を除去した。表土除去の段階で調査区中央付近で溝２本が確認され，それを境に北部分は土層が黄白色粘質土となり，遺構が存在しないことが判明した。この溝の１本はほ場整備以前の河川と考えられた。調査区はかって少なくとも３枚の別の水田であったものが，ほ場整備時点に１枚の水田となったと思われる。調査は遺構の存在する中央南部分で実施した。

(2) 位置と環境

イキ山遺跡は，総社市長良354番地に所在する。イキ山遺跡の西には独立丘陵の長良山があり，北で砂川が分岐し砂川は東へ，西には山陰川が南に流れる。この丘陵の西斜面では縄文早期の土器が確認されている。また，丘陵の尾根上では長良山古墳群９基，本台山古墳群８基，と散布地２か所が周知されている。周辺の水田部分では，丘陵西部に県立大学が建設された際に縄文時代から中世にかけての遺跡が明らかになった。また，丘陵の南は西から東へ前川が流れ，河川の改修に伴い遺跡の存在が明らかになった。イキ山遺跡の所在する地域は，砂川と前川，長良山に囲まれた部分で最も集落が集中する。過去においても同様集落遺跡を想定することが容易な地域と考えられる。しかし，「備中国賀夜郡服部郷図」が描かれた時期にはこの周辺は田畑となっていた。その後，ほ場整備が実施されるまでこの地は，前川の氾濫により条里は乱れていた。

(3) イキ山遺跡

遺跡の存在する微高地は南部分が大きく下がりこの段は用地の南端までつづく。河川の氾濫により削平された

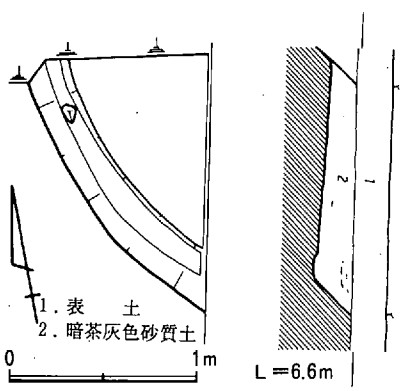


第89図　溝及び南低位部断面（S＝1/40）

ものを修正整備したものと考えられる。本来の遺跡の広がりは南部分にもあったと思われる。溝1は断面が不正形で山砂で埋まっており，短期間の間に埋まった状態であった。溝2は調査中の聴き取りからほ場整備前の河川で大沼川と呼ばれていた川と判明した。

1．1号住居址

円形を呈する竪穴住居址である。住居址の北は溝2により削平されている。このため今回の調査では壁体溝部分しか判明していない。遺物も自然石1点しか認められなかった。時期は弥生時代と思われる。



第90図　2号住居址平・断面図（S＝1/40）

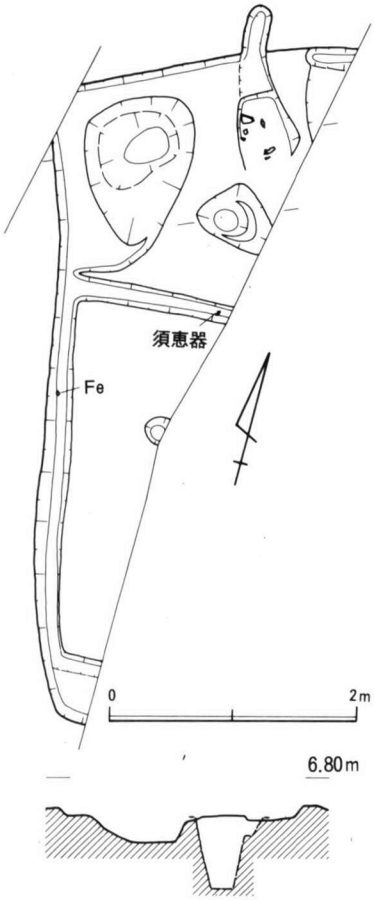
2．2号住居址

方形を呈する竪穴住居址である。試掘調査で検出した住居址で北壁にカマドが付くが残りが悪い。柱穴は4本柱と考えられ，カマド西で1本確認された。

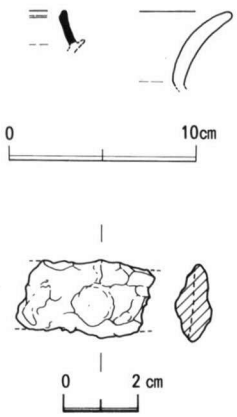
遺物は壁体溝から須恵器片と鉄片が出土している。またカマド内から土師器の甕の破片が集中して出土した。時期は6世紀前半と考えられる。

3．まとめにかえて

イキ山遺跡周辺においては，現在認められる河川に近いことなどから遺跡の存在は可能性が低いように思えた。しかし，試掘調査において遺跡の存在が判明し，遺跡が存在した弥生時代から古墳時代にかけては安定した時期があったことが明らかになった。今回の調査は事業の性格から狭い調査範囲であったが，従来から不明であったこの地域の土地利用の一端が明らかになった。



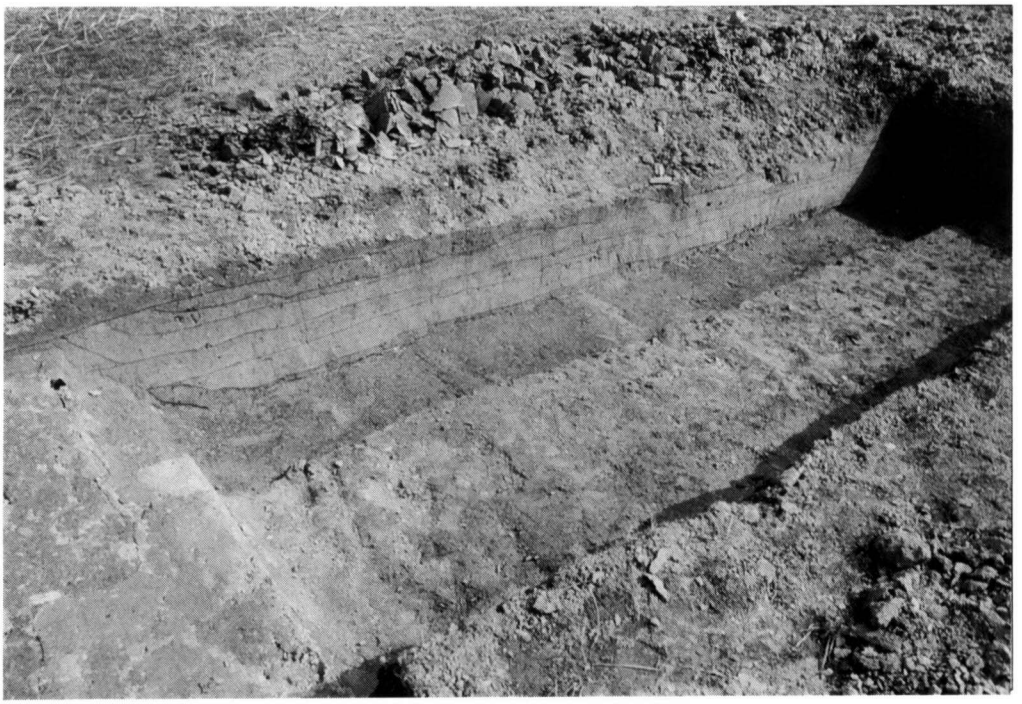
第91図　2号住居址　平・断面図（S＝1/60）



第92図　出土遺物（S＝1/4，1/2）

第54図版　昭和40年頃空撮

第55図版　調査区全景（南から）



第56図版　南の段（低位部）

第57図版　河川（大沼川）

第58図版　2号住居址（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	9
編著者名	谷山雅彦，武田恭彰，平井典子，前角和夫，高橋進一，松尾洋平，村上幸雄
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192　岡山県総社市中央一丁目1番1号　TEL 0866－92－8363
発行年月日	西暦1999年12月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ふなやまいせき 舟山遺跡 ふなやま3ごうふん 舟山3号墳	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 くしろ 久代	33-208		34° 40′ 25″	133° 42′ 8″	1998. 07.24～ 08.30	300m²	老人ホーム建設に伴う事前調査
いきやまいせき イキ山遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 ながら 長良			34° 41′ 15″	133° 47′ 45″	1999. 02.08～ 02.12	80m²	農村集落排水事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舟山遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居，掘穴柱建物，溝	弥生土器，石器	
舟山3号墳	古墳	古墳時代	同溝	埴輪	
イキ山遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居 竪穴住居，溝	須恵器，鉄製品	

総社市埋蔵文化財調査年報 9

1999年 12 月 31 日　印刷
1999年 12 月 31 日　発行

編集発行　総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印　　刷　柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号